384
43

始

蘇峰　德富猪一郎著

近世日本國民史

織田氏時代　中篇

東京　民友社　發行

384-43

近世日本國民史

織田氏時代

中篇

大正
8. 6. 26
内交

毛利元就肖像　〔出雲鰐淵寺所藏〕

織田氏時代中篇刊行に就て

修史事業は著者生存の重なる理由

織田氏時代中篇を刊行するに際し、聊か數言を陳するの自由を容されよ。著者は修史の事業を、決して苦痛とは思はぬ。但だ卽今では、此の事業を以て、著者の生存の重なる理由の、一片として居る。著者は『國民新聞』に關する、當然の職務に鞅掌する他は、殆んど一切の精力と、時間とを、此の事業に傾倒して居る。是が爲めに、殆んど世間的交際を、謝絶した。是が爲めに、大なる義理を缺かぬ程度に於て、周邊とは一切干係を斷つた。而して『一日不レ作一日不レ食』の覺悟を以て、孜々、兀々として、毎日近世史の幾頁宛かを、書き綴りつゝある。

本書著述

著者の所志は、誰者が『近世日本國民史』を讀んでも、若干の興味と、諷示と、

の所志と希望

教訓とを得可きものたらしむる事に存する。老人にも、青年にも、婦人にも、壯夫にも、或は普通一般の讀者にも、或は政治家、軍人、實業家、教育家、宗教家、其他特種の階級の人にも、苟も之を讀む人には、必らず何物かを、寄貽す可きものたらしむる事に存する。併し是れは著者の理想で、棒程希うて針程叶ふや、否や、それさへ覺束なく思ふ。

極力信長の時代に就て語る

或は餘りに、信長の個人的叙述に偏し、織田氏時代の歴史よりも、信長其人の傳記ではないかとの批難も、出で來るであらう。併し著者が、極力信長其人に就て語るは、乃ち信長の時代に就て、語るのぢや。何となれば信長は、時代の代表的人物であるからだ。されば一個の信長を叙するは、取りも直さず、同時に輩出したる無數の小信長を、叙する所以ではあるまい乎。

著者には著者相應の見所

著者は成る可く、既定の史實に基き、既出の史書に據り、故らに拗僻、新異の資料を援て、前人の斷案を翻さんと試みるが如き事を避けて居る。但だ同一の東海道五十三驛でも、探幽のスケッチと、廣重の錦繪とは、自から趣が殊な

事實の覈査と著者の經驗

る。同一の富士山でも、百人の畫家に描かしむれば、百樣の富士山となる。如何に古人の熟路を辿りても、著者には著者相應の見所がある可き筈だ。果して然らば、熟路を避けて、曲徑を歩かねばならぬ理由、焉くにある乎。

著者は三十年來、新聞事業に從うて居る。されば所謂る事實なるものゝ覈査に就ては、聊か若干の經驗を有して居る。現在其の場所に在りて、其事を傳ふるに、十人が十人同じくない。斯く現場目擊の新聞探訪者の手帳が、餘りに當てにならぬならば、世上の噂を傳聞して、筆記したる、公家や、坊主の日記とて、固より悉く當てになる可きものでない。然るに其の一行、一句を見出して、從前の成案を飜し、鬼の首でも取りたる樣に、彼是云ひ囃すは、全く素人了見と云はねばならぬ。併し當てにならぬとて、又た全く捨てたものでもない。要するに世の中の事は、嘘の中に實あり、實の中に嘘ありで、此れを判別するが、史家の能事と云ふ可きであらう。

歴史家の

併し新聞にせよ、舊聞にせよ。間違ひの多きは、枝葉の點にありて、大體の事

第一義諦は大處大觀

に就ては、却て其の間違が少い。固より中には、新たなる事實の發見によりて、前人の斷案を、根柢より覆す可き事もあるが、斯る場合は、概して稀有だ。著者は古人の所謂る信を以て、信を傳へ、疑を以て、疑を傳ふの例に則り、異說の存する際には、之れを歷擧して、概ね讀者諸君の判斷に一任することゝした。歷史に大切なのは、其の歸著點である。此に達する道行は、如何なる筋を辿りても、大なる妨げはない。歷史家の第一義諦は、大處大觀である。樹木の吟味も、無用ではないが、それよりも大切なのは、森の測量だ。

歷史は人と境遇との接觸の記錄

歷史は或る意味に於ては、人と、境遇との接觸の記錄である。境遇も人により て變るが、人も境遇によりて換る。世の中には、人間を型から打ち出した樣に思ふ者もあるが、此れ程大なる間違はない。其の同じき境遇に投ずれば、百人も一人となる。其の異りたる境遇に措けば、一人も百人となる。同中異あり、異中同あり、此の變化、倏忽、端睨す可らざる裡に、自から歷史の妙味は存するものだ。

人間に眞醇の者なし

如何なる濁水でも、之を分析すれば、若干の含有物がある。如何なる單純なる人間でも、苟も人間として、眞醇の者はない。但だ善分多きを善人と云ひ、惡分多きを惡人と云ふのぢや。乃ち善人も、惡人も、程度の問題ぢや。善人は何處迄も善、惡人は何處迄も惡と、宛も先天的に善人種族と、惡人種族と、分類せられて、產れ出でたる如く見做すは、人間を全く塑像視する者ぢや。

大禁物は歷史的人物の塑像視

滿腹の場合には、盜跖も食を讓り、空腹の場合には、伯夷も食を爭ふ。人の一生は、其の境遇によりて、幾回の變遷あり。奈翁三世も、巴里大博覽會前後に死したらば、長へに大奈翁を辱しめざる賢姪として、英名を殘したであらう。獨逸皇帝も、今より半個年前に逝かしめば、尙ほ世界的大覇者の未成品として、惜しまれたであらう。賢者必らずしも、恆に賢ならず。愚者必らずしも、恆に愚ならず。吾人が歷史的人物を取扱ふには、人間は寒暖計の如く、周圍の溫度の高低如何によりて、昇降するものとして見ねばならぬ。大禁物は、歷史的人物を、塑像視する事である。

世間舞文曲筆の已むを得ざる次第

それたゞ塑像視するが故に、其の論理的辻褄を合す可く、無理が出で來るのだ。即ち惡人は何處迄も、惡人らしくせねばならぬ故に、惡人の善行も、惡行とせねばならず。善人は何處迄も、善人とせねばならぬ故に、善人の惡行も善行とせねばならず。此に於てか所謂る舞文、曲筆の已むを得ざる次第とはなるのだ。朱子の通鑑綱目や、馬琴の八犬傳や、何れも此の謬見の爲めに、囚はれたる適例である。彼等は賴れぬに、自から辯護士となりて、辯護し、役目でもなきに、自から檢察官となりて、彈糾し、餘計なる苦勞を、自からせねばならぬ破目に、陷つたのぢや。

變化の中の一致の中の一致の中の變化

但だ如何なる境遇の變化中に、打ち込んでも、其人の特色は、悉く失墜する譯には參らぬ。吾人は人間は時々、刻々、境遇と與に變化する、活物であるを認むると與に。如何なる變化の中にも、自から抛却し得ざる、性格あることを認めねばならぬ。此に於てか變化の中に一致あり、一致の中に變化ありとは云ふことが可能ふ。

社會の人を三者に分類す

社會の人を分類して、一代の氣運を作爲する人と、一代の氣運に支配せらるゝ人との、二者と爲す。されど著者は、寧ろ氣運に先つ人、氣運に伴ふ人、氣運に後るゝ人の三者に分類するを、恰當と信ずる。社會の進行は、一大縱列行軍の如く、前進者あり、中央本隊者あり、後列者あり。前進者必らずしも、氣運の創造者でない。或る場合には、氣運の敏感者と云ふ可きであらう。彼等は其の神經の鋭敏にして、他に先じて之を感得し、此が爲めに自から社會の急先鋒たるを、禁ずる能はざるに至るのだ。

時代により三者間の隔遠と三者交替の緩急を來す

然も同一人にして、時に前進者となり、時に後列者、若しくは落伍者となるものなきにあらず。是れが則ち、人間の活物たる所以ぢや。吾人は昨日の過激黨が、今日の保守黨たるを、怪しむ可き理由はない。世の中が進んで、當人が進まねば、斯くあるのも、不思議はない。但だ世の中も變る、其の中なる個人も變る。然も變らぬものは、如何なる社會でも、時勢の率先者、時勢の隨伴者、時勢の落伍者の、三者の分類がある事だ。而して社會の微動しつゝある時代と、

大動しつゝある時代とによりて、三者の間隔に近遠を來たし、三者相互の交替に、緩急を及ぼすは、勿論の事と思ふ。

以上は唯だ著者の管見の一斑を、陳べたるに過ぎぬ。併し讀者諸君にして、若し之を理會して、而して後拙著に接せられん乎、其の得る所、必らず多大であらう。何となれば著者は、自から解説するよりも、寧ろ讀者諸君の自得を、期待して居るからである。人間其物、社會其物に就ての理會なき限りは、歴史は全く無味、乾燥なる、一個の過去帳に過ぎぬのだ。

寧ろ讀者諸君の自得を期待

著者の目的と讀者諸君の同情

拙著は、或る意味に於ては、前人の勞力の結果を、資料として利用したる、一種のモザイック細工の如きものだ。モザイック細工は、餘り近寄りて之を見れば、寧ろ剪鏤の痕が、甚だ著明に過ぎて、其の統一を缺くかの如き感がある。然も或る距離を隔てゝ、之を眺むれば、亦た一種の美觀がないでもない。著者の苦心は、毎節、毎回、毎章の上に存せずして、少くとも各篇の上に存して居る。而して著者の目的は、モザイックの合天井の如き、精巧、美妙のものを、

構成するにあらずして、寧ろ宏壯、雄麗なる羅馬の聖彼得寺院の如き、若しくは君府の聖蘇希亞殿堂の如き、大伽藍の建築である。但だ憾む所は、力の之に副はざる一事だ。然も其の微力を忘れて、日夜此業に從ふ所以は、讀者諸君の同情に頼む所、決して少くないからだ。

勞其中に在れば樂も亦其中に在り

惟ふに新井白石が、藩翰譜を編するや、元祿十四年正月、甲府參議綱豐卿（後に六代將軍家宣）の命を承け、同年七月に起稿し、十月に脫稿し、自から淨書し、翌十五年二月には、之を上つた。當時彼が四十五歳の、最も膏の乘りたる年齡であつたとは云へ、其の雄文、快筆、實に驚く可きものだ。著者の如きは、自から顧みて、眞に跛鼈の青天を覩て、之に達せんとする心地がある。然も勞其中にあれば、樂も亦た其中にある。若し寛大なる讀者諸君が、著者の樂を樂とし、著者をして、徐ろに其の志を達するを得せしめば、著者に取りて、是れより以上の幸福はない。

大正七年十一月六日　青山艸堂に於て

蘇峰學人

例言

一　本篇には、織田氏時代前篇に掲げたる例言の各項を、悉く皆な襲用す。讀者請ふ之を諒せよ。

一　本篇は、織田氏時代前篇と、至緊至密の脈絡あり。故に本篇の讀者は、併せて前篇を一讀し、而して前篇の讀者も、亦た本篇を一讀せられんことを望む。

一　『織田氏時代中篇刊行に就て』と、『感懷一片』とは、著者が本篇を世に問ふの前後に於て、特に起稿したるもの也。大方の君子、希くは著者意想の存する所を、看取するに足らむ歟。

一　著者今春以來、不慮の病に罹りしに拘らず。大なる延滯を見ずして、本篇

を刊行するを得たるは、偏に前篇以來引續き、著者を援助せられたる諸君の惠に據る。就中並木仙太郎君の勞、尤も多し、特に記して之を謝す。

一　織田氏時代後篇も、今秋冬の期には、之を刊行し、本年中に織田氏時代全部の完成を期す。

大正八年五月廿三日　於　相州湯河原

著者

近世日本國民史　織田氏時代　中篇　目次

織田氏時代中篇刊行に就て

第一章　天正時代の日本
一　天正元年の日本……一
二　天正時代の日本人……五
三　生活と流行……一〇
第二章　信長の勢力京都及び近江伊勢に震ふ
四　信長の意氣……一五

註　公方義昭廻織田信長御半不和の事〔吉田物語〕……一九
五　朝倉退治……二三
註　北國勢退散刀禰坂合戰の事〔總見記〕……二八
六　朝倉家の沒落……三〇
註　朝倉義景最後の事〔總見記〕……三四
七　淺井家の沒落……三七
註　淺井長政最後の事〔淺井日記〕……四三
八　公家としての信長……四六
註　信長蘭奢待を截る事〔東大寺蘭奢待傳來書〕……五〇
九　長島全滅……五一
第三章　長篠役前の形勢
一〇　武田勝頼……五七
註　勝頼決して侮る可からず〔山路愛山著『德川家康』〕……六一
一一　信玄死後の形勢……六二
一二　明智城と高天神城……六六
一三　大賀彌四郎……七〇
一四　大賀餘論……七四
註　家康彌四郎が事を悔ゆる事〔東武談叢、東僊基業、御遺訓、今村大岡山田家譜〕……七八
一五　長篠城の嬰守……七九
註　長篠城攻守の狀況〔寺崎志賀左衞門覺書〕……八三
一六　死せる信玄生ける信長……八四
一七　鳥居强右衞門……八八
註　書二鳥井勝高死節後一〔息軒遺稿〕……九二
第四章　長篠戰爭

一八　武田方の軍評定……九四
一九　彼我の形勢……九八
二〇　兩軍對峙……一〇二
二一　長篠戰爭……一〇六
註　勝賴敗軍立退の事〔長篠合戰物語〕……一一〇
二二　長篠戰爭餘談……一一一
註　長篠役彼我の戰術と武器とに就て〔押上森藏　寄〕……一一五
二三　長篠戰爭の影響……一一八
註　奥平貞昌武勇感賞の事〔東照宮御實記附錄〕……一二二

第五章　北陸經略

二四　越前門徒退治（一）……一二四
二五　越前門徒退治（二）……一二八
註　下間筑後法橋最後の事〔總見記〕……一三二
二六　北陸經略の端緒……一三三

第六章　信長の進一歩

二七　文明政治家としての信長……一四〇
二八　京都と信長……一四五
二九　何故に安土城を經營したる乎……一五一

第七章　安土城及安土

三〇　安土城の經營……一五六
三一　安土城の結構……一六〇
三二　安土城と其の作者……一六五
註　江州安土山記文事〔總見記〕……一六九

三三　城下町としての安土……一七一

第八章　上杉謙信の末路

三四　信長と謙信の衝突……一七六
三五　織田上杉の斷交……一八〇
註　謙信の北陸平定と上京の企畫〔布施秀治著『上杉謙信傳』〕……一八五
三六　關東と北陸……一九〇
三七　上杉謙信逝く……一九五
註　謙信の死と景勝景虎家督爭ひの事〔太祖一代軍記〕……一九九
三八　謙信の人物……二〇一
註　上杉謙信〔賴山陽〕……二〇五
註　上杉謙信論〔逸史〕……二〇五
註　『上杉輝虎及び其死』の一節〔山路愛山著『德川家康』〕……二〇五

第九章　九州に於ける耶蘇教

三九　撤美惠去後の耶蘇教……二〇九
四〇　豐後府內……二一三
四一　大友氏と耶蘇教……二一八
註　宗麟公惡逆之事〔大友記〕……二二一
四二　平戸と耶蘇教（一）……二二三
四三　平戸と耶蘇教（二）……二二七
註　松浦氏と平戸〔貿易史上の平戸〕……二三二
註　葡萄牙人と伊藤甚三郎ノ爭鬪の事〔伴天連記〕……二三二
四四　大村純忠と耶蘇教……二三三
註　大村純忠の事ども〔大友記〕……二三七
四五　長崎開港……二三九

註　黑船入津始之事〔長崎夜話草〕……二四二

第十章　上國に於ける耶蘇教

四六　京都に於ける耶蘇教……二四四
四七　近畿に於ける耶蘇教……二四七
四八　耶蘇教傳播各種の理由……二五二
註　退治邪宗論の一節〔南禪寺雲窓『闢邪管見錄』〕……二五五
四九　最初の宣教師……二五七

第十一章　信長と耶蘇教の關係

五〇　信長と耶蘇教……二六二
五一　信長と宣教師との會見……二六六
五二　耶蘇教と其の反對者……二七〇

五三　朝山日乘……二七五
註　日乘の墓と子孫〔三浦周行著『歷史と人物』〕……二七九
五四　共同の敵を有す……二八〇
五五　宣教師フロエー……二八四
五六　宣教師オルガンチノ……二八八
五七　信長とオルガンチノ……二九二
五八　信長とワリニャーニ……二九六
五九　信長遂に悔いず……三〇一

第十二章　毛利氏の勃興

六〇　毛利氏と織田氏……三〇六
註　頼山陽の永祿元龜三大戰論〔日本政記〕……三一〇
六一　毛利氏の起源……三一一

註　洞春公略譜の一節〔洞春公略譜〕……三一五
六二　元就と大内氏……三一六
註　尼子氏由來の事　晴久吉田發向評議之事〔吉田物語〕……三二〇
六三　地味なる元就……三二三
註　大内家由來之事〔吉田物語〕……三二六

第十三章　毛利元就と陶晴賢

六四　毛利と陶……三二九
六五　元就の反間……三三三
六六　毛利と陶との對抗……三三七
六七　嚴島合戰……三四一
註　陶入道嚴島渡海并合戰の事〔藝侯三家誌〕……三四五
註　弘中參河守同中務最後の事〔藝侯三家誌〕……三五一
註　陶入道全叢最後の事〔藝侯三家誌〕……三五二
六八　嚴島大捷の影響……三五四
六九　元就と勤王……三五八
註　賴山陽の毛利元就論〔日本外史〕……三六二

第十四章　元就と山陰道

七〇　石見出雲の經略（一）……三六四
七一　石見出雲の經略（二）……三六八
七二　尼子氏の滅亡……三七二
註　尼子義久下城の事〔藝侯三家誌〕……三七六

第十五章　毛利元就の人物

七三　元就の晚年……三八〇

註　立花の城明渡の事〔陰德太平記〕……三八四
七四　元就と氏康……三八五
註　北條氏康和歌の事〔北條五代記〕……三八九
七五　三子への遺誡……三九二
註　元就の詠草中より〔春霞集〕……三九八
註　元就公の事ども〔吉田物語〕……三九八

第十六章　織田氏及び其敵

七六　元就死後の毛利氏……四〇一
註　浦上宗景並宇喜田直家之事〔陰德太平記〕……四〇五
註　吉川元春の逃懐〔藩鑑引二陰德太平記一〕……四一二
七七　織田氏と毛利氏の接觸（一）……四一四
七八　織田氏と毛利氏の接觸（二）……四一八
七九　織田、毛利、及本願寺（一）……四二二
八〇　織田、毛利、及本願寺（二）……四二六
八一　毛利、上杉、及び信長……四三〇

第十七章　松永久秀

八二　松永久秀の謀反……四三六
八三　松永久秀の死……四四〇
八四　松永久秀の性格（一）……四四五
註　作物記之事〔信長記〕……四四八
八五　松永久秀の性格（二）……四五〇

第十八章　中國役の起端

八六　信長の中國經略……四五四

八七　中國役の首途……四五八
註　秀吉中國役首途の諸戰報〔長濱共濟文庫所藏〕……四六二
註　黑田孝高の先見〔松永道齋聞書〕……四六四
八八　播州形勢一變す……四六五
註　別所長治の反抗〔別所長治記〕……四六九
八九　上月城の攻守……四七二
九〇　上月城の陷落……四七七
註　山中鹿之助最後の事〔陰德太平記〕……四八二
九一　宇喜多氏の去就……四八五
九二　別所退治……四八九
第十九章　荒木村重討伐
九三　荒木村重の謀反……四九四
九四　織田氏の水軍……四九八
註　九鬼嘉隆の戰功〔藩鑑引二九鬼家由來書一、志摩軍記、多聞院日記略〕……五〇三
九五　高山右近……五〇五
九六　伊丹籠城……五一〇
九七　荒木謀反の落著……五一五
第二十章　山陰道と明智
九八　丹波の攻略……五二一
九九　波多野秀治の滅亡……五二五
註　波多野秀治の勤王〔柏原藩史〕……五二九
一〇〇　明智光秀……五三〇
註　丹波國諸所合戰並惟任光秀諸處働之事〔陰德太平記〕……五三五
感懷一片……五四一

年表

其一　時代年表……一―一九
其二　人物年表……二〇―八〇

索引

……一―二二

挿入肖像、地圖、戰圖

一　毛利元就肖像……〔出雲鰐淵寺所藏〕……卷首
一　天正五年群雄割據圖……卷首
一　長篠城概圖……〔(一五)長篠城の嬰守〕……七九
一　武田德川織田三家領地圖……〔(一九)彼我の形勢〕……九八
一　長篠戰圖……〔(二一)長篠戰爭〕……一〇六
一　安土山古蹟圖……〔(三〇)安土城の經營〕……一五六
一　嚴島戰圖……〔(六七)嚴嶋合戰〕……三四一

朝鮮
宗
對馬
壹岐
筑前
長門
肥前
豐前
豐後
筑後
有馬
大友宗麟
義鎮
肥後
豐後
島津
義久
日向
大隅
薩摩
島津
義久

天正五年群雄割據圖

朝鮮
蝦夷
崎物
宗
對馬
壱岐
肥前
筑前
有馬
筑後
大友宗麟
肥後
豐後
島津義久
薩摩
日向
大隅
長門
石見
毛利輝元
安芸
周防
出雲
吉川元春
小早川隆景
備後
備中
伯耆
因幡
吉川元春
山名豐國
山名宗詮
但馬
丹後
美作
宇喜多直家
備前
播磨
淡路
讃岐
河野通宣
伊予
長宗我部元親
土佐
細川真之
三好存保
阿波
紀伊
根來
和泉
摂津
丹波
山城
畿内
大和
伊賀
伊勢
志摩
尾張
若狭
一色義道
越前
朝倉
加賀
能登
越中
上杉謙信
佐渡
越後
上杉謙信
南部信直
秋田愛季
小野寺
最上義光
大宝寺義氏
出羽
陸奥
大崎
伊達
輝宗
田村
岩城
芦名盛隆
白川
佐竹義重
常陸
下野
那須
信濃
上野
武田勝頼
甲斐
武蔵
北條氏政
相模
千葉
下總
古河義氏朝臣
結城晴朝
上總
里見義弘
安房
伊豆
駿河
三河
遠江
本願寺
徳川家康
美濃
織田信長
武田信玄
上杉謙信
伊勢
志摩
紀伊

近世日本國民史

織田氏時代 中篇

蘇峰學人

第壹章　天正時代の日本

【一】天正元年の日本

足利氏名實の全滅

嚴正に云へば、織田時代は、信長が元龜四年（天正元年）七月、將軍義昭を追放し、自から天皇の下に、天下の政柄を掌らんとしたる時より、天正十年六月、本能寺の變に、其の最期を遂ぐる迄、約十個年である。足利氏の亡びたるや久し。されど永祿八年、將軍義輝が、三好、松永等に弑せらるゝ迄は、兎

も角も虚器を擁して居た。即ち建武二年、足利尊氏が、征夷大將軍の位を僭して以來、十四代、二百三十一年。それに義昭を加へ、永祿九年より、元龜四年間の八年を算すれば、十五代、二百三十九年。此に於て足利氏は、名實共に全く滅びた。

名實與に信長の時代＝日本全國の形勢

此れと同時に、信長は名實與に、時代の主人公となつた。然も彼は唯だ中央の要部を支配した迄で、日本全國を見渡せば、依然たる群雄割據である。本願寺は依然として、京畿の咽喉なる大阪に龍蟠した。淺井、朝倉は、江州の一揆と與に、動もすれば信長の京都、岐阜間の連絡線路を、遮斷せんとした。紀州の雜賀、伊勢灣の長島、何れも油斷は出來ぬ。

家康、勝頼、氏政、謙信

驕て東海道を見れば、家康は信玄の大軍に、昨年來打擊を受け、尋常ならぬ痛手を負うたが、才かに信玄の死去で、姑らく一息をついた。然も其子の勝頼は、今川氏眞ではなかつた。彼は父程の智略はないが、鬪將としては、天下に比倫少き一人である。彼在るが爲めに、信長をして背顧の憂を絶たざらしむる、約十年の歳月を要した。關東には北條氏政が、其父氏康の舊業を繼紹して、守りて失ふことなかつた。越後の謙信は、只管ら信玄退治の計策を講じつゝあつたが、端なく其の對手を失うて、茫然自失の態なきにしもあらずだ。然も彼が第二の信玄となりて、信長に鋒を向け來る迄には、今後四五年を要した。

東北方面と伊達氏

東北方面には、會津に蘆名氏あり、山形に最上氏あり、米澤に伊達氏あり。而して伊達氏最も上國に通じ、其志小ならずであつた。伊達晴宗は、將軍義晴より、其子輝宗は、將軍義輝より、何れも偏諱を受けた。而して晴宗は、奥州探題であつて、其の資望は、自から高かつた。伊達氏は、結婚政策と、陰謀と、兵力とによりて、漸次奥羽の間に、其の勢力を伸長した。而して信長とも消息を通じ、互ひに利用し、且つ利用せられた。

四國と長曾我部氏の勃興

四國の三好一黨は、概ね信長に降つた。然も四國に於て、最も目醒ましきは、土佐なる長曾我部氏の勃興である。長曾我部國親は、永祿三年に逝いたが、其子元親に至りて、國司一條氏と、仁淀川を堺として、土佐を分割し、遂には一條氏

中國と毛利一家の勢力

を併せ、進んで兵を阿波、讃岐、伊豫に出だし、四國を掩有せんとした。其の對岸の中國に於ては、毛利元就既に逝くも、其の遺業は、其の二子吉川元春、小早川隆景によりて、倍〻充實せられ、擴大せられ、山陽、山陰に鬱然たる大勢圏を成した。而して其の勢力は、四國、九州、畿内迄も、衣被せんとした。信長の勢力が西漸するに際し、到底衝突を免かれざるは、此の勢力であつた。其他播州に別所、小寺等あり、出雲に尼子氏あり、備前に宇喜多氏あり。

九州方面の諸大名

是等は概ね皆な、信長勢力未達の地であつた。

九州方面は小貳氏に代りて、龍造寺氏起り、大友氏と相爭うた。大友氏は、豐後を本據として、豐前、筑前、肥後、筑後に、其の勢圏を擴張したるも、一たび龍造寺氏と戰うて、交綏し、更らに嶋津氏と爭うて、大敗を招き、遂に振ふなきに至つた。

九州の一大雄鎮島津氏

嶋津氏は、貴久の子義久に至りて、其の宿敵たる日向の伊東氏を破り、大友氏を破り、龍造寺氏を破り、遂に九州の一大雄鎮となつた。然も天下の大勢に

九州小大名の耶蘇教利用と外國貿易

は、殆んど何等の影響をも、與へなかつた。

但だ看逃し難きは、九州の小大名たる、大村、有馬、松浦諸氏が、大友氏と與に、耶蘇教に歸依し、若くは耶蘇教を利用し、盛んに外國貿易を營んだことである。世の中は複雜ぢや、一方には日本國中戰爭酣なるに、他方には外國との商賣取引が、盛んに流行して居た。而して耶蘇教も亦た、其の副産物として、追々弘通して來た。

當時の國民生活と耶蘇宣教師の文書

【二】天正時代の日本人

當時に於ける、國民の生活情態は、奈何。吾人は幸に耶蘇宣教師等の書き殘したる、文書の中に於て、其の約略を知ることが出來る

日本國には、各地方に、澤山の獨立の君主がある、故に恒に爭鬪が絶えぬ。乃

貴族と貧乏者の家屋

ち日本全國が、丸るで一大戰場の樣である。

貴族は二階作りの美屋に住む。一階は外方にありて、家族等住み、主人は二階に居る。又た立派な別室がある。畫壁金屏、人目を炫耀す。床には名畫を掲げ、花瓶は異香ある花を挿み、茶器、刀劍等を飾り置く。平民は木造屋にて、金持は白堊を塗り、屋根は片板を以て、瓦に代へ、貧乏者は藁葺で、粘土の壁ぢや。此類の家が最も多くある。

日本人の幹と精神の活潑敏

日本人は概ね强壯にて、戰鬪に堪ふ。容貌は橄欖色で、軀幹は先づ中等ぢや。精神は活潑で、擧動は敏捷ぢや。少年は頭髮の前部を剃り、職工、農夫等は其の半を削り落し、貴族は全部の頭髮を蓄へ、後部に髻を結ぶ。日本人は如何にも辛抱力が强い。飢渴、寒暑にも、屈せず、勤勞にも倦まず、如何なる困苦にも、堪へ忍ぶ美質を持て居る。職工、農夫迄も、歐洲のそれとは、丸るで反對に、尊敬、丁寧、良とに上品で、恰も宮中で教育を受けた樣に見受らるゝ。概して言へば、日本人は活潑、頴敏で、聞見を展むるに急に、理に鋭く、義に勇む風がある。撒美惠師の書翰にも、日本人は能く予が言を諦聽し、其の質問を發するや敏捷に、一たび會得すれば、必らず之を實行すとあるが、先づ其の通りぢや。

武術の練習と刀劍の鋭利

日本人の最も練習するは、武術也。男子は十二歳より、刀を佩び、夜間休憩の他は、之を脱がぬ。睡時も之を枕頭に措く。武器は劍、短劍、槍、弓、小銃等がある。然も刀劍の鋭利は、歐洲の劍を兩斷しても、其刃に何等の痕跡を、殘さない程である。日本人は武を尊び、刀劍を其の徽象として、最も之を大切にし、其の裝飾等にも頗る意を用ひ、互ひに之を誇耀して居る。

一定の更衣期と婦人衣服の華美

日本人には、一年間、一定の更衣期がある。其の期日に至れば、皆な其の衣服を、季節相應のものに更たむ。婦人の衣服の華美なるは、日本に及ぶものがない。首飾はそれ程仰山でもないが、可なりに見る可きものがある。頭髮は巧に頭の後部に垂下し、絲を以て結んで居る。眞珠の指輪、金銀縫箔の帶、五襲より十二襲に至る、精美なる絹衣、實に美麗のものぢや。平民の著衣は、其の膝

頭に止まる。都市、村落の別なく、刀を帶び、何れも杖を持つて居る。男女に拘らず、皆な扇子を携へ、貴人は門外に出る時には、僕從等日傘を差掛く。

日本高貴の婦人

日本高貴の婦人程、好遇せらるゝものはない。居室は善美を盡し、庭に花卉あり、池に魚鳥あり、女孺五十人乃至二百人奉仕し、一として意の如くならざるなし。但だ規律嚴にして、自由を妨ぐるのみだ。配合は一夫一婦であるが、些細の事にて、其婦を離別するとは、珍らしくない。

日本人の食饌

日本人の食饌は、清潔にして、美を盡くして居る。室内には、履物を脱して進む。何れも坐して脚を屈す。食卓は一人一卓で、方形にして、低き一の脚がある。食饌の更はる毎に、其器を改む。食卓には畫きたるもの、漆したるもの、金銀を鏤め蒔繪したるもの、何れも精巧である。客を招けば、先づ茶菓を供して、酒饌に及ぶ。中等以下の人は、米、野菜、魚肉を常食とす。富者は美食に誇り、肉菜を盛り立、時として鳥の全體を用ひ、脚を去らず、嘴を飾るに、金を以てするとがある。肉叉、匙、刀を用ひず、唯だ箸を用ふ。箸は象牙、杉、其他香木にて、長さ一尺餘。

日本人の飲料

日本人の飲料は、滾湯に茶葉を入れたるものだ。貴人は總て此の茶葉を珍重し、之を用ふる器は、木、泥、或は鐵製にて、主人自から之を調理し、自から之を護持す。一五八六年（天正十四年）豐後の國主大友宗麟が、教師ワリニヤーニに示したる、泥造の一小茶器は、一萬四千『デュカー』にて買ひ得たと云うた。

日本人と名譽の尊重

日本人一般の氣質として、名譽を重んじ、他より賤しめ、下げすまるゝことを、嫌忌、憤激すると、到底外國人の想像の及ぶ所でない。要するに日本人は、事事物々、此の名譽、面目の爲めに拘束せられて、其の動作をなしつゝある。例へば人に雇役せらるゝものにても、若し雇主の待遇其意に適せざれば、直ちに去る。多言を卑み、愁訴を怯とし、感覺の強鋭者は、婦女子の類とし、親友にも憂苦を告げず。是れは我が柔儒を示すを欲せぬからだ。盜賊を惡くみ、貪慾を賤しめ、不正を嫌ふ。親に孝に、貧困を恥とせぬ。其の勇猛にして、堪忍力の強さは、實に測知す可らざるものがある。

頌德表か缺點暴露か

以上は彼等の目に映じたる、一斑だ。吾人より觀察すれば、何となく日本人の頌德表の如くも見える。併し其の裡面には、日本人の缺點も、自から暴露するかの如くにも思はるゝ。

【三】生活と流行

國民生活狀態の漸進

室町時代の末期より、元龜、天正にかけては、國民の生活情態も、漸次に進歩した樣に思はるゝ。此れは富の進歩が、其の原因であり、而して富の進歩は、支那との交通、延いて南蠻人、西洋人との交通に由來する所、恐らくは少からずであつたらう。

當時京都の物價

當時京都の物價は、漆四十貫目にて、錢五百文、砂糖一斤が、百四十文、蜜は四百六十八文、酒は三斗三升で、三百三十文、緞子は一端三貫四百文、布一端は鑑錢八百文、鹽一斗六升を、米一斗、綿十五把を、五石七斗、昆布一束（五十本）を一斗三升、墨五十梃を、一石六斗に換へた。賣買には錢を用ふ可しとの法令はあつたが、依然米を通貨の代りとしたる者が、多かつた。（國史眼）軍國の多事につけて、鑛業も大いに進歩した。金銀の產出も、恐らくは此の時代に、鮮少ではなかつたであらう。又た農業も、必要上漸次改良せられたであらう。

喫茶の流行と茶器

喫茶の事は、當時來朝したる西洋人の目にも、異常に映ずる程にて、頗る流行した。此れは上下を通じての事であつた。足利氏は衰へた、併し足利氏により て奬勵せられた數寄の道は、却て隆盛になつた。當時の最急進黨、舊習破壞の大先達であつた信長さへも、入洛すると同時に、茶器を漁り、堺の富豪より徵發し。松永久秀の如き、本願寺の如き、信長に對し、謀反の過料に、茶器献上で、其の首尾を繕うたるかを見れば、其の消息が解せらるゝであらう。

茶と其の流行時代

改めて講釋する迄もなく、茶は鎌倉時代に行はれ、建仁寺の千光國師には、喫茶養生論の著があり、拇尾の明慧上人も、茶を栽培したが。其の最も流行し出

茶事の先達珠光と紹鷗及び千利休

したのは、東山義政以後と云うてもよからう。而して義政に茶事を傳授したのは、南都稱名寺の僧珠光ぢや。當時京都の大德寺に、宋より渡來した臺子があつたが、誰も其の何の道具であるかを知らぬ。然るに珠光は、其の茶器である ことを知りて、始めて之を用ひた。それは風爐、釜、熟盂、分盞建、炭撾、建水等である。珠光の後に紹鷗が堺に起つた。彼は元來、武田因幡守てふ武人であつたが、剃髪して一閑齋紹鷗と號した。信長時代には、彼の流儀が大いに行はれた。其の門人が、千利休ぢや。而して民間では、道傍に茶を煮て、一盞一錢で賣つたものぢや。

和歌の下火と連歌の繁昌

當時和歌は、聊か下火となり、連歌が最も繁昌した。東山時代に出でたる連歌師の開山、宗祇を首として、爾後宗長、宗牧抔、能く諸國を行脚した。而して五十句、百韵、甚だしきは千句に至るものがあつた。三好長慶が、連歌の會に出席の際、

すゝきにまじる葦の一むら

三好長慶の連歌

の一句出で來り、人々附句に當惑中、折から長慶に使者來りて、一封の書簡を渡した。彼は之を披見し、徐ろに之を收め、自から

沼水の淺き方より野となりて

の句を附け。改めて申す樣、只今弟實休、和泉にて討死の報來る、されば今席は、此にて御免候へと、直ちに戰場に赴いたと云ふ話がある。明智光秀が愛宕山西坊の、連歌百韵興行の如きも、亦た挿話の一であらう。

能樂と狂言

能樂も亦た觀阿彌、世阿彌以來、彌よ盛んになり、種々の新曲が出來た。狂言も亦た、獨立の專門家が出來た。此れを見れば室町時代の、上流社會の面影が、今尚あり〳〵と眼前に髣髴する。又た幸若舞も流行した。今樣の歌、漸く廢せられて、小歌之に代つた。當時民間の流行歌中には、

幸若舞と小歌

一天四海をうち治めたまへば、國も動かぬあらがねの、土の車の我等まで、道狹からぬ大君の、みかげの國なるをば、一人せかまたまふな。

の類があつた。信長が平生愛誦したる敦盛も亦た、此の小歌の一ぢや。又た信

信長方と淺井方應答の小歌

長の兵が、淺井の小谷を攻むるや、
淺井が城はちひさい城や、あゝ、よい茶の子、朝茶の子。
と歌うた。淺井の兵は、
淺井が城を茶の子とおしやる、赤飯茶の子で強茶の子。
と答へた。而して更らに、
信長殿は橋の下のどら龜、ひよつと出て引込み〳〵、も一度でたら首を取ろ。
と嘲つた。

社會の一大平均力

一にうきこと金が崎、二にはうきこと志賀の陣、三に福島、野田ののさ口〳〵。是亦た世間が、信長の敗軍を嘲つた流行歌ぢや。龍に翼を添へたる如き信長でも、世間の口には、打ち勝つことは能はぬ。滿は損を招き、謙は益を受く。嫉妬其物は、香しからぬ物であるが、是亦た社會の一大平均力である。天下に宰たる人は、此の嫉妬を、如何に善く處理するかを、考慮せねばならぬ。

第二章　信長の勢力京都及び近江伊勢に震ふ

【四】信長の意氣

信長と義昭追放の事情

有體に云へば、信長が義昭を追放したるは、義昭が非信長同盟の張本であり、且つ公然信長に敵對したばかりでなく。最早義昭には、用がないからだ。信長は義昭を、詳しく言へば、足利將軍としての義昭を、利用し得らるゝ丈け利用して、此上は剩す所幾許もなく。又た信長の位置は、今となりては、何等彼を利用せねばならぬ、必要も無いからだ。信長は足利將軍家の暖簾を掛けなくとも、寧ろ信長の新舗で澤山であると、觀念したからだ。

信長と義昭殘黨の退治

信長は義昭を退治すると同時に、京攝に於ける其の殘黨を退治した。信長は上京放火に就て、地子錢、諸役錢を免除した。而して村井貞勝を所司代として、

其の政務を執行せしめた。斯くて元龜四年七月二十八日、改元ありて天正元年となつた。即ち年號と與に、一切が新奇になつた譯である。

＊　＊　＊　＊　＊

當時信長の意氣頗る旺盛

當時信長の意氣は、頗る旺盛であつた。彼の苦手たる信玄は、既に死した。恒に針の如く、蚊の如く、ちく〳〵彼を刺したる義昭は、隱れた。憚るものは、恐らくは謙信のみであつたであらう。さりとて別段畏るべき程の者でもなかつた。されば信長は、未だ天下を取らざるも、既に天下一と呑の氣分であつたらう。此れは予が想像ではない。當時毛利家より上國に使したる、安國寺惠瓊の手紙が、之を證明して居る。

信長義昭の葛藤と毛利家調停の使者惠瓊

信長と義昭との葛藤に際し、毛利家よりは、調停の爲めに、輝元、吉川元春、小早川隆景等より使者を遣はした。惠瓊は其の一人だ。彼等の歸るに際し、信長は『某は東國を治め、凶徒退治可レ仕候。毛利三家は、西地を悉く可レ被攻隨一候。左候て以後、輝元我等別て申合、天下の政を改め、窮民を救ひ可レ申候。三家の衆も、對二我等一無二別心一樣に、和僧能心得可レ被レ申と被レ仰、御暇被レ下一同に罷下候。』〔吉田物語〕とある。

信長毛利に甘言を昭ばす

信長は當分、毛利氏と釁を發らく積りでなかつた。彼は姑らく東方の經略を了し、而して後徐ろに、西方に著手せんとしたであらう。是れ巧慧なる惠瓊を介し、毛利家に向て、此の如き甘言を昭はしめたる所以だあらう。

惠瓊と上國形勢報告の書狀

使者の一人惠瓊は、途中浮田直家見舞の爲めに立寄り、書狀を以て、上國の形勢を元春、隆景に報じた。此れは長文であるが、其中の一二を揭ぐれば、

一　公方樣は、上下二十人の內にて、小船に召候て、紀州宮崎の浦と申す所へ御忍び候。信長も唯今討果可レ申にても無レ之候間、彼所に可レ有二御滯留一候。先々此國へ御下向なさ事をば隨分申極候、可二御心易一候。

義昭と毛利氏

此れにて義昭の毛利氏に寄ることは、毛利氏の欲する所でなかつたことが判知る。毛利三家等は成る可く、此の厄介物を近けざらんとしたのであつた。

一　日乘走舞異見、昔の周公旦太公望抔の樣に候。似合たる者出たる御事に

候。雖レ然仕過され候はで、今の分にて候ては、藝州御爲重寶、今度の調も、悉皆彼仁馳走にて候、唯あぶなく存候〳〵。藤吉などの取成迄、日乘にて候。是にて可レ有二御推量一候。

朝山日乘の卓厲風發

當時朝山日乘が、如何に卓厲風發、意氣軒昂で、信長の帷幄に切り廻しつゝあつたかは、此れにて想像するに餘りありだ。秀吉さへも日乘の取成にて、信長の手前を繕ふ程であれば、其の權勢の程も知る可しだ。其の日乘が餘りに仕過して、失脚せんことを危みたるは、流石に烱眼と云はねばならぬ。

惠瓊の天眼通的豫言

一　信長の代五年三年は可レ被レ持候。來年あたりは、公家などに可レ被レ成と見及候。左候て後高ころびにあふのけにころばれ候ずると見申候。藤吉さりとてはの者にて候。

是れ實に天正元年十二月十二日附である。當時に於て信長、秀吉の事を、斯迄豫言するとは、如何にも天眼通と云はねばならぬ。

但だ信長が百難を排し來り、漸く成功の七分に達せんとする當時に於て、既に其の十二分の後を、他より覬破せられたるは、意滿志驕の機微が、此際に流露したるが爲めであらう。將た秀吉が柴田、丹羽の徒に伍しつゝある間に、他日龍飛の徵候を看破せられたるも、其の鋒芒が自から穎脫した爲めであらう。何れにしても惠瓊と云ふ坊主は、油斷の出來ぬ坊主である。

油斷の出來ぬ坊主

義昭若江城へ退出

公方義昭卿織田信長御半不和之事

此折節義昭卿信長御半の儀被聞召、御取扱として輝元公よりは林木工允、安國寺惠瓊西堂、吉川殿よりは井下左衞門、小早川殿よりは兼久内藏丞被二差越一候、此衆上著仕、佐久間信盛木下藤吉日乘上人に致二相對一、御一命の儀御詫言申上候へば、信長被二聞召一、佐久間木下いか樣とも計ひ候へと被レ仰付、御一命無レ恙、同年七月十六日河内國若江の城へ御退出、御法體にて昌山公と申候、爰に義昭公の御味方に、和田伊賀守と申侍攝州に一城を構へ居候に付、信長馬を向られ候時、三箇の條目を書者に諸士の伺公の席に張せられ候、其三箇條は和田首を取候者には其賞いか程、又侍大將物頭を打取候者には其賞いか程、城の一番乘迫合の時先掛仕者には其賞いか程可レ被二宛行一候間、左樣に存し候者は其箇條に點をかけ面々の名書仕候樣にと書付られ候、各是を見候ても我こそ御書出の通に可レ仕と存候士無レ之候處に、生國攝州の侍中川瀬兵衞清秀と申者諸人の中を拔出、和田首と有レ之箇條に點を掛て姓名を記す、各是を見て如何可レ有レ之哉と申あへり、清秀は急き宿所に歸りて支度を調へ、敵城

和田の首と中川清秀

に赴き候時、清秀の妻女海老を吸物にして盃を出され候、海老は跡へ退く時早き物なるに依てなり、於二于今一中川の家には祝儀の時海老の吸物と承及候、瀬兵衛事、内々和田は自身城邊の夜廻り仕候とは聞及ひけれ共、男ぶりを不レ知處に、清秀常に軍神を祈念仕候印にや山伏一人風と來り候に付、清秀尋候は和田伊賀守は何方に居申候哉、山伏聞て彼所に居候と云、男ぶりはいか樣なる哉と問へは委細に物語仕候に付、最早打取たりと存じ城下の川を渡り河岸に柳一村有レ之候所に待居申候へば案の如く和田馬に乘下人幾召連候て夜廻り仕候、得と見すへ和田首を一刀に打落し提て河へ飛込此方の岸へ游き上り候、夜中と云ひ、川深く候に付下人追掛候儀不二相成一候故、清秀無二異儀一御本陣へ罷歸り、和田首を信長備二實檢一候へば御感不レ斜、則清秀身上御取立被レ成候、大將討れ候に付城抱へ申事不二相成一即時落去仕候、又渡邊宮内と申侍も義昭御味方仕り罷居候へ共、和田打死仕候に付信長へ降參仕候故、義昭若江に御滞留不二相成一和泉の堺へ御越被レ成夫より紀州へ御退去被レ遊候なり、

清秀和田の首を打取る

信長四人の使衆に對面

又右に記し申候此御方四人の御使衆信長へ御暇の儀申上候處に則御對面被レ遊候、其時西堂申上候は山中鹿之助儀雲伯兩國を望み申候通風聞御座候、於二事實一は御許容無レ之樣に御次手を以て申上候へと輝元申付候と申候へば、信長被二聞召一毛利三家に對し聊疎意不レ存候、鹿之助いか樣に申候共且以同心仕間敷候、某は東國ををさめ凶徒退治可レ仕候、毛利三家の衆は西地を悉く可レ被二攻鎮一候、左候て以後輝元我等別て申合天下の政を改め窮民を救ひ可レ申候、三家の衆も對二我等一無二別心一樣に和僧能心得可レ被レ申と被レ仰、御暇被レ下一同に罷下候刻、安國寺は浮田直家へ爲二見舞一參候に付、元春降景へ以二書狀一京都の趣信長行跡委細申上候其狀に曰

一筆申上候　上都之儀如レ形相調、今月十二日至二備前一岡山罷著候、尤其表可レ致二參上一候へ共長途の儀候間先吉田へ罷下候、殊更從二信長一大事の馬被二差下一輝元公へ被レ進候間片時も急申候、

一上樣御歸洛御操の事我等京著仕候翌日、羽柴藤吉郎日乘我等と被二申操一候處に、上意の事入質龍々御取置候はでは と被レ仰候、入質の儀進上申間敷と藤吉は申候、夫にて相支り候處に、羽柴何と分別候哉、左の上意にて底迄御□候はゝ一大事の儀候間行方不レ知見え不レ申の通信長へは可レ申候條、早々いつ方へも御退被レ成候て可レ然の由申候間、翌日大坂迄罷歸候、我等日乘をは一日跡に殘し置候て、一往の御異見可二申上一の由申候條、一通り御異見申上候へ共如何にも無二御□一候間、是迄藝州よりも申操り候上意の處、強て申上候も如何に候、扨此上にて自然西國など へ御下向候ては一大事たるべく候、能々御納得承りすゑ候て可二罷下一と申上候へば、西國へも唯今の分は礒と御下向有間敷候、紀州可レ有二御滞留一候條、今度退座の御音信仕御返事取候て京都へ罷登り候

一公方樣は上下二十人の內にて、小船に召候て、紀州宮崎の浦と申す所へ御忍び候、信長も唯今討果可レ申にても無レ之候間、彼所に可レ有二御滞留一候、先々此國へ御下向なき事をは、隨分申極候、可レ御心易一候

一阿州三好許容有間敷の由、朱印相調申候

一但州の儀來二月に羽柴藤吉爲二大將一亂入の儀定候、唯今も半國程は羽柴へ御行候、來春御延引候 ては不レ可レ然候、此御分別專一に候

一備播作の朱印宗景へ被レ出候も、對二藝州一進之由殊の外の儀に候

一別所宗景の儀も當時持にと定候、別所も自身罷出候、一の座に双方へ被二申渡一候、宗景へ三箇國

惠瓊より元春隆景へ報じたる上國形勢の全文

の朱印御禮、從二夕庵一過分に申掛候、おかしく候

一日乘走舞異見、昔の周公旦太公望なとの樣に候、似合たる者出たる御事に候、雖レ然仕過され候ほで、今の分にて候ては、藝州御爲重寶、今度の調も、悉皆彼仁馳走にて候、唯まぶなく存候〳〵、藤吉などの取成迄日乘にて候、是にて可レ有二御推量一候

一若君樣遣なりけに候、信長宿に置レ申候、來春は御禮申候て可レ然の由、但過分の御禮、信長若君へも申通候、御推量よりも此下切の行はやく可レ被二申付一候、國も則可二相果一候、是も箇條に被レ載候、何と書候とも許容有間數候由に候

一山中鹿之助柴田に付候て種々申候、是又聞と許容有間數由朱印出候

一播州廣瀨の事雜掌付置候間、不レ被二仰聞一候箇條に載候て、披露仕是は放狀調申候、左候條今日十二日市家面談仕、來春先廣瀨へ被二取懸一候と申事に候、內々直家も其望候條彼表へ可二罷向一と令二約諾一候、被二仰聞一候條々多分此通かと存候、今度信長機嫌一段能く上下にて少々緩意人も候はゞ按合則可二申付一候由に候、今度宗景の使者同道仕候、藤吉一段の被レ申樣にて候、彼使も大汗なかき申候、頭に大やいとうすゑたる樣に候て目出候、左候條其口御無用の由不レ捨御申候て無二御無音一存との信長直に被レ申事に候

一今度三好左京大夫內衆成易腹を切候、代々如レ此と申候か、さりとてはの腹を切候と申候

一河內高屋の城由佐と四國衆篭候相城被二取付一候、其人數打入候へば、信長も歸國の由に候、定て可レ爲二此月一候

一信長の代五年三年は可レ被レ持候、來年あたりは公家などに可レ被レ成と見及候、左候て後品ころびにあふのけにころばれ候ずると見申候、藤吉さりとてはの者に候、面上の節一二に可二申上一候、明十三日吉田へ被レ下候、吉田可レ致二言上一候、此由宜預御披露候、恐惶謹言

十二月十二日　安國寺　惠瓊判

山縣筑前守殿
井上又右衞門殿

〔吉田物語〕

【五】朝倉退治

義昭の殘黨殆んど一掃

義昭の殘黨は、殆んど一掃し盡した。淀城の岩成主税は、細川藤孝の家人下津權內が組討にて頸を取つた。芥川城の和田惟政は、荒木村重の甥、中川瀨兵衞清秀が討取つた。池田勝政、伊丹親興も、それ〳〵退治せられた。攝津一國

は、荒木村重が切取に任すと、信長よりの恩諭で、彼は攝津守と改名した。〔總見記〕。信長は事の序でに、例の大船に打乘り、江州高島郡の木戸、田中兩城をも攻め落し、岐阜に還つたのは、天正元年八月四日であつた。乃ち彼は一箇月以内に、義昭事件を、一切片附けたのだ。

憐れなるは淺井、朝倉

憐れなるは淺井、朝倉である。彼等が頼みにしたる信玄には、死去せられ、叡山は燒かれ、義昭は追放せられ、本願寺一派を除けば、今は全く孤立となつた。而して本願寺とても、援軍を出す餘力はない。乃ち彼等が往生の時期は、刻一刻迫り來りつゝある。如何なる世にも事大思想は、人の去就の動力ぢや。淺井、朝倉の前途を見れば、如何なる呑氣漢でも、心配せずには居れぬ。されば彼等の被官、家人共の内に、暗流が生じ來たのも、無理ではない。

淺井方の變心者と信長の進出

先づ江州山本山の城主阿閉淡路守が、心變りの先登者ぢや。信長が此報に接したのは、八月八日であつた。彼は直ちに夜中出馬して、淺井方の月瀬城を取つた。彼が岐阜滯在は、中間只だ三日であつた。同十日には、大嶽の北、山田村に陣し、江北と、越前との通路を遮斷した。此に於て淺井と、朝倉とは、互ひに相救ふこと克はぬ破目に陷つた。

先づ朝倉に打擊を加ふ

信長は此の如く淺井、朝倉兩軍の聯絡を斷ち、先づ朝倉に向て打擊を加へた。元來朝倉家には、敏景入道英林以來、五代の全盛を極め、義景に至りて、其の一家は、既に精神的に死し、纔かに形骸的に存するのみであつた。義景は信長と對抗以來、其の必然の運命に對して、何等の準備をなさず、唯だ眼前の苟安を貪つて居た。彼が無意氣地屋たるは勿論であるが、彼の家中も、概して腐敗して、主從何れも大火の風下に、高枕安眠して居た。而して今や彼等が、目を醒す可き時が來たのである。

朝倉義景の出陣

朝倉義景は、淺井方の要請もだし難く、二萬の兵を率ゐ、江北の余吾、木本邊迄出陣した。彼はその家中、一族の者共に出陣を命じたけれども、一人も應ずる者がなかつた爲め、餘儀なく自から出陣したのだ。信長は實に之を以て奇貨居く可しとした。彼は獵犬が兎を狙ふ如く、決して此の獲物を取り逃さぬ覺悟

信長の急遽と朝倉勢の辟易

をした。當時大嶽の下に、燒尾城を築き、淺井對馬之を守つたが、彼も變心して、八月十二日に、其城に信長の兵を引き入れた。同夜は風雨に拘らず、信長は其の子信忠に、虎御前山を留守せしめ、自から疾風猛雨を冒し、其の馬廻若干を率ゐて馳せ附け、既に大嶽に先懸にて、攻め上らんとしたが、朝倉勢は其勢に辟易して降參した。信長は此の降兵を、敵方へ放歸せしめ、更らに丁野城に向うた、丁野城を守れる平泉寺の衆徒も、亦た開城した。

信長と朝倉討滅の決心

信長は今度此節、屹度朝倉義景を討取る可しと決心し、彼を取り逃さぬ樣、其の先鋒に訓令した。

信長御諚には、必定今夜朝倉左京大夫可二退散一候。先手に差向候衆、佐久間右衞門、柴田修理、瀧川左近、蜂屋兵庫頭、羽柴筑前、丹羽五郎左衞門、氏家左京助、伊賀伊賀守、稻葉伊豫、稻葉左京助、稻葉彦六、蒲生右兵衞大輔、蒲生忠三郎、永原筑前、進藤山城守、永田刑部少輔、多賀新左衞門、弓德左近、阿閉淡路、同孫五郎、山岡美作守、同孫太郎、山岡玉林、此外歷々の諸卒、爰をのがし候はぬ樣に、可二覺悟仕一之旨、再往再三被二仰遣一其上、御いらてなされ、十三日夜中に越前衆陣所へ、信長又被レ成二御先懸一被二懸付一候。

信長度々の先懸と諸將の不面目

然而度々被二仰遣一候、御先陣にさし向候衆油斷候て、信長の御先懸被レ成候を承り候而、御跡へ參られ候。地藏山を越候て、御目にかゝり候へば、數度被二仰含一候に見合候段、各手前の比興曲事の由御諚候處に、信長へこされ申、面目も無二御座一の旨、瀧川、柴田、丹羽、蜂屋、羽柴、稻葉初として、謹而被二申上一候。

佐久間右衞門涙を流し、さ樣に被レ仰候共、我々程の內の者はもたれ間敷と、自讃を被レ申候、信長御腹立不レ斜、其方は男の器用を自慢にて候歟。何を以ての事、片腹痛申樣哉と被レ仰、御機嫌惡く、如二御分別一朝倉左京大夫義景廢(敗?)軍候のを、討捕頸共我も〳〵と持參候。〔信長公記〕

信長と朝倉勢追擊の光景

是れ諸將の遲きにあらず、信長の速き也。如何なる機敏の者も、とても信長と

は先駈を爭ふ譯には參らぬ。彼が自から鞭を揚げて、快犬の疲兎を追ふ如く、朝倉勢を追擊したる光景は、如何に勇ましきものであつたらう。

信長先懸にて諸將と追擊

北國勢退散刀禰坂合戰の事

初又前田又左衞門、佐々内藏助、戸田半右衞門、下方左近、岡田助右衞門、其子助三郎、赤堀七郎右衞門、高木左吉、福富平左衞門、湯淺甚助等は御殿を守り宵より支度し控居ければ、けつく御先へ參りけるを、先に行は何者ぞと御尋あり、其時一々名乘て申上ければ、信長公御諚には、扨は今夜の先陣は某ならでは有まじと思ひければ、汝等にこされたる也と、御たはぶれ御機嫌宜敷御馬をはやめ玉ふ、御先へ參る人々は、朝倉方の逃行者とも、道々ひた切に打取て手に手に首を持參せしむ、彌〻御機嫌斜ならず、敵は中の河内口と刀根口と二方にわかれ、引退きける程に、何方へ付て追行き可レ然候半やと、各伺ひ申ければ、何れも僉議區々なるに、信長公御諚には敵は定めて引田敦賀の味方の城々、足がゝりを心がけ、大かた退く者なるべし、急ぎ引田口へ人數をつけ、刀禰山筋を追つけ見よと下知し玉ふ、案のごとく朝倉は中河内椿井筋へは雜兵をのけ、義景其外隨一の者どもは敦賀表を心ざし、引田口を引て行く、初め柳瀨にて義景しばらく休み居て、兎角の僉議をしたりけるに、家老山崎長門守吉家すゝみ出て申しけるは、今度當國へふかくと御出馬の義、ひとへに當家運命のつきぬる所なり、其節某敦賀表に罷在候はゞ、運分諫とめ候はんに、某並に詫美安藝守等さへ西地に罷向ひ居り、其儀更に存せずして、加樣に成行候事口惜き次第也、とても死なん命ならば、先祖相傳の我國にて敵を引受、尋常に一軍し腹切て失ん事、武將の期する所なり、今此路次の退口に、やみくと討死して、朝倉の者ともこそ、江北までは出たれども、然としたる軍もせで、追討に討れたるなんど天下の謗を招かん事、生前死後の恥辱なるべし、然れども運命限ある上は、千悔すとも益有べからず、敵ははや疋田口を取切て、多勢跡より追來ちん、某は切所にて一返し取て返し、晴なる軍し討死して君恩のために一命を敵國の地に投捨つべし、それにて時刻の延る内に君は早々越前へ御引入候て、先祖相傳の故國の地にて、心安く御腹めされ然るべし、是こそ君臣の御暇乞にて候と、申捨てぞ出たりける、詫美越後守も、吉家と一所に討死せんとて、是も同く取て返す、此者は僧落にて詩作の遂者なりければ、矢立の硯を取出し、絶句一首即時に書置き、落てゆく味方につけて、故郷へとてぞ返しける。

萬恨千悲有三黯然一。誰圖今夜酹三黃泉一。故郷更莫レ成三愁淚一。屍曝三戰場一只是天。

義景と家老山崎吉家の忠志

されども義景は、いまだ引かれためらひ居けるを、一族朝倉掃部助類に諫めて、馬を引よせ義景をいだきのせ、跡をも見せず引立て、越前さして落し遣はし、其身は又取て返し、越後守等と一手になる、其外の惣軍貴賤上下騷立て、いざ退けと云程こそあれ、右往左往にあわてふためき、草木の陰も恐ろしく、前後もしらず引立たり、折節此間雨のふりたる跡なれば、土滑に路塗れ、坂には足もたまり得ず、谷は深泥にて胃の毛さへ見えがたく、足跛氣勞て友具足につらぬかれ、討死同士討手死人馬物具を捨たる事、五六里が間に充滿たり、信長公は御身をもだへ、黑烟を立て追著玉ひ、敵をひた切にきりすて〳〵隙もなく、刀禰坂にて馳著玉ひ、大音あげて切てかゝらる、前田又左

義景の落去と惣軍の混亂

山崎其他面々の討死

衞門、佐々内藏助、下方左近、戸田半右衞門、津田金左衞門等、まつ先に進で働處に、山崎長門守案のごとく取て返し、四角八面に當て、飛龍廻天の威を振ひ、虎憤山をくづすが如く、散々に切てまはり、半時ばかり防ぎ戰ひ、さらば此時刻に義景もはや遙々と落延玉はん心安し、今は期したる討死なりとて、まつさきかけて討死す、吉家が討死を見て同子山崎小次郎吉次、并に同苗七郎左衞門吉延、同新左衞門、同珠寶坊、同御長、和田三郎左衞門、同清左衞門吉繼、鰐淵將監吉廣、神波九郎兵衞吉久、山内彌六左衞門、壁田圖書吉澄、同七郎兵衞吉房、三段崎六郎、清水三郎左衞門、岩崎惣左衞門、增井五郎左衞門、禾田惣兵衞宗俊、田尻十郎左衞門秀勝、西嶋彦五郎吉尙、鳥井與七生年十九歳、是等を始めて一人も不レ退、此一備の面々等一同に討死けり、其内に時刻うつりて、夜のほの〳〵と明る時分、大將義景漸〻に木目峠へ引退けり。〔總見記〕

【六】朝倉家の沒落

朝倉家の勇士印牧彌六左衞門

朝倉家の沒落は、實にみじめなものであつた。此の間際になりて、主家の爲めに、身を致す重臣がなきにしもあらずだが、何等思案も、分別も出なかつた。

腹中を率直に吐出

但だ印牧彌六左衞門と申す、面白き勇士があつた。彼は不幸にして捕虜となつた、信長は彼を引き出し、何故に生捕れたかと問うた。印牧は數合の戰に、息切れ身疲れ、餘儀なく此の始末となつたと答へた。信長は勇者程あるぞ、正直なる申分かな、予に仕へん乎と云うた。

御尋に依て、前後の始末申上之處、神妙の働無二是非一の間、致二忠節一候ば、一命可レ被レ成二御助一と御諚候。爰にて印牧申樣は、朝倉に對し、日比遺恨雖二深重の事候一、今此刻歷々討死候處に、述懷を申上生殘、御忠節不レ叶時者、當座を申たると思召、御扶持も無レ之候へば、實儀も外聞も見苦候はんの間、腹を」可レ仕と申乞二生害一、前代未聞の働、名譽不レ及二是非一。

〔信長公記〕

快男兒

彼は尋常一樣の上下著たる、忠義振の文句を並べず、我が腹の底を、率直に吐き出した。好男兒と云ふ能はずんば、快男兒に相違ない。

朝倉勢は、江北より越前指して潰走した。信長は息をもつかず、追擊した。退

朝倉勢の潰走と信長の追撃

路には中の河内口と、刀根口との二線があり、人々何れに向はんと詮議したが。烱眼なる信長は、敵が敦賀方面に逃る可きを察して、刀根口より追撃せしめた。案の如く刀根山の峠にて敵に追付き、大嶽より敦賀迄、約十一里の間、追討に三千餘級の首を討取つた。此中には朝倉家中の名ある者も、少くなかつた。

追撃戰の雄快と士氣の鼓舞

信長の追撃戰は、實に雄快であつた。彼が如何に士氣を鼓舞したかは、左の挿話にて判知る。

去程に信長年來、御足なかを、御腰に付させられ候。今度刀根山に而、金松又四郎武者一騎山中を追懸、終に討止、頸を持參候。其時生足に罷成、足は紅に染て參り候。御覽じ、日比御腰に付させられ候御足なか、此時御用に立られ候由御諚候て、金松に被レ下、且冥加の至り、面目の次第也。

〔信長公記〕

信長と將卒の操縱

斯る場合に於ける、一隻の草履は、千金の賜にも代へ難し。曩きには歴々の諸大將が、信長に先を越されたりとて、叱責せられ。今や旗下の一士が、拔群の働ありとて、此の寵賜あり。信長の人を使ふや、單に身を以て、自から率ゆるのみでなく、能く其の操縱の肯綮に中つて居た。

朝倉義景の遁走

彼は十四日より十六日迄、敦賀に滯陣し、天正元年八月十八日には、愈よ陣を府中龍門寺に進めた。朝倉義景は、一乘谷の居城にて、一支障ふることさへ敢てせず、倉皇として、大野郡の山田庄六坊に遁れ失せた。

義景夫人の最期

毎日百人、貳百人宛、一揆共、龍門寺御大將陣へ括縛召列參り候を、御小姓衆に被仰付、無際限討させられ不レ被レ當レ目樣體也。爰に野仁の者共、けだかきかど有人と見えたる女房の下女をもつれ候はで、唯一人有レ之をさがし出し、五三日いたらぬ奴原止置候處に、或時硯をかりて、はな紙の端に書置をし、たばかり出て、井戸へ身をなげ果られ候。後に人〳〵是を見れば此歌也。

ありをればよしなき雲も立かゝるいさや入なむ山のはの月

と一首を書置、此世の名殘是迄也。見る人哀に思ひて、涙を流さずと云者な

し。〔信長公記〕

慘劇には、必らず婦人あり、婦人なくんば、慘劇たる能はず。朝倉家の沒落も、平家の沒落も、唯だ大小の差あるのみ。

却說平泉寺僧徒も、今は自個存在の必要上、裏切りして朝倉義景を包圍した。其の一族朝倉景鏡は、八月廿日義景に逼りて自殺せしめ、其頸を龍門寺に送つた。義景行年四十一歳。義景の母、及び嫡男も、捜出の上、生害せしめた。歸順の國侍等、信長の門前に市を爲した。信長は越前一國を平定し、前波播磨守吉繼を守護代として、之を治めしめた。前波は義景に反いて、信長に降り、今度の朝倉退治の殊勳者であつた。斯くて信長は八月廿六日、江北虎御前山に歸陣して、淺井打擊に取り掛つた。

朝倉義景の自殺と越前一國の平定

朝倉義景最後の事

扨も朝倉義景は、江北の軍に利を失ひ、八月十四日越州敦賀に落着き、それより翌十五日の暮、居城一乘谷に歸り入る、士卒農商皆落散り、中々一戰にも及びがたし、子レ時一族式部大輔景鏡謀反

義景一乘谷を落去

義景父子東雲寺に入る

井兵庫頭、高橋甚三郎等色々にいさめ一先づ山林へ落かくれ、取て人數を催して一戰に家運を開かるべしとて、取物も取あへず、同十六日一乘谷をあけ、いづくともなく落て行く、母儀の廣德院殿室家同愛王丸と云男子今年四歳に成けるを、皆々同道せしめけり、女子二人有けるを、一人は大坂の本願寺へ兼て約束申ければ、福岡石見守と云者に此旨を申し付け、先立て落し遣す、今一人は比丘尼となる、扨右の女子を河合庄八杉喜兵衞と云者養育して、亂後程へて大坂へ忍びのぼり、木願寺の室家に備り玉ひ、子孫繁昌とぞ聞へし、扨義景は豐原へ落て、加賀の國へ退かんと云しを、景鏡、色々に諫めて、己が在所亥山の城の近邊、大野郡は切所の地也、是へ御のき候へと云ふ、義景是より以後、諸事景鏡に任すべしとて、式部の大夫を先に立て、大野をさして逃行けり、築山清左衞門と云ふ七旬に餘る譜代の士あり、此者一人一乘谷に留り、朝會先祖英林より五代、當地に居城なしめ、今更此所にて腹切る者もなき事こそ、朝倉が家の瑕瑾なれとて、館の内にて妻子を皆々指殺し、屋形に火をかけ其身尋常に腹切て失にけり、又朝倉が家に代々重器の蛇貝朝日夕日の鏡なんとゝ云物あり、是もはや家の亡びん凶兆にや、何方ともなく失にければ、義景是を隨身せず、大將加樣にさまよひ玉へば、下々の者どもは取物も取あへず、子をさかさまに負ごとく、あわてふためき、いまだ寄手の旗先も見えぬ内に、八方へ落ちり身をかくさんとす、同夜子の刻ばかりに義景父子は大野郡亥山の近所東雲寺に落つきたり、是より使札を以て平泉寺の衆徒を賴けれども、衆徒等一圓たのまれず、けつく義景を討て出し、信長へ降參申さずんば、平泉寺も又山門のごとく燒亡さるべきかとて、急謀叛の色をたて、義景を討とめんと、方々路を遮て斯彼を燒たつる、柴田方へも使僧を遣し、平泉寺をさへ破二立置一げ、衆徒等味方に參て、隨分義景をさがし出し、忠節申上んと申

朝倉家重臣等の降參

す、又朝倉の家老魚住備後守景固は重代の者なれば、中柯内西近江より攻入る敵を防ぐべしとて、府中表に指置けるに、此者俄に心替りし、嫡子彦三郎を敦賀へ遣し、信長公へ降參の御禮申し、案内して府中に待うけ、義景一乘谷退散の次第を申上る、朝倉三郎景胤、同孫三郎景健も、江北表を

景鏡の變心と義景の自殺

ば隨分切ぬけ歸りけれども、大將はなし力盡て是も同く降參す、義景は彼を見これをきくごとに、肝を消し力を落して、危きながら東雲寺に隱れ居たる處を、稻葉伊豫入道一徹齊より使者を遣し、ひそかに式部大夫景鏡に申す樣は、義景を其邊に隱し置玉ふと聞たり、早々搦出さるべし、然らば貴方助命の上に、本領安堵を給るべし、左もなくば景鏡ともにはや明日は攻殺さん由、懇に申送るにより、今まで義景が杖柱とも賴居たる式部大夫も忽に心かはりし、はや骨肉の親を忘れ、主從の恩を空うせんとす、平野中道寺と云ふ者、色々に諫めけれども、景鏡終に是を用ひず、十九日の夜偽て東雲寺へ使を立、其許は我等が近所、亥山の城へ程遠して、諸事の軍談調がたし、今夜の内山田庄六坊へ御のき候へと申遣す故に、義景其夜酉刻に山田庄に移りけり、此時迄相したがふ供の者僅十人ばかり有けり、景鏡は平泉寺の衆徒と謀し合せ、手勢彼是二百ばかり、翌廿日の拂曉に山田庄六坊へ押寄せ鬨を作り鐵砲を打かけ、平岡次右衞門と云者を使にして、御迎盡させ玉ふと見え、敵はや御在所を知て、多勢此庄へ亂入候、とても叶はぬ御身なれば、尋常に腹めされ候へと云入ければ、義景是を聞て、にくき奴原が擧動かな、我死するならば惡靈と成て怨に取殺さんと詈り怒て鄙鼠どもには今しばらく自害の間防ぎ矢射よと云ひ捨て、其身は一間所へ入て、疊紙を取出し、辭世の詩を書て、尋常に腹切り、家に火をかけ生年四十一歳にて、終にそこにて死たりけり、其頃詩に曰く

七顚八倒。四十年中。無レ自無レ他。四大本空。

高橋甚三郎防ぎ矢射けるが、走歸て義景を介錯し、其刀にて自害せしむ、鳥井兵庫頭は、景鏡を討取らんと、ひたぎりに切まはれども、つひにめぐりあはざりければ、走り返て是も自害す、相殘る者ども、皆々腹切り討死したり。〔總見記〕

【七】淺井家の沒落

此上は淺井父子の運命

朝倉家は既に沒落した、此上は淺井父子の運命である。信長が虎御前山に歸陣した翌夜（天正元年八月二十七日の夜）羽柴秀吉は、京極太に上り、淺井久政、長政父子の聯絡を絶ち、廿八日遂に久政の居城を乘り取つた。『下野守久政は、今日腹を切るべしとて日比情をかけたる舞手の鶴松太夫と云者を呼び、彼をして其の家人に防矢の命を傳へしめ、今は心易しとて、淺井福壽菴と死別の杯を酌

久政の切腹と鶴松の追腹

酬し、更らに之を鶴松太夫に與へた。福壽菴は、某法體なれば、御案内致す可しとて、先づ腹十文字に切つた。鶴松は之を介錯した。久政もやがて追ひ附く可しとて、切腹した。鶴松又た介錯した。行年六十一歳。而して鶴松は、某が生害に同じき御座敷を汚さんこと、憚ありとて、態と椽に下り、屈まり居て、其刀を咽に押當て、うつ伏になつて死んだ。』〔總見記〕されば太田牛一も、『鶴松太夫も追腹は、名譽無二是非一次第也。』と特筆して居る。

長政の切腹と淺井の舊領

長政は父の生害を聞き、今は是迄なりと、九月朔日、城に火を掛け、切腹した。行年廿九歳。而して其妻は、信長の妹なれば、三人の娘と與に無事出城した。長女が即ち淀君で、秀賴の母、次女が京極高次の室で、常高院殿、三女が秀忠の御臺所、崇源院殿で、家光や、駿河大納言忠長や、東福門院の母である。信長は淺井の舊領を、羽柴秀吉に與へた。此れは云ふ迄もなく、秀吉が多年、江州に於ける戰功の報酬であつた。

漸く朝倉淺井の二敵を全滅

此の如く信長が、金ケ崎退陣（元龜元年四月）以來、滿三年四個月の後に於て、漸く朝倉、淺井の二敵を全滅するを得た。彼等は信長の本據たる岐阜と、京都との間に横はる難物であつて、信長も少からざる當惑をした。

正月朔日、京都隣國面々等、在岐阜にて御出仕在、各三献にて召出しの御酒有、他國衆退出の已後、御馬廻許にて、古今不レ及レ承珍奇の御肴出候て、又御酒有、去年北國にて討とらせられ候、一朝倉左京大夫義景首、一淺井下野首、一淺井備前首、已上三つ薄濃にして、公卿に居置、御肴に出され候て、御酒宴、各御謠御遊興は千々萬々目出度、御存分に任せられ御悦也。〔信長公記〕

三人の首を肴に酒宴

信長は天正二年正月元日、新年宴會の二次會に、朝倉、及び淺井父子三人の首を肴に、其の親近の者共と、酒を飲んで樂んだ。此事や、頗る惡趣味ではあるが、如何に朝倉、淺井が、最近數年間、彼の心志を惱したる乎を察す可き、好證案ずや。

一敵を滅ぼせば一敵生ず

彼は兎も角も、此れで一と安心した。然も淺井、朝倉を滅した結果は、やがて謙信と、國境を接す可き運命となつた。接觸は衝突の前提ぢや。拓地擴境は、快

は則ち快、されど何時かは強隣に、出會せねばならぬ。世界は廣いが、無礙自在の領域は、古今に其例がない。一敵を滅せば、一敵生じ、一國を平ぐれば、一國來る。信長の前途も、愈よ多事となりつゝある。

鯰江城の攻落

却説も信長は、九月四日(天正元年)淺井退治を訖り、佐和山城に入り、鯰江城を攻めた。佐々木右衞門督(六角義弼)は降參して、何處ともなく退散した。彼は同六日に岐阜に歸城した。

長島一揆の要擊

信長は九月より十月にかけて、北伊勢に出馬した。而して再び長島の一揆の爲めに、其の歸路を惱まされた。彼等は天嶮地岨を利用し、弓鐵砲にて、前に待伏し、後より追打し、淺からぬ痛傷を信長勢に負はしめた。兎も角も一向門徒は、信長に取りては、何れの方面も苦手であつた。

若江城將三好義繼の最期

信長は其志を果さず、十月廿六日に岐阜に歸り、更らに十一月四日上洛し、三好左京大夫義繼を、河内の若江城に攻めた。義繼は長慶が弟、十河一存の子で、長慶の相續者となつた。彼は三好一門の代表者である。彼が力盡きて、自殺せんとするや、其の介錯を遊佐入道與傳に命じた。與傳は介錯せんとして、其後に立つたが、義繼は、自から腹を十文字に切り置きながら、兩手をさし伸べ、其甲を指し上げ、與傳に頸を斬らしめた。〔總見記〕太田牛一は『無比類御働、哀成有樣也』と評した。

信長の伊達氏に贈れる書翰

＊　＊　＊　＊　＊

去十月下旬之珍簡近日到來、令拜披候、誠遼遠示給候、本懷不淺候。殊庭籠之鵜鷹一聯、同巢主大小被相副候、希有之至、歡悅不斜候、鷹之儀累年隨身異于他之處、執之送給候、別而自愛此節候。則構鳥屋可入置候、秘藏無他候。仍天下之儀、如相聞候、公儀(足利義昭)御入洛令供奉、城都被遂御安座、數年靜謐之處、甲州武田、越前朝倉已下、諸侯之佞人一兩輩相語申、妨公儀被企御逆心候、無是非題目、無念不少候。然間爲可及其斷、上洛之處、若公被渡置京都有御退城、紀州

義景刎首一國平均

熊野流落之由候。然而武田入道（晴信）令病死候、朝倉義景於江越境目、去八月遂一戰、即時得大利、首三千餘討捕、直越國へ切入、義景刎首、一國平均に申付候、其以來若狹、能登、加賀、越中、皆以爲分國屬存分候。五畿内之儀不亨申、至中國任下知候次第、不可有其隱候。來年甲州令發向、關東之儀可成敗候。其砌深重可申談候、御入魂專要候、猶以芳問大慶候、必從是可申展一之條、拋筆候。恐々謹言。

信長の廣告手段

十二月廿八日（天正元年）　信長（朱印）

謹上伊達殿　〔伊達文書〕

敢獲多き天正元年

此れは信長が、例の廣告―新井白石の所謂る、鬼面嚇人的―手段として見る可きであるが。亦た以て彼が天正元年中の、總勘定と、天正二年に於ける、總豫算概計として見る可きぢや。當時信長の眼中、五畿は勿論、北陸、東山、關東なかりしもの、以て知る可きのみだ。

天正元年は、信長には極めて收穫多き歳であつた。足利家亡び、朝倉、淺井二氏亡び、佐々木氏（六角氏）亡び、三好氏亦た亡んだ。名家舊家の亡滅は、無慘には相違ないが、新時代の祭壇に供する犧牲と見れば、是非もない事ぢや。

淺井久秀の自殺

長政の遺志と二將の降參

淺井長政最後の事

廿七日信長の先手木下藤吉郎、八千餘騎にて京極太に打登りて、淺井久政と長政との間を取切る。于レ時久政、討出で大に戰ふところに、裏切者之れあり、大字大和守、門根次郎左衞門、山際出羽守等討死す。是に依つて淺井下野守源朝臣自殺す。行年六十一歳。淺井福壽軒、同宮内少輔、同新八郎殉死す。廿九日、信長の三萬八千餘騎、小谷の四方より平に攻登る。信長は木下藤吉郎が陣所京極太に移つて、兵を進めて大に戰ふ。城兵防ぎ戰ふ。河瀨壹岐守、澤田兵庫頭、手勇三百餘騎を一文字に進め、信長の陣取りたる太夕嶽に討つてかゝり戰ふに、信長の兵多く討取る。木下藤吉郎が兵、横合に馳合せて戰ふ。是に於て河瀨壹岐守、澤田兵庫頭以下皆討死す。于レ時長政、淺井石見守、赤尾美作守を招いて曰、吾れ二君に仕へず、死を遂ぐる事、是れ日頃の大望にして、愚是に過ぎず、然りと雖も稚屋形今年幾に十歳にして、眼前に御自殺を見、佐々木數代の屋形、こゝに斷絶に及ばん事、天命といひながら、是併、我等文道に疎く、武威の拙きがなす所なり。此恨永く泉下に繫るのみ。願はくは其方二人、我が死に殉はんよりは、稚屋形龍武御曹子を具し奉りて、城を出で信長に降參し、時の宜しきあらんを見て、今一度信長に此憤を報ぜば、我志といひ、何

の功か是に如かんや。凡そ士たる者、死期の術、遠大の計を致すこそ專要なれ。相構へて紅塵の働をなすべからずと、打歎きていへば、石見守、美作守之を聞いて曰、尤も此を道れて、信長に降らん事、一旦の計あるに似たりといへども、終に信長に事を悟らるゝ程ならば、稚屋形並に我等殺害に及ばん事必せり。然らば賤しき奴僕の手に墮ち、所存の外の死を取らん事、實に口惜しき次第なるべしと。長政復た曰、其こそ士たる者の本意なれ、恥にして恥ならず、謀略も無くして、只徒に死果つるは、恥にして恥なり。若し各推量の如く、此謀空しからば、但彼が武運強くして、我等忠義の足らざる所と思ひなし、只今生一往のみかは、歴劫忘れざるの思深く、其心を遂びなば、終には盡で其恨を果さゞるべき。時刻移らば然るべからず、疾々といへば、兩人異議に及ばず、稚屋形を抱へ奉り、木下藤吉郎に便りて信長に降參すと呼んで馳出づ。長政之を看て大に悅び、即ち火を城に放つて自殺す。行年廿九歳。忠を子孫の上に貽し、名を萬代の鏡に懸く。本朝忠臣多しと雖も、天下武家の手に移りし以來、惟楠正成、淺井長政二人のみ。萬人の鏡にして武士の骨脈なり。信長木下を以て、先づ稚屋形を受取り、次に淺井石見守、赤尾美作守は降人なればとて、甲を脱がせ、弓絃をはなし太刀を取りて、木下に預けらる。稚屋形に供奉し、小谷城を出づる内、小姓秀吉卿に屬す虎之助後號二肥後守一　脇坂甚内後號二中將一　稚屋形將軍義昭公の繼嗣となりし時、右三人の小姓秀吉卿に屬する七本鑓の内なり。七本鑓は、所謂加藤虎之助、片桐助作、脇坂甚内、加藤孫六、福島市松、平野權六、糟屋助右衞門等なり。九月朔日、信長、淺井石見守、赤尾美作守に對面して曰、汝等二人、既に長政自殺の場より心を飜し、我に降參する事、甚だ疑あり。龍武丸は我が孫なり。之を供して吾に屈せば、我れ汝等を賞せん。時節不意に長政が恨を報ぜんとの行なるべし。愚將は是等の謀に

長政の自殺

信長遂に二將を誅す

墮ちて不覺に死を取るべし、信長に於ては謀らるべからず。誠に爾曹は、節義を守るの義士なり。免し置きたくは之れありと雖も、是非に及ばざる次第なりとて、木下藤吉郎に申付けて二人共に之を誅す。二日稚屋形をば、木下藤吉郎秀吉之を預るところに、磯野丹波守秀昌、代々の主君たるに依つて、此度の軍功の賞に申し替へて、之を預り養育す。四日飯江の城主佐々木右衞門督義祐を、信長家人柴田權六勝家に、兵四千餘騎を相副へ攻めしむ。之を義祐、城を保たず、即ち降參す。五日、信長岐阜に下る。十日、椙谷善住房、高嶋郡堀川阿彌寺に隱れ居けるを、磯野丹波守秀昌之を召捕り、岐阜に召具して信長に渡す。信長大に悅んで、土中に埋めて竹鋸を以て之を拠殺す。是は先年信長、千草越の時、承禎の命を蒙りて、鐵砲を以て信長を打ちたる者なり。淺井備前守長政は、元祖淺井新三郎政重、三條大納言公綱卿の子にして、其姓藤原なり。久政の代に至りて實父の姓に反つて源姓なり。久政は佐々木管領氏綱朝臣の妾、淺井備前守助政が姉、北向殿の生る所なり。高政之を給はりて養育して家に附す。世にいふ、久政、長政二代の淺井、忠を致し節を持する者、本朝開闢以來絶倫の義士なり。唯楠正成を除くのみと、長政子四人あり、嫡男は萬福丸とて、長政に先立つて早世す。餘三人は皆女子なり。一人は京極の宰相高次の室、常高院と號し、一人は豐臣秀吉公の室、淀殿と號し、右大臣秀賴公の御母なり。一人は征夷大將軍秀忠公の御臺所なり。崇源院殿と號す。征夷大將軍家光公、和子國母女院の御母公なり。二代の淺井家、無二の義士たる故に、沒後の住名天下に輝けり。〔淺井日記〕

椙谷善住房を殺す

淺井氏二代の忠節と其の兒女

【八】公家としての信長

信長愈〻公家となる

天正二年、信長は四十一歳にて、愈〻前年安國寺惠瓊が豫言の如く、公家となつた。彼は足利氏の舊に仍りて、征夷大將軍たるを求めなかつた。彼は公家と、武家とを一視した、彼は最早辭讓の場合でないと認めた。故に三月上京し、十八日には參議に任じ、從三位に叙せられた。

内奏を經て蘭奢待を截る

彼は内奏を經て、南都東大寺の名香、蘭奢待を截るの勅許を得た。此の黄熟香木は、聖武天皇の御時、支那よりの傳來で、今も正倉院の御寶藏に、護持せられてある。其の蘭奢待と稱するは、東大寺の三字を、此中に寓する意味だ。此れは信長に取りて、無上の光榮で、且つ其の光榮に相當するの、鄭重なる儀式が伴うた。

蘭奢待截りの御所望

十七日志賀より坂本へ被レ成二御渡海一、相國寺初而御寄宿。南都東大寺蘭奢待御所望の旨、内裡へ御奏聞の處、三月廿六日御勅使日野輝資殿、飛鳥井大納言殿、爲二勅諚一添も被レ成二御院宣一、則南都大衆致二頂拜一御請申、翌日三月廿七日、信長奈良の多門に至て御出、御奉行塙九郎左衞門、菅屋九右衞門、佐久間右衞門、柴田修理、丹羽五郎左衞門、蜂屋兵庫頭、荒木攝津守、夕菴、友閑、重御奉行、津田坊以上〔信長公記〕

面白き趣向

頗る仰山なる趣向である。何やら一種の大廣告であるかの如くも見える。信長は本來政治家ぢや。彼は固より所謂る數寄者の一人で、斯る方面には、深甚の趣味を有して居たが、さりとて此れが唯一の物數寄とのみは、思はれぬ。彼は正しく此の一事によりて、御一人を、上に戴き、自から天下に臨まんとする位置を、天下に標示したのであらう。何となれば是は足利義政以來、未曾有の事であるからだ。當人の思付であつた乎。又た數寄道同好の一人、松永久秀等の入智慧であつた乎。何れにしても面白き趣向と云はねばならぬ。

蘭奢待截の光景

三月廿八日、辰刻御藏開候へ訖。彼名香長六尺の長持に納り有レ之、則多門へ被二持參一、御成之間、於二舞臺一、懸二御目一、任二本法一、一寸八分被二切捕一。

御供の御馬廻、末代の物語に、拜見可レ仕の旨、御諚にて、奉拜の事、且御威光、且御憐愍、生前の思出、忝次第不ニ申足一。一年東山殿被ニ召置一候已來、將軍家御望の旁、數多雖レ有レ之、唯ならぬ事候の間不ニ相叶一、佛天之有ニ加護一て、三國無レ隱御名物被ニ食置一、於ニ本朝一御名譽、御面目之次第何事加レ之。

〔信長公記〕

天下の人心に與へたる印象

此の文句を仔細に玩味すれば、當時此事が、天下の人心に與へたる印象の、如何なるかを知るに足らむ。乃ち斯る印象を、天下の人心に與へんが爲めに、信長は此の恩賜を奏請したものと判斷しても、恐くは大過なからう。信長は政治家ぢや、辭讓が必要の場合は、能く辭讓した、進取が必要の場合には、能く進取した。

信長の光榮と滿足

但だし信長も人間である、特に血性多き人間である。彼を一個の打算機械視するは、彼を知る者でない。吾人は政治家としての信長以外に、人間としての信長をも、尋酌せねばならぬ。斯る光榮には、何人よりも、彼自身が、最も滿足したのは、勿論であらう。

加茂祭禮の競馬に愛馬を出す

彼は又た五月五日、加茂祭禮の競馬に、其の愛馬を出した。

五月五日、加茂祭競馬御神事、天下御祈禱の事候。幸御在洛の儀候間、御馬被ニ仰付一候樣にと伺申處、信長度々勝合戰にめさせられ候蘆毛御馬、並鹿毛御馬二つ、其外御馬廻之駿馬を揃十八疋、都合廿疋十番の分被ニ仰付一、御馬の儀不レ及レ申、廿疋の御馬、御鞍鐙、御轡、一々何れも〳〵名物の御皆具被ニ仰付一、生便敷被レ成ニ御結構一、舍人是又美々敷出立、上古も不レ及レ承、然而黑裝束の禰宜十人、赤裝束の禰宜十人、右の廿疋の御馬に乘、一番宛馬を走かし、勝負を爭申也。蘆毛の御馬、鹿毛御馬、元來駿馬にて達者なれば、不レ及レ申、御馬は、何れも勝申候也。末代の物語、貴賤老若、群集無ニ申許一。〔信長公記〕

閑事業の中に人心を操縱す

謂ふ勿れ是れ閑事業と、天下の人心は、此の閑事業の中に、能く操縱するを得るものぢや。彼は獨り樂しむを以て足れりとせず、衆と樂を偕にするを解した。

太閤の北野大茶湯も、要するに信長の競馬から脱化し、更らに一歩を進めたものではあるまい乎。彼が仕方は、均しく風流と申すも、東山義政が銀閣寺に、其の弄臣と晏居して、四疊半の樂を專らにするものとは、同日の論でない。

彼は自から公家となつたのみでなく、又た公家を救濟した。

公家を救濟す

四月朔日（天正三年）被仰出一趣、既に近代、禁中御廢壞之條、從先年御修理の儀、被仰付令成就畢。併公家方被及御怠轉一の間、方々御沽却の地、村井民部丞、丹羽五郎左衞門兩人に被仰付、爲德政、公家衆の本領被還附一主上、公家、武家共に御再興、天下無双之御名譽不可過之。〔信長公記〕

天下無双の御名譽

公家が貧乏して、其の領地を賣却したものを、悉く彼等に還附せしめた。信長の政治は、實に痒き所に手が屆いた。牛一が天下無双の御名譽の一句も、溢辭ではなかつた。

信長蘭奢待を切る事

蘭奢待開符の舊記

一天正二年三月廿八日御開符有レ之、舊記云、此年織田信長者銀望寶物拜見、蘭奢待南都多門城ヘ年預五師淨實訓英執行藥師院實祐法眼三人御香に付て、信長よりは佐久間衞門相付持參之處、客殿袋中に昇二居之一寺より二人え對、信長旌にて香を見れば私々間數、被寺僧衆之前にて可レ被レ見、然者香之傍迄可レ出由被レ申間、香取出寺之大佛師仰て、一寸四方づゝ二つ切二取之一畢。信長寺の三人對、一ッ者　禁裏樣一ッ者我等拜領と被レ申、然る後香箱受取、佐久間と本ノ倉へ納畢。又紅沈香拜見、多門山へ持參す、紅沈は不レ切レ之返納畢。

寺務四室院家
年預　五師　淨實
執行　藥師院實祐
〔東大寺蘭奢待傳來書〕

【九】長嶋全滅

信長正面の敵

信長を中心として、其の周圍を見れば、中國には毛利氏がある、北國には謙信

がある、關東には北條氏政がある。されど此の三家は、厚薄親疎の別はあるとして、何れも不即、不離の間にある。正面の敵は、信玄の子の勝頼と、本願寺である。彼等は動もすれば策應して、信長の隙を覗はんとしつゝある。信長は、先づ何れより打擊を加ふ可き乎。

本願寺の不埒

勝頼の方は、兎も角も家康に任せて措くも、本願寺の不埒は、實に勘辨が出來ぬ。現に天正二年の春、上洛の砌も、本願寺は、敵對の色を現はしたから、信長は足輕をかけ追ひ拂ひ、近邊を放火し、作毛を薙捨て、聊か威光を示した。

長島は信長腹心の病

又た折角信長が骨折りて、切取りたる越前は、其の守護代として置きたる、前波播磨守の匪政の爲に、國内騷動を惹起し、一向門徒は、巧みに火事場泥坊を働き、之を占領しつゝあるではない乎。

然も最も遺恨の重なるは、長島ぢや。此れは伊勢と、尾張の堺目に要地を占め、信長に取りては、腹心の病ぢや。其の長島なる河内御堂の主は、勝頼の妹聟である。元龜元年十一月には、信長の朝倉、淺井と事あるに乘じ、其の弟織田彦七を取り詰めて、切腹せしめた。同二年五月には、信長出馬にも拘らず、

志を果さず、退去の折、柴田勝家を手負はしめ、氏家卜全を討死せしめた。天正元年十月には、信長重ねて出馬したるに拘らず、又たしも林新二郎等を失はしめ、信長もはう〳〵の體にて、退陣したではない乎。信長は實に、長島に屢ば手を傷いた。

遺恨重なる長島の討伐

然も斯る事にて懲りる信長ではない。彼は愈よ此の腹心の病であり、且つは遺恨重なる奴原を討伐す可く、天正二年六月廿三日出馬した。彼は六月上旬、勝頼が遠州高天神城を圍むの報に接し、家康に應援す可く、中旬に今切りの渡迄、其子信忠と與に出掛けたが。高天神城を守れる小笠原長善が、勝頼に降つたから、已むを得ず六月廿一日、岐阜に還り、更らに廿三日に、武田氏に向て用ふ可き兵力を、長島に用ひんとした。彼が意氣込の旺なるは、云ふ迄もない。

長島の地勢

抑尾張國河内長島と申者、無隱節所也。濃州より流出る川餘多へ、岩手川、大瀧川、今洲川、眞木田川、市ノ瀨川、くんせ川、山口川、飛騨川、木曾川、

養老之瀧、此外山々の谷水の流れ末にて落合、大河となつて長島の東北五里、三里の内、幾重共なく引廻し、南者海上漫々として、四方之節所、中は中々愚也。〔信長公記〕

此れが地勢の概略だ。卽ち伊勢灣の頭、美濃諸河川の尾、自から河海の水を廻らして、島嶼をなし、天然の形勝を占めて、其の要害と爲して居た。

長島内徒の專横

依レ之隣國之佞人囚徒等相集り仕宅し、當寺崇敬す。本願寺念佛修行之道理をば、本とせず、學文無智故誇ニ榮花一、朝夕亂舞に日を暮し、構ニ俗儀一、數ヶ所端城を拵、國方（法？）之儀を蔑如に持扱、背ニ御法度一御國にて御折檻の輩をも、能隱家と拘置。〔信長公記〕

今回は海陸諸手より

其の專横此の如しぢや。縱令公然信長に抗敵せざるも、尙ほ退治す可きものぢや。況んや前には朝倉、淺井と、今は武田勝頼と、策應して、恒に其の隙に乘せんとするに於てをや。

今回信長は大仕掛に、海陸諸手より包圍した。『諸手の勢衆、船中に思ひ〳〵の旗標を打立〳〵、綺麗星雲霞の如く、四方より長島へ推寄た。』〔信長公記〕而して攻擊は愈よ激甚を加へた。『大鳥居、篠橋（城名）取寄、大鐵炮を以て、塀櫓打崩、被レ攻候の處、兩城致ニ迷惑一、御赦免の御佗言雖レ申、迚も不レ可レ有程の條、佞人爲レ懲干殺になされ、年來の緩怠狼藉、可レ被レ散ニ御鬱憤一の旨にて、御許容無レ之。』〔信長公記〕

長島全滅の決心

彼は之を全滅せずんば止まぬ決心であつた。八月二日には、風雨に乘じて、大鳥居城より混れ出でたる男女、約千人を切り捨てた。十二日には、篠橋籠城者を、裏切の約束にて、長島城に追ひ込んだ。七月十三日以來、島中の男女の各城に逃入りたるもの、今や半は餓死しつゝある慘狀ぢや。

攻圍三ヶ月に及んで落城

元來信長の長島に於ける、條來條去であつた。此度もその通りであらうと、一揆等も高を括つて居た。然るに信長は飽迄根强く、攻圍三個月に及んだ。九月廿九日には、落城した。『九月二十九日、御佗言申、長島明退候。餘多の舟に取乘候を、鐵炮を揃へたせられ、無ニ際限一川へ切すてられ候。』〔信長公記〕彼

等は窮鼠猫を噛むの態度となつた。『其中心有者ども躾に成、伐（拔？）刀許にて七八百許、切而懸り、伐崩し、御一門を初奉り、歴々數多討死、小口へ相働、留主のこ屋〳〵へ亂れ入、思程支度仕候て、それより川を越、多藝山伊勢口へ、ちり〳〵に罷退、大坂へ逃入也。』〔信長公記〕實に油斷大敵とは、此事であつた。

叡山以上の大慘事

併し此れは、落城際の一幕に過ぎぬ。『中江城、屋長島城の、兩城に在の男女二萬許、幾重にも尺（柵？）を付取籠被レ置候。四方より火を付燒ころしに被二仰付一屬二御存分一。』〔信長公記〕是れ實に叡山以來の、否な叡山以上の大慘事である。如何に戰國時代の風習とは云へ、信長の忍人たることは、到底辯護の辭はない。彼は九月二十九日に、長島門徒を屠り盡くして、岐阜に凱旋した。

第三章　長篠役前の形勢

【一〇】武田勝頼

公平なる史眼と實値の鑑別

成敗の跡に就て、其人を論ずれば、兎角成功者はえらく見え、失敗者はつまらなく見えるものぢや。されど公平なる史眼は、好運、薄運の風袋を除けて、其の實値を鑑別せねばならぬ。世の中には、武田勝頼を、不肖の子の一として數へて居る。それは彼が長坂、跡部抔の佞臣の言を用ひ、信玄が折角築き上げた大身上を、臺なしに打ち潰し、その身も與に亡びたるからだ。併し是亦た成敗に囚はれた管見と云はねばならぬ。

勝頼は健氣の漢子

勝頼は今川氏眞ではない、彼は武勇に於ては、信玄の子たるを辱しめなかつた。然も如何に武勇に饒むも、信長、家康の中部日本同盟に對抗して、勝者たるは、到底不可能である。それにも拘はらず、尙ほ十箇年も自から支持し、屢ば此の

亡滅は勝頼唯一の歸著點

大敵を惱したるを見れば、彼は實に健氣の漢と云ふ可きではあるまい乎。

惟ふに如何なる奇策を出だすも、勝頼としては、此の强大なる勢力に對して、降服する乎、亡滅する乎の二者を、擇ぶ他はあるまい。父の信玄生存しても、尙ほ此通りであらう。況んや彼に於てをやだ。而して從來の行掛りすれば、信長に叩頭し、其の被官となることは、自から能はざるのみならず、信長も亦た、之を容る可しと思はれぬ。詮じ來れば亡滅は、殆んど彼が唯一の歸著點であつた。吾人は寧ろ彼が最後迄、其の宿命と戰うたるを、嘉みせねばならぬ。人は彼が剛愎自用を咎むるも、自用するも、せざるも、到底彼は信長に滅さる可き、定運であつたものと見る可きであらう。

信玄死後と甲信の諸將士

天正元年四月、信玄の逝くや、勝頼は二十八歳で、其子信勝の成人迄、後見者として、信玄の跡目を相續した。信玄の死が、信長黨に多大の安心を與へたるが如く、非信長黨には、非常なる失望と、落膽とを與へた。就中信玄膝元の、甲信二國の士民に於て、最も然りであつた。信玄の部下には、信玄に訓錬せられた老練の將士、少くなかつた。されど彼等は、概ね信玄の手頃に驅使す可き、特製品であつて、所謂る信玄ありての彼等である。他人の手に隨意に取扱はる可き、代物でない。さりとて彼等亦た、信玄に取りて代る可き人物でもない。要するに信玄死後の甲信の將士は、牧羊者の死後の群羊であつた。國論の統一を缺いたのも、思ひやらるゝではない乎。

勝頼不幸の立場

勝頼の不幸は、其父に偉大なる信玄を持つたことである。彼が如何程の手際を出しても、働らきをしても、其の將士、就中歴々の故老は、生ける勝頼よりも、死せる信玄に謳歌したであらう。勝頼が長坂、跡部の言のみを、採用したと云ふも、其他の老輩は、勝頼とそりが合はぬからではあるまい乎。要するに信玄以後、信玄なく、信玄ならざる勝頼は、內外に處して、頗る苦境に陷つた。

信玄在世中にも一方の將

信玄の在世中も、勝頼は壯年ながら、能く一方の將たる資格を發揮した。三方原の勝利は、彼が側面攻擊に負ふ所多きに居つた。元龜三年四月には、謙信が無慮一萬の兵を率ゐて、信州に出で、火を長沼に放つた。勝頼は警報を聞いて、伊

但だ不足は思慮の一點

奈より八百人を提げて、之を拒いだ。其の健氣の振舞には、謙信も嘆賞した。斯の如く彼は勇氣に於ては、何等不足がなかつた。但だ不足と云へば、思慮の一點だ。併し如何に思慮したとて、信長、家康を凌ぐ可き智慧も、出て來まい。何となれば信長は、既に國主の位置より、半ば天下の主となりつゝあつた。況んや之を背景として、其の當面に立つ、海道一の弓取家康あるに於てをやだ。守るも亡び、攻るも亡ぶ、坐して亡びるを待たんよりも、寧ろ進んで戰はんに若かずと、勝頼が考へたのも、一理ありと云はねばならぬ。或はそれ程の思慮なく、唯だ勝に誇り、勇を恃み、無我夢中に、進攻を事として、遂に敗亡を招きたりとするも。尚ほ坐して亡滅を招くよりも、我武を辱しめなかつたと云ふ可きであらう。

勝頼の人物と家康秀吉信長の批評

徳川家康は、彼を評して、強き大將であつたが、機轉なくして、一筋に強き許りにて、後れを取つたと云うた。〔武家秘笈〕勝頼の滅ぶるや、秀吉は中國に於て、毛利氏と對陣して居たが、之を聞き大息して曰く、あたら人を殺したる事の、殘り多さよ。我れ軍中にあらば、強ひて諫め申して、勝頼に甲信二州を與へ、關東の先陣としたらんには、東國は平押にす可き事をと、繰り返し嘆惜した。〔常山紀談〕信長は勝頼父子の首を見て、日本に隱なき弓取なれども、運が盡きて、斯くも果敢なくなつたと云うた。〔參河物語〕公論敵讎より出づ。果然勝頼は、不肖の子ではなかつた。但だ彼は信玄の餘業を承け、織田、徳川と兩立し難き立場に在り、遂に日本統一事業の、祭壇に供せらるゝ、一の犧牲者となつたのだ。彼と織田、徳川との交鬪の始末を、叙するに先ち、聊か彼其人に就て、語る所此の如し。

日本統一事業の犧牲者

成敗と人物論

勝頼決して侮る可らず

成敗に依て人を論ずるは常人の情なり。武田勝頼其國を失ひ、身も亦刀刃に斃れたれば、後世史家より種々の惡評を加へられ、長坂長閑、跡部大炊介と云ふ佞臣を寵用し、老將宿臣を斥けしかば、遂に亡國に及びたりとて、恰も惡政の主人たる如く言ひ做され、其の顏に墨を塗られたり。さりながら國の盛衰興亡は、必ずしも一人の德に依らず、亡ぶべき勢ありて、其時節が來れば、賢人國を

守るとも遂に亡ぶべし。亡國の主なりとて、其人を酷論するは、輕薄なる毀譽褒貶を縱にするもののみ。たとへば家康にても、若し門徒一揆の騷動の時、鎧に中りし鐵砲の丸藥少し強く、其時命を失ひたらば、『あれ見よ三河の家康は若氣の血氣にはやり、門徒退治を企てたれば、戸樫氏の末路の如く命を失ひたり、誠に馬鹿者と謂つべし』など云はるべし。所詮は人間の事、九分まで運命に在り。運拙くして敗軍の將となつたりとて、直ちに其人物を惡口するは無識の至りと謂ひつべく、さる批判の行はるゝは人生の一大不幸とすべし。勝頼の一生を爽考するに、其人決して侮るべからず。甲州の武勇も信玄の死にたるが爲に毀へたるに非ず。十年の間たけく雄々しく其國を守り、常に合縱連衡の策を講じて信長を惱ましたれば、武將としては必ずしも力量なき人に非ずと謂つべき歟。さりながら信玄既に死にたる上は、勝頼たとへば父ほどの器なりとも、良將の後を承けたる若大將を信用せざるは世の常情なるを以て、甲州の威は自ら輕くなりたり。〔山路愛山著『德川家康』〕

人間の事九分迄は運なり

【一一】信玄死後の形勢

信玄の死

信玄は喪を秘す可く遺命した、されど隱れたるより、見はれたるはない。信玄の死は、誰云ふとなく、軈て四隣に聞えた。先きに信玄の威風に靡きたる輩は、又たしも家康に欵を通じた。家康も亦た油斷なく活動した。彼は天正元年五月、（信玄死去の翌月）駿河に入り、岡部に放火した。六月は二俣城に對して、社山、合代島、及び渡島に砦を築かしめ、七月自から長篠城を攻め、八月に至り、城主菅沼正定、及び甲州援將室賀信俊等城を致して、鳳來寺に逃れた。而して作手城主奥平貞能、其子貞昌等亦た、家康に歸順した。

家康の活動

元來奥平家は山家三方の豪族で、一門廣く、家康も厚く之を遇して居たが、信玄に手强く攻められ、心ならずも降參したものであつた。されば此際、再び家康に心を寄せ來つたのも、寧ろ當然ぢや。當時作手城の本丸には、甲州の援將甘利晴吉を措き、奥平父子は、外郭に在つた。而して長篠城の後詰として、甲州より出掛けたる武田信豐等も、其の開城を聞き、黑瀨に滯陣して居たが、奥平が異志あるを聞き、之を其の陣中に招き、其の實否を質した。

山家三方の豪族奥平家

美作守は（貞能）少しも顏色變せずして、夫は敵より云はしむる風說なる可

奥平貞能武田氏に離叛す

し。我聊も二心なしとて談笑し、少しも疑はしきさま見えず。其後棋を圍み飯をも食し……難なく築手（作手）に立歸り、黄昏に及んで、武田勢の籠りたる本丸へ、鐵炮を打かけ、其身は一族男女、武具、兵具取持せ、築手（作手）を立退きたり。本丸に籠りたる甲州勢、大に驚き、奥平逆心なりとて、大勢追かくるを、石筒、金坂にて、美作守九八郎（貞能、貞昌）父子取て返し、手勢僅に二百騎を以て、五百の武田勢を打破り、一族男女全く岩崎山まで立退く。……勝頼は奥平父子が事、憤りに堪へず、九八郎（貞昌）妻は、甲州に人質として出し置けるを磔にかけ、又美作守貞能が末子千丸、並一族藤兵衛貞治が女子は、典厩（武田信豐）の方へ、人質として出し置けるが、是も同く磔に懸けしとぞ。〔改正參河後風土記〕

勝頼の憤慨と出陣

勝頼は、後詰の兵を出したる詮もなく、長篠城は家康の手に復歸し。同時に奥平父子の離叛を聞き、憤慨禁ずる能はず、作手城兵をして、彼等の籠れる瀧山城を攻めしめたが、克たず。此に於て天正元年十一月、自ら兵一萬五千を率ゐ、駿河を經て、遠州に入り、掛川、久野地方を燒き、見付に陣し、尋で天龍川を渡り、濱松城に薄らんとしたが、其の防備の嚴なるを聞き、軍を回らし、二俣、光明山、乾、諸城の守備を警しめ、特に諏訪原に築城して、以て敵に備へた。

諏訪原の地勢

諏訪原は、遠州榛原郡にあり、或は牧野原とも云ふ。榛原、城東兩郡に跨る高原にて、勝頼の築きたる城は、高原の北端、金谷驛の西、舊東海道官道の側にある。其の塹壕は、老木、蔓艸の間に今尚ほ存在す。彼が大井川を渡りて、此所に城を築きたるを見れば、家康をして、一歩も此川を越さしめずとの意氣込ありしことが、分明ぢや。

勝頼と大勢挽回の攻勢

概觀するに信玄の死は、家康をして、曾て信玄より奪はれたる參河、遠江の土地の大部分を、恢復するを得せしめた。若し此儘に經過せば、信玄死後の甲信は、挫屈、萎靡、遂に再び振ふ可からざる、積弱國となつたであらう。然るに勝頼は、此の大勢を挽回す可く、頓に其鋒を一轉して攻勢に出でた。此れより

して愈よ勝頼對織田、德川の衝突が、面白き局面となつた。

【一二】明智城と高天神城

勝頼美濃に出馬す

勝頼は何時迄も、雌伏しなかつた。彼は天正二年正月廿七日、美濃岩村城に出馬した。信長は秋山晴近が、—元龜三年十一月—岩村城を取りし以來、其の進んで岐阜に逼らんことを慮かり、苗木、飯狹、明智、高野等の諸城を修繕して、其の防衛を固くした。

勝頼と信長方と初度の戰爭

今や勝頼が岩村に出て、明智城を攻むるを聞くや、二月五日、信長は信忠を伴ひ、後詰に出掛けた。然も此邊天險にして、人馬の交通、頗る困難、彼の援兵の未だ達せざるに先ち、飯狹右衞門なる者　裏切して落城した。信長父子は、是非に及ばず引き取り、更らに高野城を普請し、河尻與兵衞をして、之を守らしめた。之れが勝頼と、信長方との、初度の戰爭であつた。勝頼は飛鳥も落る程の猛威にて、悅び勇み、甲州に引き返した。〔甲陽軍鑑〕當時彼は血氣正さに剛なる二十九歳、其の鼻息の荒らきこと思ふ可しだ。

高天神城の守將小笠原長善

幸運は勝頼に伴うた。彼は五月下旬、菅沼定盈が、大野田新城を取り、更に高天神城を圍んだ。山上に天神を祭る故に、斯く名けたのだ。〔柏崎物語〕此城には小笠原與八郎長善を大將として、小笠原家の總領を推し立て、武功老練の士、數多之を幇け、甲軍に對する防備の重鎭である。小笠原長善は、曾て今川家の被官で、今川家沒落の際、武田氏に與みせんとしたが、偶然の行掛りで、德川氏に附いた。家康もその心根の測られぬを知りつゝ、彼を姉川の戰に伴ひ、拔群の手柄を做さしめたのだ。彼は當時に於て、實に猛將であつた。されば勝頼の攻圍に對しても、善く防守した。彼は向阪光行をして、圍を冒して、急を濱松に告げしめた。往反三回した。〔烈祖成績〕家康は更らに小栗重常を使はして、援を信長に乞うた。

信長父子の來援と勝頼の猛擊

信長は家康の請に應じ、六月十四日、父子相伴うて、岐阜を打立つた。家康は信長の來著を俟つて、共に之を援けんとした。然も甲軍は、其の後詰の來らざるに先ち、之を拔かんと攻め寄せた。勝頼は自ら攻口に臨んで、死傷を厭はず、攻め立てよと指揮した。西の丸は破れた。長善は尙ほ井戸曲輪を境として、大敵と戰うた。然も今や兵粮は少くなる、玉藥は盡きる、兵は疲れ切る。さりとて如何に急を告げても、濱松より僅かに十里の道であるに、後詰は來らぬ。長善も我程大功ある者を、捨殺にせらるゝとは、聞えぬ次第であると、頗る憤慨した。〔武德編年集成〕

高天神城の開城

斯る場合は、魔のさす可き好機ぢや。寄手の岡部黨は、今川氏以來の舊知である。彼等は長善が勇餘りありて、操守の足らざるを熟知して居る。彼等は其間に斡旋した。よりて長善、及び其他の從降者は、本領安堵の保障を得て、開城した。而して甲軍に降り、駿河に赴きたる者を、東退と云ひ、降らずして遠州に引き取つた者を、西退と云うた。軍監大河内政局は、勝頼の招降を峻拒した爲めに、城中の石獄に投せられた。

信長父子の動靜

信長は六月十七日吉田に著し、六月十九日信長公御父子、今切の渡り可レ有御渡海一の處、小笠原與八郎、企二逆心一、總領の小笠原を追出し、武田四郎（勝頼）を爲二引入一之由申來候。無二御了簡一、路次より吉田城迄引歸させられ候。家康も遠州濱松より、吉田へ御出候て、御禮申の處に、今度不レ被レ及二御合戰一事、御無念に被二思食一候。御兵粮代として、黃金皮袋二つ馬に付させ、家康公へ被レ參、則坂（酒）井左衞門尉所にて、皮袋一つを、二人して持上げさせ御覽候處、事も生便敷樣體、貴賤御家中の上下、致二見物一、昔も不レ及レ承由にて、各驚二耳目一、御威光不レ斜、次第、諸人奉レ感訖。家康公の御心中は計ひがたき御事也。六月廿一日、信長御父子濃州岐阜御歸陣。〔信長公記〕

長篠決戰の伏線と勝頼の氣

信長も聊か、長蛇を逸したる感があつたであらう。併し此れが長篠決戰の伏線となつた事は、事實の發展に伴うて、火よりも昭かだ。而して勝頼の鼻息が、

彌よ荒くなつたのも、偶然ではない。彼は是等の武功により、諸老輩の言を聞くよりも、自から用ふる方が、成功の近道であると思込んだのであらう。

【一三】大賀彌四郎

大須賀康高の高天神城監視

高天神城の陷るや、家康は八月（天正二年）馬伏塚の舊砦を修築して、大須賀康高を入れ、高天神を監視せしめた。九月、勝頼の天龍川に到るや、兵七千を率ゐて、之を邀へ擊たんとしたが、勝頼の去つたが爲めに、果さなかつた。而して天正三年二月、奥平九八郎貞昌をして、甲信より參遠を窺ふの要衝たる、長篠城を守らしめた。

奥平貞昌と徳川家康との關係

奥平家は、數世作手城に居り、瀧山城を併せ領し、今川氏に屬した。貞昌（後に信昌）の祖貞勝入道道文に至り、永祿九年、徳川氏に服した。元龜二年、更らに武田氏に趨いた。天正元年、信玄の參河を去りて、北歸するや、家康は貞昌父子を招いた。彼等は信玄既に死し、勝頼の恃むに足らざるを見、欵を徳川氏に通じた。家康は八月二十日に誓書を送りて、婚姻を約した。それより彼等父子が、武田信豐を欺き、作手城を拔け出したる顚末は、既に前に掲げた通りである。

長篠城と奥平貞昌

抑も長篠城は、參河國南設樂郡にて、豐川の上流、瀧川、大野川の合流點に枕んで居る。長篠は、甲信より參遠を經て、上國に出づるには、其の關門であり、此城が屢ば武田、徳川の二氏に取奪せられたるも、兵家の所謂る爭地であるからだ。家康が奥平貞昌を、此に入れたのは、彼が寡以て、衆を防ぐの能力に信頼したからであらう。果然、勝頼の大軍は、此城を攻圍した。而して是れ實にあらう。

大賀彌四郎の人物

當時家康の臣下に、大賀彌四郎なる者が居た。元は仲間であつたが、才覺あり

て、地方の事にも達したれば、家康に調法がられ。地方、賦税、會計等の諸役を兼ね、參河奥郡二十餘郷の代官となり、濱松に在りながら、岡崎へも勤務し、一日も彌四郎なくては、夜が明けぬと云ふ程の出頭人となつた。

彌四郎逆意と勝頼の眞躍

小人の根性、彼も追々増長して、驕奢に耽り、遂に逆意を思ひ立つた。彼は其の同類を語らひ、勝頼に密書を送りて申すには、先づ作手まで出張あり、先手二三隊岡崎へ進め給はゞ、某徳川殿の御出なりと呼はり、城門を開かしむ可し。御勢乘入り信康を殺し、岡崎に入れ置く參遠の人質を奪ひ給はゞ、參遠の將士も、御味方に參る可し。徳川殿も濱松には居溜らず、尾張か伊勢に立退く可しと。此れは勝頼に取りては、天來の福音ぢや。彼は直ちに誓詞を、大賀、及び其の一味に與へた。

彌四郎陰謀の露顯

然るに其中の一人、山田八藏重英は變心して、陰謀の顚末を信康に訴へた。信康は之を家康に報じた。之を査問するに、果して事實であつた。大賀が妻子五人は、念志原にて磔にかけた。

彌四郎誅刑に處せらる

叛逆の張本人大賀彌四郎をば、馬の三面の方へ面を向て、鞍に縛り、叛逆の爲に、渠が拵へ置し旗を指せ、首金をはめて螺、鐘、笛、太鼓にてはやし立、岡崎の町を引廻はし、又た濱松にても引き廻し、岡崎へ道を替て引戻し、町口の四辻に生ながら土中に埋め、首に板をはめて、十の指を切て、目前に雙べ、足の大筋を斷ち、竹鋸を置て、往來の者に是を挽かしむ。士民彼を憎むの餘り、老弱群參して、是を挽き、七日にして死す。〔武德編年集成〕

頗る慘刑だが、『參河物語』にも同樣の記事あれば、定めて事實であつたらう。

勝頼の進發と長篠城の攻圍

勝頼は大賀の言を信じ、兵一萬三千許を率ゐて甲斐を發し、信濃より參河に向うたが。途中にて大賀の陰謀露顯したることを聞き、今更ら退軍するを屑とせず、兵二千餘を分つて、長篠に向はしめ。五月六日、自から其餘を率ゐて、吉田城に向ひ、二連木、牛窪に放火した。家康は其子信康と與に、之を邀へ、彼我の先隊萱原に於て小戰した。勝頼は敢て吉田城を攻めず、更らに軍を長篠に班した。此に於て長篠城は、勝頼の大軍の重圍に陷つた。

【一四】大賀餘論

彌四郎信任と家康の悔恨

流石の家康も、大賀彌四郎には、一杯喰された。彼は老後迄も、大賀を信任して、手を嚙まれんとしたことを語りて、悔恨の情を湛へた。才能ある者は、德操なく、德操ある者は、才能がない。況んや斗筲の小人、時を得勢に乘ず、如何なる椿事を、仕出來すやも、知る可らずだ。人を任用する者は、須らく鑑む可しだ。

大賀陰謀暴露の一說

一說には、大賀が陰謀は、近藤某が加增地返納の事より、暴露したと云ふ。其の顚末は左の如し。

近藤何某、戰功有て、采地賜はるべきにより、彌四郎が許に行て議しけるに。彌四郎云ふ、御邊が事は我よきに取り成せし故、此の恩典にも逢しなり。此後は愈よ精仕して、我にな疎略せそといへば、近藤怒て何とも云はず、直に老臣の許に行て、新恩の地返し奉らむと云ふ。如何なる故と問ふに、しか〳〵の由述て、某如何に窮困すればとて、あの彌四郎に追從して、地を賜はらん樣なる穢き心は持たず。若し彼が云ふ所の如くならんには、一粒たりとも、受奉りては、武夫の汚名此に過ぎず。斯る事申出て、御咎蒙り腹切むも是非なし。恩地は返し奉らんと云て聞かざれば、老臣等も詮方なく、その由を御聽に達しければ。御自ら近藤を召て、汝に加恩とらするは、彌四郎が取なしに非るは云ふ迄もなし。汝嚮きに岡崎にありて、早苗取し時、我が云ひし言を、今は忘はせじと宣へば、(家康岡崎にて、近藤が百姓に交りて、腰物を畝に脫ぎつゝ泥田に入り、躬から耕すを見て、之を憐み、世が世ならば、汝等に斯る仕事はさせじと云へり。)近藤感涙袖を濕して、御前を退さぬ。〔德川實記〕

彌四郎と近藤某

家康自ら近藤を召す

此れよりして家康も、大賀に不審を來たし、更らに近藤を召して、其の事實を

大賀傍若無人の振舞ひ

彌四郎と其の女房

問ひ質し。愈よ大賀を鞫問するに及びて、意外にも其の容易ならざる陰謀は、現はれ來つたと云ふことぢや。

何れにしても、大賀が虎の威を假る狐で、傍若無人に振舞ひ、而して參河譜代の諸臣が、其の威權に慴伏して、敢て一人も口を噤んで云ふものなかりしかば。明察にして用意周到なる家康も、甘くも大賀に瞞著せられたのであらう。大賀も當時は、餘程逆上したものと見える。其の女房に向ひ、近日謀叛の由を告げた所、女房は戯談も程こそあれと、取り合はず。大賀は眞面目に、戯談にあらずと申聞かすれば、女房は打ち驚き、御身は仲間よりして、御譜代衆さへ我等が眞似は、出來ぬ程の出世をなしながら、此上謀叛を工むとは、扨も天道恐ろしく候。我身抔も煎り磔にも上がりて、浮名を流さんも、目の前なれば、只今刺殺し給へと云ふ。其時彌四郎女の身として、知らざる事を申すもの哉。其方をば此城（岡崎城）へ移して、御臺と唱へしめんと云ひければ、女房答へて、御臺と云はるゝは祝言だが、云はれぬ時の不祝言を考へ給へ。佛法は、實が入れば傾くと云ふ、人間は、實か入れば反ると云ふは、御身の事也。其後は物をも云はず。〔參河物語〕果して彼の妻子は、念志原にて、磔にせられた。馬首に尻向けて、縛載せられたる大賀は、之を見て、汝等は先に行けるか、目出度ものの也、我も跡より參らむと云うた。〔武德編年集成〕小人は死に抵る迄、其罪を悔ゆることを知らぬ。

家康一生中の逆吏二人

軍國の際と財用掛

家康の一生中、臟吏より逆吏となりたるものは、其の始に大賀彌四郎あり、其の終に大久保長安がある。而して何れも財賦に關係ある役目で、且つ何れも微賤の出身である。家康程の者が、而して最も大賀に苦さ經驗を嘗めたるものが、二度と其手を燒くは、不思議の樣であるが、又た如何に彼等大賀、大久保の輩が、調法であつたかゝ、思ひやらるゝ。

軍國の際に、最も入用なのは、軍資ぢや。然るに攻城、野戰には、赫々の功名が著るゝによりて、人々競うて之に趨くが、手元の財用掛抔には、左程人氣が聚らぬ。されば偶ま其人あれば、主將は餘儀なく、之を寵用せざるを得ぬ。家康

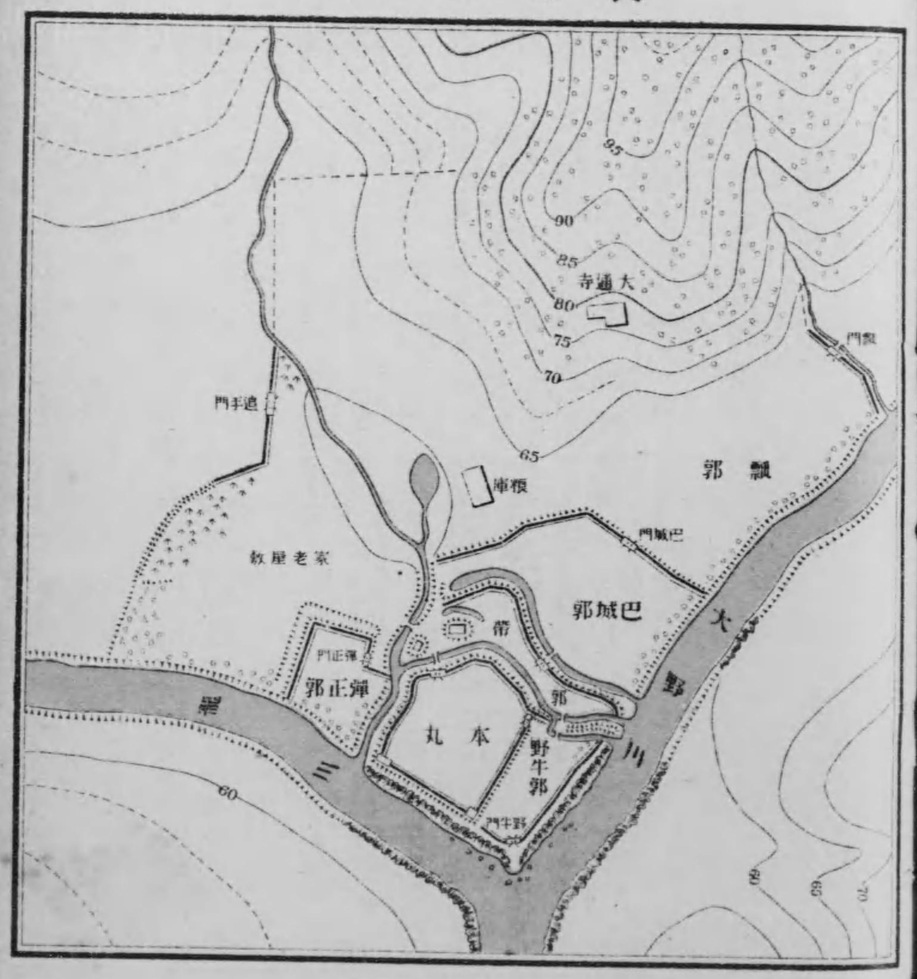
は過を繰り返へす漢でない、然るに猶ほ此の如き所以のものは、必ずしも理由なきにあらずだ。

彌四郎の一味を討取る

家康彌四郎が事を悔ゆる事

彌四郎の一味なる小谷甚左衞門は渡邊半藏守綱めし捕むとて行向ひしが、遁出て天龍川を渉ぎこし二股の城に入り、遂に甲州に逃さりたり。倉地平左衞門は、今村彦兵衞勝長、大岡孫右衞門助次、その子傳藏清勝、兩人してうち取りぬ。山田八藏は御加恩ありて、祿千石を賜はり返忠の功を賞せられしとぞ。後日に至るまで、度々彌四郎が事悔思召よし仰出され、我そのはじめ鷹野に出むとせしに老臣ほとゞめけるを、彌四郎ひとり勸めつれば我出立しなり。これ等の事度々に及び、老臣等終に口を杜る事となりゆきしならん。近藤が直言にあらずんば、我家殆むど危し。恐れても慎しむべきは奸佞の徒なり、おほよそ人の上としては、人の賢否邪正を識り分け、言路の塞らざらんをもて、第一の先務とすべしと仰せられしとなり。〔東武談叢、東僧基樂、御遺訓、今村大岡山田家譜〕

長篠城概圖



【一五】長篠城の嬰守

長篠城の結構と其の地勢

武田勝頼に依りて、攻圍せられつゝある長篠城は、本丸、二丸、(帯郭)三丸、(巴城郭)、彈正郭、野牛郭、瓢郭等あり。西北を大手門とし、東北を搦手門とす。東は大野川、西南は瀧川を以て、城濠となす。城の北に大通寺山、醫王寺山あり。東南は川を隔てゝ、船著山一帶の連峰に對す。其の連峰中に鳶巣山あり。城の西南は有海原に接し、其の一部を篠場野と云ふ。瀧川、大野川、何れも幅三十間、乃至五十間、大野川は川岸十五間、瀧川は二十五間。巉巖崎聳、恰も壘壁の如く、常水は四五尺に過ぎぬが、降雨の際には、四山の溪水悉く此に會して、水深丈餘に達し、頗る猛激となる。二川合流の所、最も險岨で、渡合と云ふ。〔長篠戰史〕

長篠城の歴史

元來此の城は、永正五年、今川氏親の被官、菅沼元成の築きたるもので、第四代正定に至り、元龜二年武田氏に屬し、天正元年七月、家康の攻略する所とな

長篠城攻圍の開始と其の陣立

り、天正三年二月、改めて奥平貞昌を守將とし、松平景忠、同親俊等を、其の副とした。彼等今や甲州勢の襲撃に向て、防守しつゝある。

攻圍は天正三年五月八日を以て、開始せられた。其の兵數は約一萬五千人である。城北の大通寺山には、武田信豐、馬場信房、小山田昌行等の二千人が屯した。同く西北には、一條信龍、眞田兄弟、土屋昌次等二千五百人。同じく城西瀧川の左岸には、内藤昌豐、小幡信貞等二千人。同じく城南篠場野には、武田信廉、穴山梅雪、原昌胤、菅沼定直等千五百人。又た遊軍として、有海原に山縣昌景、高阪昌澄等一千人。後軍甘利信康、小山田信茂、跡部勝資等二千人。鳶巣山其の他支壘には、武田信實等一千人。而して勝頼は本軍、即ち現時の所謂總豫備隊三千人を率ゐ、醫王寺山に陣した。

奥平貞昌の勇戰奮鬪

眇たる孤城に對しては、仰山なる軍配ではない乎。城中には唯だ五百の兵に過ぎぬ。奥平貞昌は、松平親俊をして、彈正郭を守らしめた。松平景忠、及び伊昌の父子をして瓢郭を守らしめ、自から他の方面を指揮して。奮鬪した。甲軍の攻撃は、八日より連日に亙つた。然も城兵は善く之を禦いだ。十一日黄昏、篠場野の甲軍は、筏を瀧川に泛べ、渡合より之に對する、野牛門に逼らんとした。城兵出でゝ之を却けた。十二日には又た、本丸の西隅より地道を鑿ち、城に入らんとした。貞昌亦た地道を鑿ち、鐵砲にて、敵兵を狙撃し、之を退けた。十三日の夜、甲軍瓢郭の側にある兵糧庫を奪はんとて、大通寺山の一隊、進んで瓢郭の西北を攻めた。城兵奮鬪、甲軍の死者八百人、遂に其志を果さずして退いた。然も障壁破殘、守るに堪へざるを慮り、即夜守兵を本丸に引き上げた。

攻守各々努む

甲軍の猛撃

此の夜甲軍、又た井樓を大手門の前に構へ、城中を下瞰せんとしたが、貞昌亘銃を發して、之を破碎した。而して十三日の夜以來、連夜本丸の西の隅へ、伏寄て、大石を掘崩し、谷へ落す模樣があつた。城兵は此處を乘取られても、又た内郭にて一と禦ぎす可しとて、土居の内に普請をした。然も攻圍の解けたる後之を見れば、城兵の氣を奪ふ可き爲め、外より石を持ち來り、是を下に落し、

甲軍の總攻撃

城壁を掘崩す眞似をしたのであつた。

十四日には、寄手總攻撃を行うた。されど城中決死の將士、惡戰猛鬪の結果は、甲軍の殺傷過當となつた。されば彼等も力取す可らざるを見、城外に柵を結ひ廻はし、又た大綱を川水の中に張り、蟻をも這ひ出づること叶はぬ樣に、城を長捲きに捲き圍んだ。

長篠城の嬰守と守將貞昌の壯語

最早城中には、兵糧の剩すもの、四五日となつた。嚮きに後詰を、岡崎にある家康に請うたが、未だ其の返答が來らぬ。されば貞昌は其の親族にして、水練の達者なる奥平勝吉に命じ、川を渉りて、後詰を催告せしめんとした。されど勝吉は、若し萬一予が出城の後、落城せば、此上なき恥辱であるとて、辭退した。諸士皆な曰く、已に食に乏しく、又た援兵なし、寧ろ一同突出して、討死せんにはと。然かも貞昌は、二十四歳の壯年ではあつたが、思慮ある大將で、之を承引せず、苟もさる場合とならば、予一人自殺して、衆に代らんと云ひ放つた。

長篠城兵の健鬪に甲州勢辟易す

長篠城攻守の狀況

天正三年五月朔日より武田勢三萬餘人長篠に來て、勝賴下知して峰々谷々を取切、城中より鳥は飛出候得共、獸は走出る道も無く柵を付、同月十一日に城の南わたらひ合の方手に押寄せ攻に致申候を、鐵砲にて打白らませ、少し足を亂し候處を、門を開き槍を以て突崩し候、道一筋にて四方の谷よりは横矢の助け成難しに因り、見乍ら手に汗をかきて無レ詮と申候と、後に甲州破れにて三州に罷歸候者共語申候、其時寄手三百餘討れしと申候、其後十三日には瓢箪丸と申所は、山澤の切岸土居も無き極上なるを、武田勢見て是より手を致んとて夜に入て押寄、貞昌兼て敵易きに來んと謀りて、此所に鐵砲を備置申候、飛ぶ鳥走る獸三ッに一ッは必ず打落す鐵砲共二百挺集め置しかば、見下す に月明なれば雲の思ひに違はず打取しかば、武田勢□に引取、三州之者甲州物語に申候、其後武田勢鐵砲□出そむにより、是程の小城を破り兼たり、一番に三百人鐵砲に當べし二番に三百人三番乘にはヨモ三百人は死まじ、足輕千人には過ず打死仕候て、其次は玉籠致さぬ先に押寄、木戸逆茂木を引破城中之人壹人も洩さず打べしと下知して、十四日之早朝より平攻に掛り申候を、城中此術を兼て知りて用意致置申に寄り、中筒にて火藥を込中備を遠々と放掛け、小筒にて征亘の敵を打ち、五段に鐵砲を備申候處、透間玉込之間なれば、柵際と申中備も討れて、渡合の川際は人塚を築申により、武田勢遙に相違致し引取申候、此日こそ城中も生たる心は不レ仕候者也、是より武田勢城を攻アグまて、城より遠々と引拂遠卷致し候て評議區々なりし。〔寺崎志賀左衞門覺書〕

【一六】死せる信玄生ける信長

三方原の一戰と德川方の影響

三方原の一戰は、深甚多大なる影響を、德川氏の上下に與へた。その以來彼等は、織田氏の援兵を請はずして、獨力武田氏の兵と、大決戰を試むるが如き事は、未だ之れなかつた。武勇を以て、東海道に雄視したる德川氏にして、此の如し。況んや織田氏をや。何を云うても、武田氏兵鋒の勁鋭前なきは、德川、織田兩氏の、畏憚したる所であつた。高天神城の陷つたのも、家康が信長の來るを俟つて、後詰せんとしたからだ。

德川勢の士氣と甲軍の威風

されば家康が、長篠城の圍を解くにも、信長の應援を求むるの情は、最も熱切であつた。而して信長の出馬甚だ遲滯し、德川勢の士氣も、聊か沮喪の體があつた。酒井忠次は、家康の命を承け、冑を脱で、高紐に掛け、長々と猪首の狂言をなし、衆を笑はしめ、兵氣を振作した。〔武德編年集成〕而して家康は、昔は信玄、今は勝頼なるぞ、左のみ心配するなと激勵した。〔東武談叢〕惟ふに此の一戰の終る迄は、信玄來ると云へば、織德同盟國の、啼兒の聲をも止めたであらう。甲軍の威風想ふ可しぢや。

信長方の評定

家康は小栗大六を岐阜に馳せ、援兵を請ひ、更らに奥平貞能を遣はし、其請を申ねた。或は更らに石川數正をも、使はしたと云ふ説もある。信長は評定した。毛利河内は勝算なし、御出馬無用と諫めた。佐久間右衞門は、敗軍疑ひなし、されど若し御出馬なきに於ては、德川は遂に甲州の一味となる可し。德川、武田敵とならば、當家危し。是れ敗軍と知りつゝも、御加勢の必要なる所以と申した。

信長對家康の態度

又た一説には、小栗大六（重常）再應の使に參ける折、家康の密旨を承け、矢部善七郎を以て、竊かに信長に告ぐる樣、德川家は同盟の約を守り、佐々木征伐、朝倉、淺井征伐等に、身命を抛ち、大功を建てた。然るに今回舊約に違ひ、御

加勢なきに於ては、武田、德川兩旗にて、尾州に攻め入る可しと。信長此を聞いて、急に出馬に決したと云ふことぢや。〔改正參河後風土記〕

信長と對勝賴制勝の方策

如上は何れも想像說であらう。何となれば織田、德川の同盟は、德川家に必要なる如く、今尙ほ織田家に必要である。前年信長（天正二年六月）は、高天神城の後詰に出掛け、家康に多額の軍用金を贈り、本年（天正三年三月）は又た、兵粮米二千苞を贈り、家康は其內三百苞を、長篠城に入置いた程ぢや。信長は勿論家康の請求迄もなく、往援の心得であつたらう。但だ其の制勝の方策に就ては、頗る考慮したであらう。

此の一戰と信長の責任感知

彼が岐阜を出發したのは、五月十三日である。然るに十四日岡崎に著、十五日は此處に滯留し、十六日には牛窪に至り、參遠諸將士の人質を此處に收め。又た敗軍の際退却の要心に、丸毛兵庫頭、織田三河守を入れ置き、此處を足溜りとなし。十七日野田原に野陣を懸け、十八日に至りて、漸く設樂郷極樂山に陣を据ゑた。之を彼が、岐阜より京都へ二日にて、快駛したるに比すれば、隨分念入りたる行程と云はねばならぬ。信長が此の一戰に、如何に重大なる責任を感じたるかは、以て知る可しだ。否な家康も亦た此の一戰に、必勝を期せず、其子信康を岡崎に還らしめんとしたが、信康之を聞かずして、止みたりとの說もある。〔久米川式部覺書〕

信玄の生死と德川織田の惑

又た信玄の生死に就ても、尙ほ疑問中であつた。彼の葬儀は、天正四年四月十六日、甲州惠林寺に於て行はれ、それ迄は病氣にて押し通して居た。勿論多數は、其の死去を信じたであらうが、又た疑問とした者もあつた。此戰の前に、稻葉一鐵は、家康に向ひ、萬一信玄死せず、不意に打て出でば如何と云うた。家康は斷じてさる掛念はない。第一昨今兩年打續き、同じ月日に、甲州にて萬部經を執行うた。二には去年以來、彼國の者、多く我方に參仕した。三には穴山梅雪入道、緣邊の事違約せられた。此れにて信玄の死は、明白であると云うた。信長は稻葉が差出口を叱責した。〔古老夜話〕

要するに當時、甲州軍の威風は、未だ戰はざるに上方勢を呑むの狀があつた。

此の決戰と信長の威信

旦鋒を交へん乎、死せる信玄、活ける信長を走らすの結果を、來たさぬとも限らぬ。一たび此の決戰に敗れん乎、信長の威信は、地に墜つであらう。此の一戰は、信長の天下に於ける位置に取りて、實に重大の干係がある。彼が平生の俊邁、輕鋭に似げなく、大事に大事を取りたるは、蓋し徒爾ではあるまいと思ふ。

長篠城の危急と鳥居強右衛門の脫出

【一七】鳥居強右衛門

却説も長篠城は、愈よ危くなつた。危急の場合には、概ね之に膺る勇者が出る、果して鳥居強右衛門が出た。彼は奥平貞昌が家人で、三十六歳、大剛無双の者である。彼は慨然として、重圍を冒し、情報を家康に致す可き、任務を引き受けた。彼は五月十四日半夜に、野牛門を出で、急湍に入り、脇差にて巨索を斷ち、游泳して、渡合より長走を經、廣瀨に達し、十五日の黎明、寒防ケ峠（雁峰山）に至り、狼烟を揚げた。此にて城中彼が無事に、敵圍を出でたことを知つた。

鳥居使命を果す

鳥居は岡崎に赴き、奥平貞能を經て、家康に見え、斯くと告げた。城中には士氣も振ひ、玉薬もある、但だ兵粮が二三日を剩すのみだ。若し後詰がそれ迄に到らぬならば、貞昌は城兵に代りて、切腹す可しと。家康は彼を引て信長に見えしめた。信長は彼の勞を賞し、明日を待つて、共に發す可しと云うた。彼は一刻も速かに城中に、使命を果した趣きを知らす可しとて、引き返し、十六日再び寒防ケ峠（雁峰山）にて、狼烟を三度擧げた。此れは乃ち後詰來ると云ふ合圖である。

甲冑の警戒嚴重

彼は長篠城に入らんとて、篠場野に到り、樣子を伺うた。寄手は過日寒防ケ峠の狼烟にて、城兵の脫出に氣付き、岸上には木柵を植ゑ、出入を誰何し、地上には細沙を敷きて、足跡を驗し。又た水中には益す巨索を交叉し、鈴を其端に

繫ぎて、音響に注意し、人間は愚ろか、魚でも、鳥でも、出入し能はぬ、嚴重さであつた。

鳥居乍ち捕へらる

鳥居は擔夫に混じ、機會を待つて居たが、乍ち發覺せられて、穴山梅雪の手に捕はれた。彼は勝頼の前に引き出されて、究問せられたが、一伍始終、包み藏さず、白狀した。勝頼は大いに悅び、汝我に仕へんやと云ふ、鳥居は固より願ふ所と答へた。然らば城近く參り、城兵を呼び出し、信長も、家康も、諸方に軍を取結びたれば、當城の後詰は、思ひも寄らず、此上は速かに城を寄手に渡し、一命を助かる可しと叫べ、然らば汝に恩祿を與へ、追々重く用ふ可しと云うた。鳥居は欣然として、一命さへ難有きに、直參に召し仕はれんこと、愈以て忝なし。いかで仰に背く可きと答へた。〔改正參河後風土記〕

鳥居と援兵來の注進

城中の衆出でゝ聞給へ、鳥居强右衛門こそ、忍びて入んとて召とられ、如此（十字架に掛り居る）に成て候へと申ければ、悉く出て强右衛門かと云ふ。其時强右衛門申けるは、信長は出させ給はぬと申せ、命を助け、其上地行を

死ぜる城中鳥居の一言にて蘇生

呉れんとは申が、信長は岡崎迄、御出馬あるぞ、城之介殿（信忠）は八幡迄、御出馬成り、先手は一の宮、本野ヶ原に、まん〳〵と陣取てあり、家康、信康は野田へ移らせ給ひてあり、城堅固に持ち給へ、三日の中には、御運を開かせ給ふ可し。〔參河物語〕

と云うた。『參河物語』には、鳥居を十字架に縛して、城邊に持ち行たとある。此れは城兵を呼び出し、且つ鳥居をして、必らず勝頼の申附通りに、呼ばしむる方便であつたらう。『改正參河後風土記』には、禁めの繩を解き、士卒五三人さし添へ、城際に遣はしたとある。何れにしても彼は、甘くも勝頼を欺いた。彼は此時此處に磔せられたと云ひ、或は有海原にて磔せられたと云ふが、何れにしても磔せられたには、間違ない。兎も角も死せる城中は、鳥居の一言にて、蘇生の思をなした。

鳥居の死と人心の感激

今日でこそ十字架の刑は、異常の感があるが、當時に於ては、切腹、打首にあらざれば、磔であつて、殆んど其間に餘地がない程であつた。されば、當時十

字架に掛けられたる、老若男女の數は、殆んど數ふ可らずである。然も鳥居彈右衛門の十字架、獨り此中に昭著であつた。特に當時甲斐の勇士落合左平治の如き、此圖を背旗とした程であれば、〔息軒遺稿〕其の人心を感激せしめた事の、尋常でなかつたのは、今尚ほ想像することが出來る。

書鳥居勝高死節圖後

瀬川剛司の所談を記す

高は商の誤、下同

吾黨之慷慨喜二奇節一者、尤推二瀬川剛司一、中津人也、腰帶十圍、音吐如レ鐘、每二酒酣氣暢一、軒レ眉掘レ腕、談二古今人可レ駭可レ喜之事一、口角生レ沫、津々乎不レ絕、一日袖中出二小幅一、語レ予曰、是亦藩鳥居勝高死節之圖也、勝高之事、炳二燭史策一、然猶有二遜事可レ傳者一、惜三世無二識者一、請爲レ子誦レ之、勝高既報二援兵之期一、城中獸聲如レ雷、護衛者愕眙失レ措、走歸以告二武田勝頼一、勝頼大怒、命磔二於城南青海原一、有海原洞二兩脇一而去、甲人有二落合左平治一、寛永譜に據れば落合左平治は德川の士なり或は同名異人なるか者一、高二其忠勇一、往而觀レ之、見二其未レ殊、仰二十字架一而號レ之曰、子志烈矣、今雖レ死爲、千載猶レ生、請寫二子圖一、以爲二背旗一、勝高雖レ不レ能レ言、頷レ爲、左平治既寫、憫二其苦楚一、又號曰、謹領三子惠一、請一彈以報、銃二其喉一而絕、左平治之舉、固奇矣、然非四勝高忠勇有三以服二敵人心一、孰肯圖二極刑不祥之狀一以爲二背旗一哉、然則勝高一死、變二動天下耳目一、不三啻如二今日所レ傳、豈不レ盛哉、左平治後仕二紀

勝高一死變動天下耳目

伊一食二五千石一、世傳二此圖一以爲二至寶一、予友神子美、慷慨之士也、謂勝高子孫、改仕二忍侯一、而是圖則藏二於紀人一、不レ宜レ不下置二其一一以表中遺烈上、遂請二落合氏一謄二副本一、即此幅也、〔息軒遺稿〕

第四章　長篠戰爭

【一八】武田方の軍評定

武田方の畫策と長篠城の堅守

武田方にては、信長の出馬は、寧ろ案外であつた。彼等は、長篠城を氣長く圍み、兵糧攻にする心算であつた。然るに警報は頻りに信長、家康の後詰を告げた。されば速かに城將貞昌を誘ひ、降參せしめんとて、五月十五日、貞昌の父、奥平貞能の書簡を僞作し、矢文として城中に投じた。曰く、德川公は織田氏の出馬を待つて、後詰せんとするも、織田氏來らず、赴援の日、期す可らず、汝自から決する所あれと。されど城將は、其の贋筆たるを知り、且つ鳥居强右衛門の言によりて、援兵の近きにあるを知り、倍〻堅守した。

武田軍の豫期著々齟齬す

武田軍の豫期は、著々齟齬した。此上は如何にす可き。勝頼は五月十九日、諸將を會して、軍評定をした。勝頼は決戰論者の主腦である。曰く、敵兵方さに設樂原の西に陣す。是れ天我に快勝の機會を與ふる也。宜しく進んで之を擊破す可し。長篠城の監視は、鳶巢以下諸壘の兵で足る。我は大擧して瀧川を踰えて進み、一大決戰を試む可しと。勝頼は生れながらの勇者である、勝頼今は三十歳、年齡の割合には、軍事にも巧者である。且つ彼には多大の自信力があるっ。彼として斯る意見を立てたのは、當然ではあるまい乎。

甲軍の評定正反對に分る

然も信玄に訓練せられたる馬場、內藤、山縣、小山田、原等の諸宿將は、何れも口を揃へて、其の不可を諫止した。彼等は、寡を以て衆に敵す可らざる、原則を心得て居る。されば現在の甲州勢を以て、織田、德川の聯合軍に當るとの勝算なきは、分明である。彼等が之を不可としたるは、信玄流の安全第一の立前よりすれば、尤の意見である。要するに彼等は、退陣を主張した。敵若し追躡するに於ては、之を信濃の險に阨して、鏖にする迄だと主張した。意見は進擊、退陣の正反對に別れた。

跡部大炊助等の意見

然も跡部大炊助等は、勝頼の意見を贊成し、武田氏は新羅三郎殿より信玄公迄、

御當家二十七代、敵を見て逃げ籠りたる例なし。然るに勝頼公に至り、敵に背を見せ給はゞ、武田家の鋒曲りたりとて、天下後世の批判も耻かし。敵よりかるも、味方よりかゝるも、勝敗は時の運である、何とて御家に瑕瑾を殘し給はんやと云うた。此れは宛も勝頼の胸中を、忖度したものであつた。

宿將中の持重論者馬場美濃守の主張

宿將の中にても、馬場美濃守（信房）は、最も持重論者であつた。彼は云うた、若し強ひて此際我武を揚げんとならば、遮二無二城を攻め落す可し。城中の鐵砲は五百に過ぎず、其の第一射擊が、悉く命中したとて、我兵の死傷は五百人に過ぎじ。更に第二發以後の亂射を見積るも、五百人に過ぎじ。乃ち一千人の兵を損する決心あらば、此城を屠るをは、難くはない。斯くて後軍を回すも亦た可ならずやと。馬場は又た云うた、若し退却が不可ならば、城を取つた後、勝頼公、及御一門、此城に立て籠られ、我等川を渡り、敵と對峙し、時々小迫合にて、長陣に日を送る可し。然る時には、信長方には江濃、及び畿内の人數多く、曠日彌久に耐へ得ず、自ら退却せむと。されど主戰派の跡部等は、之を

勝頼の決戰的申渡し

不可として曰く、信長は敵を見て、空しく軍を旋す漢にあらず、彼若し來り戰はゞ奈何。馬場曰く、然らば死を決して戰はんのみと。主戰派曰く、既に戰を避く可らずんば、已ひを得ずして戰ふは、自から進んで戰ふに孰與れと。議論は何時迄も盡く可くもない。勝頼は御旗、無楯も照覽あれ、明日は是非一戰に勝敗を決す可しと、一同に申し渡した。御旗は八幡太郎義家の旗、無楯は伊豫守頼義より、新羅三郎義光に與へたる鎧にて、武田嫡々相傳の寶器である。武田家にて一たび此の寶器に誓へば、善惡共に翻へすこと能はぬ、古例である。されば馬場、山縣等宿將は、此上は力なし、我々共は御馬前にて死狂ひをいたして、御覽に入候べしとて、何れも退出した。〔改正參河後風土記〕

武田方の非常なる劇點

或は曰く、長坂、跡部等が、主戰論を固執したのは、佐久間右衛門が、信長の密旨を承け、竊かに兩人に向て、裏切の約束をしたからだ。兩人は胸中に、其の必勝を期し、然も之を以て、自個の功とせんと欲し、深く藏めて他に漏らさず、只管決戰を主張したのであると。〔武邊咄〕然も長坂は、此の陣中には居らな

かつたから、此限りにあらずだ。但だ何れにしても武田方に、進退兩派の衝突あつた事は、其の理由の如何に拘らず、非常なる弱點であつた。

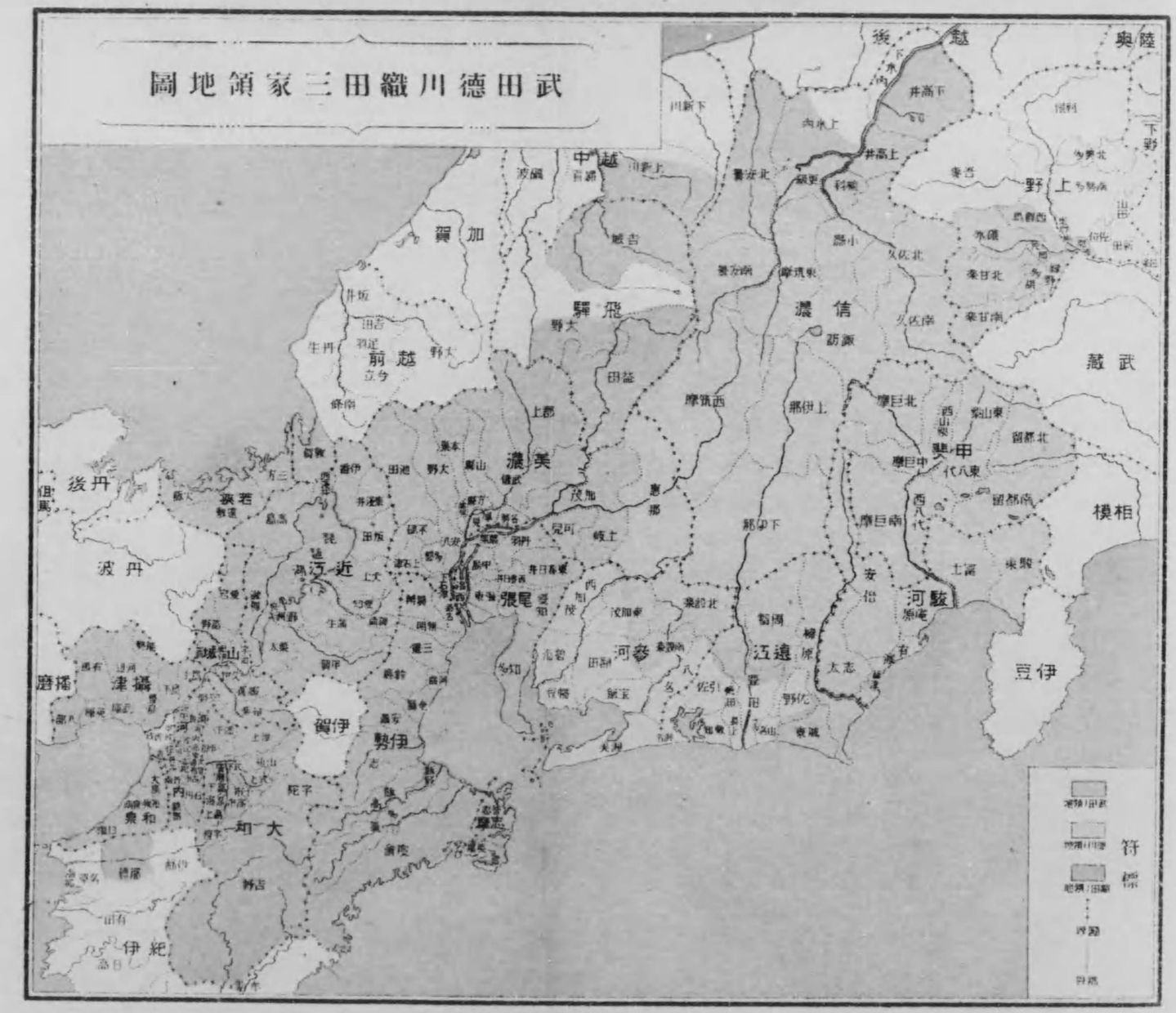
【一九】彼我の形勢

兩軍の形勢觀察

勝頼既に勝敗を、一擲に決せんとす。甲軍と、織德聯合軍との會戰は、最早避け難き運命となつた。今少しく兩軍の形勢に就て、觀察するであらう。

信長と家康との領地と兵數

當時信長は、分別盛りの四十二歳、其子信忠は十九歳、而して其の領地は四百萬石を越え、兵數十萬餘人。元龜三年の末、三方原の戰時に比すれば、將軍義昭を放逐し、朝倉、淺井を全滅し、方さに旭日昇天の勢である。家康は三十四歳、其子信康は十七歳、而して其の領地は、三方原の戰時に比し、聊か減ずる所あり、五十萬石以内にして、其の兵數も亦一萬二千許。然も大敵たる信



【一九】彼我の形勢

兩軍の形勢觀察

信長と家康との領地と兵數

勝頼既に勝敗を、一擲に決せんとす。甲軍と、織德聯合軍との會戰は、最早避け難き運命となつた。今少しく兩軍の形勢に就て、觀察するであらう。

當時信長は、分別盛りの四十二歳、其子信忠は十九歳、而して其の領地は四百萬石を越え、兵數十萬餘人。元龜三年の末、三方原の戰時に比すれば、將軍義昭を放逐し、朝倉、淺井を全滅し、方さに旭日昇天の勢である。家康は三十四歳、其子信康は十七歳、而して其の領地は、三方原の戰時に比し、聊か減ずる所あり、五十萬石以内にして、其の兵數も亦一萬二千許。然も大敵たる信

玄は既に死し、織田氏の優勢なる援兵來りたれば、其の士氣の旺盛は云ふ迄もない。

勝頼の領地と宿將等の反合

翻て甲軍を見れば、三方原大捷の結果、占領したる領地の若干は、信玄の死後、敵の手に取り返されたるも、三方原戰時に比すれば、十萬石以上を加へ、今や百三十餘萬石、兵數三萬三千餘。信玄逝くも、宿將尚ほ存し、主將勝頼は、血氣方さに剛き三十歳、而も明智城を取て、信長の鼻を明し、高天神城を取て、家康に切齒せしめたる手柄は、尚ほ新たなり。但だ宿將連と勝頼とが、何となく反りの合はぬ傾向ありて、爲めに全軍の士氣に、頗る面白からぬ影響を與へつゝある。

勝頼何の恃む所ある乎

信長の引率し來れる兵數、約三萬人、家康の兵數約八千餘人、即ち織德聯合軍三萬八千を以て、甲軍の一萬五千に對す。特殊の事情存在し、突發せざる限りは、勝頼に勝算のある可き筈がない。知らず勝頼は、何の恃む所ありて、邀擊を敢てしたる乎。三方原の役には、甲軍は二萬七千で、聯合軍は一萬であつ

信長の勝算抗方法案出

た、今回は全くそれを顚倒した。

然も當時家康が寡を以て、衆に當りたるは、敵が濱松附近即ち其の枕元を徑して、濶歩したからである。長篠は甲軍に取りては、客土ではない乎。戰はずして退却したとて、何等武を傷くることはない。知らず何の恃む所あつた乎。勝賴は甲軍の精勁、天下無比を恃だであらう。それも一理がある。若し一騎打に立ち向はしめたらば、上方勢は甲軍の槍先、太刀風には、抗する事能はぬであらう。併し世の中は刻々進歩する、甲軍が三方原の陣法を再び行はんとするも、聯合軍は守株の見に泥むものでない。信長は固より甲軍を畏憚した、而して此の一戰が、信長の前途に重大の影響あるを、熟知した。故に彼は一生一代の智慧袋を絞りて、對抗の方法を案出した。

信長の甲軍激擊準備

信長は岐阜出馬の時、諸隊に令し、人毎に柵木と、繩とを携へしめた。彼は今ま連子川を阻てゝ、柵を樹て、諸隊を其の後方に配置した。而して全軍の銃手一萬人の中より、三千人を選拔し、佐々成政、前田利家、塙直政、福富貞次、野々村幸久等をして、其の司令たらしめた。彼は豫じめ甲軍の長所は、騎馬突擊にあるを知り、之を用ふるに所なからしむるの術を講じた。彼警しめて曰く、敵騎前進するも、遽に發射する勿れ、其の柵前に來り逼るに際し、千梃宛代る代る放てと。而して其の長柵の三十間、乃至五十間毎に、門戸を設け、逆擊に便にした。

信長の兵數と武器

信長は單に數の上に於て、敵に勝つのみならず、武器の上にも、敵に勝つた。當時に於て一萬人の銃手中より、三千人を精撰するが如き、贅澤なる事は、織田氏が別人の企て及ぶ能はざる富と、其の富を有効に使用する、進取力とによる他は、不可能の事ぢや。

戰術の上にも勝てる信長

彼は武器の上のみならず、戰術の上にも、亦た勝つた。大膽冒險なる桶狹間役の信長と、愼重堅固にして、臆病なる程用心深き長篠役の信長とが、同一人であるとは、殆んど不思議の樣である。然も彼は一本調子の漢でない。彼の位置にも、一相違がある、彼の年齡にも、相違がある。併しそれのみではない、彼は

戰はざるに勝敗の數定まる

守一の見を持せず、對手次第にて、其の手を代へ、品を換へた。之に反して勝賴は、如何なる時にも、如何なる人に對しても、恒に一本調子にてやり拔いて、其の結局は、天目山の沒落とはなつた。要するに長篠の戰爭は、未だ戰はざるに先ち、勝敗の數は、既に定つて居た。

【二〇】兩軍對峙

甲軍の進出と其の陣容

甲軍は天正三年五月廿日、瀧川を渡り、清井田に進んだ。其の右翼は約三千人、穴山梅雪、馬場信房、眞田兄弟、土屋昌次、一條信龍等である。淺木附近に陣した。中央隊は約三千人、武田信廉、內藤昌豐、原昌胤、其他西上野の諸士である。清井田附近に陣した。左翼隊も亦た約三千人、武田信豐、山縣昌景、小山田信茂、跡部勝資、小幡信貞、信秀兄弟等、清井田の南方高地に陣した。總豫備隊約三千人、武田勝賴之を率ゐ、有海原の西方に陣した。

信長の陣容

其他長篠城監視として、小山田昌行、高阪昌澄、室賀信俊等二千人は、城の西方に陣し。鳶巢山の壘、及び其の支壘を守る兵約一千人。是れ其の概數である。

之に對して、信長は五月十八日、設樂原の西に到り、自から極樂寺山に陣し、柴田勝家之に屬し。信忠は天神山に陣し、河尻秀隆之に屬し。御堂山には、信忠の弟北畠信雄陣し、稻葉一鐵之に屬し。茶磨山には、佐久間信盛、池田信輝、丹羽長秀、瀧川一益等陣し。更らに其の東方には羽柴、水野、蒲生、森、安藤、不破等、其他大和、河內、和泉、攝津、若狹の兵屯した。以上其勢三萬。

家康の陣容

家康及び信康は、十八日織田軍に先ちて設樂原に到り、家康は彈正山に、信康は松尾山に。而して彈正山の東方には、大久保忠世、本多忠勝、石川數正、榊原康政、酒井忠次、平岩親吉、其他の諸將陣した。以上其勢八千。

其實は設

兩者合計三萬八千となる。

抑も此役を長篠戰爭と云ふも、其實は設樂原戰爭だ。其の會戰地は、雁峰山—

樂原戰爭並に其の地勢

或は寒防ケ峠と云ふ―麓より豐川に亙れる、設樂原の高原である。而して北は雁峰山に接し、南は豐川に瀕するが故に、其の地勢も、北高く南卑く、其の小川の流も、頗る急である。又た東は遠く甲斐、信濃の山岳に連り、西は遙に遠江、伊勢の海灣を控ふるを以て、東高く西卑し。西より東へ向へば、足指の稍仰ぐを覺ゆ。而して其の高原の中にも、丘陵起伏、波濤の如く、時には突兀として孤聳し、時には簇擁して群立す。偶ま其間に田野あるも、平坦の部分は甚だ少く、人馬掛引の困難なるは、云ふ迄もなし。而して連子橋下の小川の如きは、橋の左右約一町許の處、險崖をなし、急湍激流、南して豐川に入る。

甲軍の陣容と酒井忠次の策

信長は物見をして、甲軍を覗はしめた。何れも甲軍の備の堂々たるを報告した。上方勢は、愕然色を失うた。但だ酒井忠次のみは、敵兵寡少、味方の勝利疑なしと申した。信長大いに喜び、臆病者の眼には、白鷺も、旗と見ゆ。卿が見込、百に一も外るゝとはあるまじと悅んだ。酒井は更らに諸將列座の場に於て、信長に向て、迂回して鳶巢壘を攻略す可く献策した。信長は聞きもあへず、大に怒れる面色にて、汝は嗚呼なる男かな、斯る大軍に、左樣の小策を用ふ可きかと叱責した。酒井は不面目にて退出した。

酒井踴躍して進發

然るにやがて信長は、酒井を呼び返し、打ち解けたる顏色にて對坐した。汝の謀尤も妙、嚮きに叱つたのは、謀の敵に漏れんとを恐れたからだ。急ぎ打ち立てと云うた。酒井は踴躍した、而して信長の檢使を請うた。信長は銃卒五百を分ち與へ、金森長近、佐藤方秀等を從はしめ、愈よ敵營に達すれば、烽火を擧げよと云うた。家康も亦た、松平家忠、同忠次、本多廣孝、其子康重、松平伊忠、同康忠、其他奥平貞能、牧野、菅沼、西郷、設樂等の諸將を之に從はしめた。

酒井の部伍整ふ

兵數約三千人、師ケ原より大雨を冒し、豐川筋なる廣瀨を渡り、設樂貞通の一隊五百人を、船著山の麓、樋口に派し、敵兵の南下に備へしめ。松山越に到り、馬を下り、甲を脱し、之を擔ひ、嶮岨を攀づる三町許、暗中摸索、魚貫して上り、菅沼山に到り、甲を著け、部伍を整へた。

武田信實の戰死

二十一日拂曉、其兵を分けて、三隊となし、一は中山に到り、敵營に放火し、烽を揚げた。敵兵は狼狽して鳶巢に走つた。二隊は鳶巢に向つた。守將武田信實は、力戰して死した。酒井の献策は、甘く其圖に中つた。

【三二】長篠戰爭

信長の廟算定まる

信長は意氣昂揚した、二十日の夜、酒井忠次等を迂回せしめて、鳶巢壘に向はしめたる後。自から營を茶磨山に進め、諸隊を柵内に配置し、別に敵兵を誘ふ爲めに、佐久間信盛の一隊を、柵外に出し。又た右翼柵外に、大久保忠世の一隊に銃手三百人を附し、側擊に充て、徐ろに甲軍の進擊を待ち受けた。而して信長は、此度は敵共を、練雲雀の如くせんものと云うた。彼の廟算は既に定つた。敵は全く彼の罠に罹りつゝやつて來た。

長篠戰圖
東軍本營
西軍本營
德川
織田
御信信信
原長忠雄
二万分之一尺
町
黑
須長
長森
田高名
宮熊
大海
木淺
伊
南
設
樂
夕下
田井清
有海
野場篠
長篠城
本業
大通寺
鐵ヶ懸臺
鳥ヶ巢山臺
中山臺
久間山臺
久間
長
川帝
豐
田樋
川
岩廣
川路
正學寺
竹廣
田柳
山正
前門
廣重
樂設
高宗
井上
井平
八幡
山寺崇樓
鄙矢西
鄙矢東
天神山
日夏
上川
唐茶
堂觀
尾松
延常
草部
大宮
215.1
159.3
酒井忠次ノ迂回進出

甲軍の全軍展開進撃

五月廿一日、甲軍は意外にも、突喊の聲を、長篠の方角に聞いた。鳶巣山には烟焔が騰つた。酒井忠次の牽制運動が、利目のあつたのだ。扨は敵兵後に廻つた乎と、疑惧した。されど矢弦上にあれば、發せざるを得ずで、勝頼は全軍を展開進撃せしめた。彼等は信玄以來の武勇を恃み、荒ら働きもて、大敵を蹂躙せんとするのである。方さに是れ人と、器械との戰爭である。健氣と云へば、健氣である。悲壯と云へば、悲壯である。

武田德川兩軍精英の白兵戰

甲軍左翼隊の山縣昌景は、小笠原、跡部、甘利等の隊二千餘人と與に、大久保隊の右に迂回し、連子橋の南方、木柵なき所より、聯合軍の側面に出でんと試みた。然も小川深く、岸高く、とても渉るとが可能でない。そこで引き回して、大久保隊に突て掛つた。大久保隊は鐵砲にて之を打ち倒し、更らに突き返した。今や武田軍の精英と、德川軍の精英とは、此處に白兵戰となり、一進一退、混闘の修羅場を現出した。

甲軍の中央隊は、織田兵に向つて進擊した。然も內藤、原、武田信廉の諸隊、

甲軍中央隊の退却

何れも木柵に逼れば、織田兵の銃火に撃破せられて、其の目的を達し得なかつた。而して左翼隊の小山田隊は、山縣隊の後を承け、又た小幡隊は、小山田隊に代り、大久保隊と戰ひ、德川兵の前なる木柵に逼らんとしたが、銃火並に突擊の爲めに、何れも退却を餘儀なくせられた。

胸に一物ある馬場信房

豫て敵を誘ふ役目ある、織田軍左翼柵外の、佐久間隊は、甲軍の右翼隊の馬場信房と衝突した。佐久間は佯りて敗走したが、馬場隊は、之を追うて、其の丸山なる陣所を奪ひ、此處に隊を止めて、木柵の前に進まなかつた。馬場は確に胸に一物あつた。此には信長方も案外であつた。馬場は人をして、眞田、土屋等に告げしめた。曰く、予は思ふ仔細があれば、姑らく此處に止まる可し。卿等は進んで手柄をせられよと。彼等は均しく進んで、木柵に逼つた。織田兵は、一齊射擊もて、之を塵にせんとした。彼等は尙ほも屈せず、木柵を破りて闖入せんとした。織田軍の柴田隊、羽柴隊等は、其の北方森長村より迂回して、側擊した。是が爲めに甲軍の眞田信綱、昌輝兄弟、土屋昌次等、皆な苦戰して

織田兵の一齊射擊と甲將の戰死

甲軍の退却と馬場の總攻擊

討死した。

甲軍總豫備隊は、勝頼麾下の士と與に、兩翼、及び中央の諸隊に踵ぎ進み、奮闘したが、大勢既に非なりで、何れも退却した。而して左翼隊の山縣昌景も、既に斃れ、其他の諸隊も死傷過半。勝敗の形既に瞭然となつた。佐々成政は、此色を見て、信長に最早潮合善しと申べた。信長は全軍に總攻擊を命じた。織田勢は正面より、德川勢は左側より、柵を出でゝ一齊に進擊した。是迄兵を勒して動かなかつた馬場信房は、今は一命を致すの秋なりと、人をして勝頼に退去を勸め、自から其後を援護し、且つ戰ひ且つ退き、勝頼の既に遠く去りて、其影を見ざるに至り、猿橋附近より馬首を西に回らし、出澤の岡にて、討死した。中央隊の內藤昌豐も亦た、勝頼の去るを目送し、信房に先ち、宮脇附近にて討死した。

勝頼の退去と馬場內藤兩將の討死

甲軍は鳳來寺山方面に、潰走したが、瀧川に阻てられ、橋を爭ひ、壑に陷る者無數。約二萬の軍勢、免れて歸る者、三千に過ぎなかつた。而して勝頼は、二

良に稀有の激戰

三の從騎と興に、小松ケ瀬を渉り、黒瀬を過ぎ、武節の城に入つた。當日の戰爭は、午前五時に始まり、午後三時に畢つた。聯合軍の斬獲する首一萬餘、其の死傷も亦た、六千を下らなかつた。良に稀有の激戰であつた。

勝頼容易に立退かず

勝頼敗戰立退の事

勝頼は討死可レ被レ成と被レ仰、少も退給ふ氣色もなし。然る處に穴山梅雪來り、早々御のき候へと申上らる。勝頼聞入不レ給、そこにて梅雪大に腹を立、日頃我儘にて家老の申事をも不二聞入一候故、今如レ此の仕合也。此上にも承引なき事不覺悟なる仕合とて刀にそりをかけ給へども勝頼敢て聞入不レ給、然る處初鹿野傳右衞門御兩人の間へ入、刀にそりをかけ梅雪被レ申るは、傳右衞門かく言は此上にも勝頼をのかせ申度間申也、早々馬にのせ申せと被レ仰、そこにて傳右衞門長り、梅雪樣の被レ仰候儀御尤に奉レ存候、今の不禮御免被レ成候得と申て、小性共それ〳〵と申候て馬にいだきのせ申候、勝頼も左候はゞ力なし乘候はんと仰られ、夫より押太鼓にて行義に段々のき給ふ也。〔長篠合戰物語〕

【二二】長篠戰爭餘談

信長性格兩傾端の露呈

桶狹間と、長篠とは、信長の性格の兩極端を、露呈したものである。前者は奇兵、後者は正兵、前者は寡を以て、衆を制し、後者は衆を以て、寡を制した。前者は猛勇突擊を以て、制勝の主力とし、後者は銃器と木柵とを以て、制勝の主力とした。若し信長が、今川勢に對する筆法を以て、武田勢に對せん乎。信長自から義元の二の舞をせねばなるまい。運用の妙は、一心に存す。此の兩戰爭は、比較研究すればする程、吾人に種々の暗示と、教訓とを與ふ。

* * * * * *

大久保隊の戰端開始

此の戰爭は、大久保隊より開始した。『其頃德川御陣には、大久保治右衞門（忠佐）其兄七郎右衞門に向ひ、當手は本主、織田勢は加勢也。萬一織田衆に軍を始めらるれば、當手の恥辱、是に過ぐ可らず。某進んで足輕軍を始め候はん。』と、斯くて彼は銃隊を率ゐて、柵外に屯したのである。〔改正參河後風土記〕されば彼等

兄弟の働らきの、拔群であつた事は、云ふ迄もない。

大久保兄弟奮戰の狀況

兄弟の者共は、敵味方の間に、亂入て、敵蒐れば引、敵退けば蒐り、多き人數を、二人の采に付て、取て廻しければ。信長是を御覽じて、家康の手前にて、金の上羽の蝶の羽と、淺黃の石餅の指物は、敵かと見れば味方、又た味方かと見れば敵也。參て敵か味方かと見て參れと仰ければ、家康へ參て、此由斯くと申ければ。否々敵にはあらず、我等が譜代久しき者、金の上羽の蝶の羽は、大久保七郎右衞門と申て、石餅が兄にて候、淺黃の石餅は大久保治右衞門と申て、蝶の羽が弟にて候と仰ければ。急ぎ立歸て此由申ければ、信長聞召て、扨も家康は能き者を持たれたり。我は彼等程の者をば持たぬぞ。此者共は能き膏藥にてあり、敵にべつたりと付て離れぬと仰けり。

大久保一黨の武勇

此れは大久保兄弟の弟、彦左衞門忠敎の『參河物語』の一節である、聊も同胞の爲に、曲筆したものとは覺えず。三方原役の夜、甲軍に夜打を掛けたのも、大久保忠世であつた。大久保一黨の武勇は、參河武士中でも、傑出して居た。

德川氏の兵鋒

姉川の戰爭には、德川が援軍で、織田が主軍であつた。然も德川方から戰鬪を開始した。德川の兵鋒は、武田氏を除けば、恐らくは海內第一であつたらう。それに他日武田氏の兵を加味してからは、海內無雙と云うても、差支なかつたであらう。此が家康の、天下に於ける重大なる、信狀であつたことは、勿論である。

此の戰爭と太田牛一の記事

此の戰爭に就ては、記錄紛々、殆んど撰擇に遑あらず。但だ太田牛一の記事は、戰報として精要を少くも、戰情を描いて、殆んど神に入るの妙がある。

信長者、家康陣所に、高松山とて、小高き山御座候に、被取上、敵の働を御覽じ、御下知次第可レ働の旨、兼而より被仰合、鐵砲千挺許、佐々藏之介、前田又左衞門、野々村三十郎、福富平左衞門、塙九郎左衞門、御奉行として、近〳〵と足輕懸られ御覽候。前後より攻められ、御敵も人數を出し候。一番山懸（縣？）三郎兵衞、推太鼓を打て懸り來り候。鐵砲以て散〳〵に被打立引退。二番に正用（遣遙？）軒入替かゝれば、のき、退ば引付、御下知の如く、

退ぞく引付鐵砲にて待請打倒

鐵砲にて過半人數うたれ候へば、其時引入也。三番に西上野小幡一黨赤武者にて、入替懸り來、關東衆馬上の巧者にて、是又馬可レ入行にて、推太鼓を打て懸り來、人數を備候。身がくしとて、鐵砲にて待請うたせられ候へば、過半打倒され、無人に成而引退。四番に典厩一黨黑武者にて懸り來る。如レ此御敵入替候へども、御人數一首も無ニ御出し一鐵砲許を相加、足輕にて會釋なくねり倒され、人數をうたせ引入也。五番は馬場美濃守推太鼓にてかゝり來、人數を備、右同斷に勢衆うたれ引退。

唯だ鉛丸の的となる

是れ宛も巧妙なる獵夫が、獵場を構へて、鴨を狙擊するが如く。如何なる百戰の老兵も、鴨一羽の價値よりなく、唯だ鉛丸の的となるに過ぎなかつたのである。

勝頼と作戰計畫の錯誤

勝頼は、確かに其の作戰計畫を誤つた。家康は云うた、信長と我は衆、勝頼は寡、此方は柵を三重に結ひたるに、彼は何の思慮もなく攻め掛りし故に、敗北した。若し瀧川を前に控へて對陣せば、此方多勢たりとも、十日とは持堪へ得ずして退陣す可く、其時追打せば、十に八九は、勝頼の勝利疑ひなかりしに、惜しき事をしたと。〔中興源記〕是れ果して家康の言であるや、否やは、審かでないが、亦た確かに一說である。

長篠の一戰は武器と人力の競爭

後世甲州流の軍學抔と申すも、要するに耳食者の論で。當時に於てさへも、信玄流の軍法は、信長の斬新なる戰術に比すれば、時代後れとなつた憾がある。如何に推太鼓で、密集隊を以て、突擊し來るも、一齊射擊には敵す可らずである。鐵砲の威力を、最善に利用したのは、當時に於て、實に信長を以て、其の隨一とせねばならぬ。約言すれば、長篠の一戰は、武器が人力に勝つたのだ。

勝敗の第一因は武器の優劣

長篠役彼我の戰術と武器とに就て

陸軍中將　押上森藏寄

（前略）余は長篠役勝敗の第一因は、兩軍武器の優劣にありと信ず。抑も鐵炮の我國西陲に傳來せしは、天文十一年或は十二年なるが、夫より此役に至るまで三十三、四年、而も織田信長の今川義元を桶狹間に殲し、織田氏勃興の運を開きたる永祿三年より十六年、又其の入京せし永祿十一年より

僅に八年にして、新武器試用時代に在ながら、此役に銃手一萬と鐵炮三千挺を有せしは、土國有利の地に在りしと云ふと雖も、絶大努力の結果と見るべし。馬合軍は織田本軍に三千挺、德川本軍は不明なるも、迂回軍に織田より五百挺を添加し、長篠城守の德川軍五百挺總計約五千挺は之有りしならん。之に對する武田軍武器中火兵何程ありしか、蓋し數るに足らざりしならん。武田氏は海外文明に接觸する事、織田氏に比すれば遙に劣れるは地勢不得止と雖も、德川氏に比すれば伯仲の間に在り。小國德川氏すら火器の多數を有せしに、強大武田氏にして此の接壤敵國の武裝變化に注意を缺きしは怠慢なりと云ふ可し。想ふに甲越對等の武國を以て天下に鳴り、當時拔群の戰法と既有の武器武伎に恃む處あり、却て此新鋭の兵器採用に努めざりしは何ぞや。武田氏が地勢上之を得ることは頗る困難なりとするも、此の新鋭兵器に對する戰法を講究して、我短を補はざるべからざるに、此役一も其事あるを見ず、依然上下とも舊阿蒙の戰法を以て戰ひ、可惜勇將猛卒を火兵の下に徒死せしめ、亡國の端を開きしこそ是非なけれ。假に信玄之を指揮するも、如此對戰にては同結果に終らんのみ。若し信玄在らしめば、彼の多智なる決して戰はざるべし。故に予は曰はんとす、此大敗の第一因は武田軍の武器の劣れると、新兵器に對する智識乏しく、何等の對策なく、自ら招きし無謀の敗軍なりと。要之に器械力と戰て、腕力の之に敗れしは、當然の理也。

武田氏は何故新鋭武器の採用に努めざりしぞ

織德軍の戰法一も遺算なし

織德軍の戰法は、注意周到一も遺算あるなしと驚歎す。五千の鐵炮は總兵數に對し約七、八分一にして、素より一大威力たり。之に加えに陣地を撰み、強固に編制する術を施せり。其の柵材料を進軍中に收集し、各人携持せるは、豫め戰地を知り缺乏なからしむる準備なり。此携持遠きに致せしに徴すれば、柵と云ふも今日見るが如き堅柵に非るや知るべし。想ふに壕を掘り堤の如く塡土し、其上に植立せし矮柵ならん。而も專守防禦に陷らざる樣に、二十間三十間毎に出路を開きしは、所謂攻勢防禦にして、攻勢精神を阻碍することなし。果して敵の鋭氣を柵下に萎靡せしむるや、好機を逸せず忽ち攻擊に移り、以て完全なる大勝を得たり。決して柵の陰に隱て戰ひしに非ず、充分計畫し敵を誘致して其精鋭を殲せしなり。又新兵器用法も、其の性質を理解し居りしを認む。當時の鐵炮は彈藥詰替の速度甚だ遲く、次發までに時間の間斷あり、是れ其の弱點にして、敵に乘ぜられ易き缺點とす。又彈達距離近し、故に遠地に効なし。唯だ爆聲と火と烟とは、對敵を恐れしめたるべし。織德軍此兵器を利用するに、敵來り迫るに及んで初て發射せよと命じ、又三千挺を千挺づゝ遂次射擊せよと命ず、實に敬服の外なし。蓋し三千挺の一齊射擊快は快なれども、命中精度の劣れる此頃の鐵炮は、死傷を與ること一部に止り、潮の如き寄手は次發まで間歇する時間を利用し、陣地を突破し入らん、此の缺點なからしむる爲め、輪環間斷なき千挺逐次の一齊射擊を命じ、又無効の彈丸なからしめんとて、過早射擊を禁ず、應用至妙と評せざるを得ぬ。一齊射擊は亂射を防ぐ唯一の指揮法にて、注意既に茲に達せり。進まんか柵に阻れ突入する能はず、躊躇すれば鉛丸に斃る、進退谷るとは此事なり。如此して味方を損せず敵を殺傷し、大いに亂れ動くの機に乘じ、出路より突出し、逸を以て勞を伐つ、皆な揺蕩し盡さる。戰略戰術兵器の利用、現今の戰術と雖も多く加ふることなかるべし。

現今の戰陣と雖も多く加ふること無し

以上述る如く織德軍は充分計畫し能力を盡し、勝つべき樣にして大勝を得たるものにして、決して武田勢を恐れたるに非ず。僥倖の勝に非ず、誠に立派なる大捷なり。上杉謙信と雖ども如此兵器を有ち之を妙用するものに對し、舊戰法を以て戰はゞ結果如何あるべきや。天正六年此英傑病歿して、

謙信と雖も勝利覺束なし

信長と武を角する機會なかりしは、寧ろ幸なりしやも知るべからず。（後略）（大正七年十月記）

【二三】長篠戰爭の影響

甲軍を長篠附近より一掃

長篠城を監視したる、甲軍の高阪昌澄、小山田昌行等は、鳶巣墨陷り、設樂原の敗戰を聞き、其營に火を掛け、一部は大野に、他の一部は門谷方面に退却した。城將奥平貞昌は、城を出でゝ之を追擊し、大野に抵り、昌濟以下二百人を殪した。鳶巣を攻め取りたる、酒井支隊中の松平伊忠は、餘りに敵兵を追躡して、端なく門谷方面に退きたる小山田昌行に出會し、前後に敵を受けて、戰死した。久間山壘は、酒井支隊の奥平貞能先登し、城兵亦た來り攻め、互ひに呼應して、之を拔いた。此に於て甲軍は、全く長篠附近より一掃し去つた。

當時落首があつた、

信玄の跡をやう〳〵四郎殿敵の勝より名をばながしの

又た曰く、

勝頼と名のる武田の甲斐もなく軍に負けてしなのわるさよ

と。勝て賞められ、負けて毀らる。戰爭も相撲も、人情は只だ一つ。勝頼も亦た慘なものであつた。

此度の一戰は、物質上にも、精神上にも、甚大の影響を、交戰の兩軍に與へた。山縣、内藤、眞田兄弟、馬場、其他信玄以來の宿將、老兵の戰沒したるもの、擧げて數ふ可らず。極言すれば、甲軍の精英は、殆んど殲きたと云ふも、過當であるまい。

甲軍の精英殆んど殲く

武田の損失は織田德川の利益

精神上よりすれば、從來未だ曾て敗北の例なかりし、武田家の弓矢が、此度の一戰で、彌よ曲がり初めたのぢや。所謂る甲斐の常勝軍も當てにならぬことなつた。斯く觀來れば、其の損害の、武田氏に及ぼした程度が、測定せらるるではない乎。而して其の程度が、取りも直さず、織田、德川兩氏に於ける、利益の程度である。

長篠の一

されば信玄の、多年經營したる覇圖は、長篠の一戰にて熄むと云ふも、差支あ

戰と信玄潮岡の終熄

るまい。然らば何故に信長は、此勢に乘じて、積水を決する如く、圓石を轉ずる如く、甲府に進擊せざりし乎。分別多き家康さへも、之を希望し、之を勸說したと云ふではない乎。

最も能く時間利用の信長

彼は姉川に大捷を得てさへも、其の効果を收む可く、三個年餘の後迄保留した。されば彼が此際に於て、今一度出直し來る方略を取つたのも、決して無理はない。彼は性急者の標本視せられて居る。『啼かぬなら殺して仕舞へ杜宇』とは、彼の適評として、世間に通用して居る。併し事實は全く之に反して居る。彼が性急は、急なる可き場合に急なるのだ。彼は最も能く時間を利用した。機の來るや、電光石火に之を捉へた、機の來らざるや、忘れたるが如く之を待つた。

家康と武田氏所屬

彼は既に武田氏に、致命傷を與へたれば、此上は其の自から斃るゝ場合に、之を斃さんと心掛けた。而してそれ迄の所は、家康に任せ切つた。横著と云へば、横著であるが、賢明と云へば、賢明である。

彼は家康に云うた、御身は此より駿河に手を著けよ、予は岩村を取り、信濃に入る可しと。當時參河、遠江に於て、尙ほ武田氏に屬する城砦、十數個あつた。參河では築手、田峰、武節、足助等、遠江では二俣、乾、光明山、高天神、諏訪原、小山等であつた。家康は戰後之が攻略に勗め、五月に足助を取り、六月に築手、田峰等を取り、七月に武節を取つた。而して其の二俣は、六月之を攻め、十二月に取り、諏訪原は七月之を攻め、八月之を取り、牧野原と改めた。其他の諸城は、尙ほ數年の力攻を費した。

城砦の攻略

信長の行賞と岩村城の攻略

信長は、奥平貞昌の籠城を仕遂げたるを嘉みし、偏諱を授けて、信昌と名乘らしめた。彼は酒井忠次の功を賞した。五月廿五日、岐阜に凱旋した。而して信忠をして、岩村城を攻めしめた。攻圍半歲、十一月廿一日に至り、漸く食盡きて、城將秋山晴近出でゝ降つた。信忠は城兵を屠り、晴近を岐阜に送つた。信長は彼を長良川畔に磔殺した。而して岩村城には、河尻秀隆を入れて、之を戍らしめた。

長篠一戰後の勝賴

勝賴は長篠の一戰に、致命傷を被りつゝも、尙ほ餘勇を買うて、諏訪原城陷

り、小山城危きを聞き、天正三年九月、潛に二萬餘の兵を率ゐ、駿河に入り、家康を不意打せんとした。家康は之を避けて去つた。其の十一月には、岩村城の後詰に出掛けたが、信濃に留まりて進まず。城陷るに會うて軍を旋した。要するに長篠役以來、武田氏の位置は、二流に下つた。從來德川の上に位したものが、今は德川の下に就く可くなつた。信長は此が爲めに、其の背後の心配は、全く絶つて、其の力を京畿に專らにすることを得た。但だ一敵減ずれば、一敵生ずで、此れからは上杉謙信が、又た信長の心配の種となつた。

一敵減ずれば一敵生ず

奥平貞昌武勇感賞の事

家康と信長貞昌の勳功を賞す

長篠の籠城すでに終りし後、奥平平九郎貞昌をめし出され、貞昌若年といひ、數日の間小勢もて大敵を引うけ、窮城を保ちし事、誠にためしなき働といふべしとて御感斜ならず、またその七人の家長等をめし出て、此度の忠節を賞せられ、汝等が子孫後代に至るまで見參をゆるさるゝよし仰付られ、今に奥平が家人毎年謁見を給ほる、此時の例による所なりとぞ、貞昌には作手、田嶺、長篠、吉良、田原の内、遠州、刑部、吉比、新庄、山梨、高邊等の地若干下され、姉川の役に信長より進ちせし大般若長光の御刀をも下され、又信長より申さるゝ旨あるにより、第一の姫君もて貞昌に降嫁せしめらる、その後貞昌岐阜へ參り信長に謁見せしに、信長もいたくその功を賞せられ、貞昌が此度の勳功武士の模範ともなれば、向後武者之助と改名せよとて、己が一字を授け、信昌と名乘らしめ、そが上にもさま〳〵引出物せられしなり。（東照宮御實記附錄）

第五章　北陸經略

【二四】越前門徒退治（一）

目指す對手は結局謙信

信長は長篠の大捷にて、當分東海道方面の憂を絶ち、更らに北陸經略に其力を轉じた。目指す對手は、結局謙信である。彼は苟も乘ず可き機會さへあれば、遠慮も、會釋もない。謙信の機嫌を取るも、畢竟信玄を牽掣せん爲めだ。信玄既に逝き、其の扶植したる勢力、既に畏るゝに足らざるに於ては、謙信即ち信玄の相續者として、信長の庖刀の爲めに、俎板となる役目を務めねばならぬ。謙信がそろ〳〵感付きたるも、亦た已を得ぬ譯である。

越前守護代前波の失政

＊　＊　＊　＊　＊

信長は朝倉氏を滅して、降將の魁前波播磨守長俊を、守護代とした。彼は將士の心を失うた。

騷擾の發端と一向門徒

正月十九日（天正二年）越前の前波播磨、大國守護代として被二居置一候處に、誇二榮花榮耀一、恣相働傍輩對し萬事に付て無禮至極に致二沙汰一の條、諸侍企二謀叛一生害させ、其上國端境目に要害を構へ、番手の人數を置、其後者越前一揆に罷成の由候。〔信長公記〕

乃ち朝倉氏滅て半歳ならざるに、越前は門徒一揆の手に落ちた。信長は敦賀迄守備兵を出し、當分其の成行に任せた。

元來騷擾の發端は、越前の地侍共が、前波の節度に服せず、之を切腹せしめたにあるが。彼等互に鬩ぐ際に、乍ち一向門徒の乘ずる所となつた。當時加賀は、本願寺支配であつて、人民は之を便とした。越前の人民も、心竊かに之を羨んで居た。

近年加賀國は、本願寺門徒一揆を起し、國主富樫介政親を追出し、押領して、國郡殘らず本願寺の支配とせり。然れば武家を地頭にして、手剛き仕置に逢はんよりは、一向坊主を領主にして、我儘を云ひて、あひしらはん事、士民

の爲には一段よき國守なりと悅び、越前の土民も、是を羨み、動もすれば一揆を起さんとたくみ居たり。〔總見記〕

越前一揆の蜂起

本願寺が、勢力の鞏固であつたのは、念佛專修の力のみではない、其の人民に及ぼす物質的利益あるが爲めであつた。別言すれば人民は、武家の支配よりも、門徒の支配を便としたからだ。越前の一揆も、此の意味に於て蜂起した。而して加賀の門徒政府より、下間筑後法橋、杉浦壹岐法橋抔出陣し、越前を押領した。如何なる時代でも、民衆の力は、侮られぬものぢや。されど門徒政治も、寛大政治も、亦た害なきにあらずだ。

紀綱なき政治の弊害

扨國中の一向坊主は、檀那土民の助力を以て、渡世を營み申す可し。檀那の土民は、國中の諸納所持來る田畑とも、半分は上納して、殘る半分は、各〻所得申すべしと。一々に仕置あり、君臣のあるに似て、越國しばらく無爲なれども。土民百姓等あまり過分の有德となりて、奢を極め、後々は地頭坊主の下知をも聞かず、我意に任て擧動ふ儘に、終には又內輪崩れとなり、上下の不快やむ時なし。〔總見記〕

此の時節到來を待ちし信長

是れ亦た紀綱なき政治の、必然の結果と云はねばならぬ。信長は實に、此の時節の到來を待つて居た。

一向宗の大坊主どもと、土民等と不和になり、又た合戰に及ぶ。一國散亂して諸村騷動す。其の合戰のしどけなき事、譬を取るに物なし。今は早や守護も百姓も、戰屈し、力盡きて、父子の間に心を置き、君臣の中互に疑ふ。寢ても寐ても安からねば、次第〳〵に弱り果て、哀れ何とぞして、一國一統に軍をやめ、半日なりとも心安く、無爲無事に暮さまほしく、願はぬ者こそなかりけれ。此の兵亂に取紛れ、しか〳〵耕作をも營まざれば、皆渴命を繫ぎ兼けり。〔總見記〕

信長と越前一揆討伐軍

人心既に離散す、是れ實に信長の乘す可き機會と云はねばならぬ。彼はいかで此を取り逃がす可き、乃ち天正三年八月、越前一揆の討伐軍を催ほし、自から出馬した。

【二五】越前門徒退治（二）

信長の岐阜出發

信長は、天正三年八月十二日、岐阜を發し、十三日は江北小谷の羽柴秀吉の城に一泊し、十四日敦賀に著し、諸將の向ふ所を指揮した。

一揆方の容易ならざる防禦

一揆方に於ては、江越の境、虎杖城には、下間和泉、久末の照嚴寺、宇坂の本向寺等之を守つた。木目峠には石田の西光寺、和田本覺寺等、一揆三千餘人を率ゐて陣した。鉢伏城には杉浦壹岐法橋、阿波賀三郎兄弟、專宗寺等二千餘人立て籠つた。觀音丸に野島富長千餘人。今庄、火打兩城には海川、新道川二川の合流を湛へ、下間筑後法橋、藤島超照寺、荒川興行寺等在つた。府中龍門寺に三宅權之丞、中河内に七里三河守、河野の新城に、若林長門守父子、安井稻村、杉津口に、大鹽の圓光寺、並に浪人堀江中務丞景忠等があつた。堀江は大阪本願寺に恨ありとて、當年三月頃より内應して居た。一揆とは云ふものゝ、何れも容易ならぬ防禦であつた。

信長と大仕懸の軍配

信長は元來、一向宗の手强さを熟知した。されば彼は今回大仕懸にて、出掛けた。彼は越前浪人を先陣として、柴田、佐久間、瀧川、羽柴、明智、丹羽、其他あらゆる將士を伴ひ、殆んど織田家中の總幕出揃であつた。而して丹波より も、守護の一色氏を始めとして、數百艘の援兵あり、又た海上を働く人數も少くなかつた。

羽柴明智等の進擊

寄手は風雨にも關らず、兵を出した。圓强寺、若林父子は兵を出して、之を拒んだ。羽柴、明智は之を擊退し、若林父子の城に乘込み、之を燒き拂ひ、二三百討取、其首を敦賀なる信長の陣に致した。夜に入りて府中龍門寺に忍び入り、放火した。木目峠、鉢伏、今庄、火打城にある者、何れも其跡を燒き立てられ、府中に潰走した。羽柴、明智は、『府中の町にて、賀州、越前、西國の一揆、二千餘騎、被二斬捨一、手柄の程不レ及二是非一。』〔信長公記〕ぢや。阿波賀三郎、同與三兄弟は、降人となつたが、許容なくして、生害した。

十六日には、信長敦賀を發し、木目峠を打ち越し、府中龍門寺構に陣した。朝

朝倉景健の降參と自殺

倉孫三郎景健は、下間筑後、下間和泉、專宗寺等の山林に隱れ居るを引き出し、其頸を斬り、之を土產に降參した。されど彼は曾て朝倉氏滅亡の際に、寬典に處せられつゝ、更らに一揆に與みし、今復降人に出づること不屆なりとて、信長は向駿河に命じて、自殺せしめた。『孫三郎家來金子新之丞父子、山內源右衞門と申者、兩三人追腹は、是等の働見申候て、向駿河、消レ膽感じ被レ申候。』

〔信長公記〕

信長と一向宗一揆に對する殘忍性の發揮

彼には此の如き、奇特なる殉死者があつた。

八月十八日には、柴田、丹羽の徒、鳥羽城を攻め、五六百斬り捨てた。金森五郎八、原彥次郎等は、濃州口より大野郡に打入つた。

信長の一揆を驅る、獵夫の山を焚いて獸を驅るよりも、慘酷であつた。彼は一向宗一揆に對しては、特に猛烈なる殘忍性を發揮した。

國中之一揆、既致ニ廢忘一（敗亡？）取物も不ニ取敢一右往左往に、山〳〵へ逃上候。推次第山林を尋搜而、不レ隔ニ男女一、可ニ斬捨一之旨、被ニ仰出一、八月十五日より十九日まで、御著到候而諸手より搦捕進上候分、一萬二千二百五十餘と記するの由也。御小姓衆へ被ニ仰付一、誅させられ候。其外國々へ奪取來、男女不レ知ニ其員一、生捕と誅させられたる分、合可レ及ニ三四萬にも一候し歟。〔信長公記〕

宿怨あるに似たり

長島の役と云ひ、此役と云ひ、信長の一向宗徒に於ける、宛も宿怨あるもの、如しだ。此れは彼が屢ば門徒に手を燒いたから、其の復讎心に驅られたのであつた乎。將た此の如く荒療治をせねば、此の地方を治むること能はずとしての、政略的見地よりして乎。或は政略からも、腹癒せの感情からも、即ち兩者五分五分であつた乎。

一向門徒の俗權押領と信長の嫌惡憎嫉

信長を打算以外、愛憎なしとするも、間違であれば、愛憎以外、打算なしとするも、間違である。信長は心底よりの憎惡的對象物として、一向門徒に對した。然も信長をして、此處に到らしめたるは、一向門徒が、敎權に假託して、俗權を押領したからである。彼は眞宗の敎儀に付て、何等の愛憎を持たぬ。但だ念佛專修の名の下に、世俗的大團體を構成し、天下に橫行するを、怨す可らざる罪惡として、其の滿腔の嫌惡、憎嫉を傾けた。

下間筑後郷民等に殺さる

稱名寺への感狀

下間筑後法橋最後の事

一揆の總大將下間筑後法橋は、今庄の城を落てより、山林に身を隱し、此度は討れざりしな、はるかに程をへて信長公御陣所以後、同年の十月中旬、府中の城の傍下野村と云ふ所にて、あやしの辻堂に筑後法橋乞食の體にて忍居けるを、見知りたる者有て、下野、野中、黒目、米納津四ヶ村の郷民ども蹤集り忽に切殺す、猶も是まで付まとひける下間が郎黨富長と云者、是を見て怒ちに川へ飛入り、身を投げ死失けり。右此四ヶ村は本願寺の門徒にあらず、高田派黒目村の稱名寺が檀徒なるゆゑ、本願寺派と偏執して、本より一揆とも同心せず、今又下間を討取出しけり。稱名寺祐慧大によろこび、其比の守護柴田勝家へ首を渡す、勝家悦で家人毛受勝助を使とし、彼首を信長公へ獻上申す、扨黒目村稱名寺には、恩賞として知行少々あたへけれども、沙門の身として人の首を切たる恩賞申請候まじきと辭退しければ、感狀をぞ遣はしける、其狀に曰く、

今度下間筑後法橋被二討捕一忠節無二比類一候、其方門徒歸參人等、不レ可レ有二別儀一之狀如レ件

修理亮勝家　判

天正三年十月十八日

高田門徒黒目村稱名寺住持へ

とぞ有ける、此稱名寺は古の佐々木四郎高綱が後胤也と云傳へぬ。是は誠に忠義なれども、右の一揆の坊主どもは似合ぬ僧の腕だてゆゑ、科なき土民に一揆を起させ、寺檀ともに亡び果て、天下萬世の末までも、物笑とぞ成にける。〔總見記〕

信長一乘谷に移陣

北陸經略の本營成る

【二六】北陸經略の端緒

八月廿三日（天正三年）信長は、一乘谷に其陣を移した。而して羽柴、明智、稻葉父子等をして、加賀へ打入らしめた。八月廿八日には、豐原に陣を轉じた。彼は加賀經略に、全力を殫すの時にあらざるを看取した。此れ直ちに謙信との斷交を意味し、更らに一轉して、接戰を意味するからである。到底は此處に落ち著く可きである。然も信長は、未だ之に對する、十分の準備がない。故に加賀の經略は、纔かに其の鋒芒を露はす丈に止めた。

即ち能美郡、江沼郡を取り、檜屋城、大聖寺山城を作り、簗田左衞門太郎、佐佐權左衞門、及び降人の堀江景忠等をして、之を守らしめ。九月二日、豐原より北庄に抵り、自から繩張して、城を作り、之を北陸經略の本營とし。柴田

北陸要地に諸將を配置

勝家に越前八郡を與へ、之に居らしめた。大野郡の三分二を金森に、三分一を原に與へ。府中に足懸を構へ。不破彦三、佐々成政、前田利家に二郡を與へ。武藤には舊に仍りて、敦賀郡を與へ。丹後を一色左京太夫義定に與へ。明智光秀をして、丹波に徇へしめた。其の桑田、船井の二郡は、細川藤孝に與へ、荒木村重をして、播州奥郡に赴き、人質を徵せしめた。而して九月十四日には、其陣を豐原より北庄に移した。

九月十四日、信長豐原より北庄迄、被レ納ニ御馬一候。瀧川左近、原田備中（塙九郎左衞門）惟住五郎左衞門（丹羽）兩三人をして、北庄足羽山に、御陣屋御普請被ニ申付一、御馬廻、御弓衆、歴々固ニ前後一、結構さ中々催レ興事候。賀越兩國之諸侍、馳集以ニ有縁一歸參の御禮、門前成レ市事候。〔信長公記〕

歸陣に際し命令を守將に與ふ

彼が北陸經略の端緒も、此の如くして開始せられた。彼は其の歸陣に際し、命令を守將等に與へた。此れは其の直筆でなければ、其の口授であらう。

苛斂誅求を誡む

掟條々

一　國中へ非分課役不レ可レ申レ懸。但差當子細有て於レ可ニ申付一者、我々へ可ニ相尋一隨レ其可ニ申出一事。

此れは苛斂誅求を誡めたのだ。

地侍待遇の方法

一　國に立置候諸侍を雅意に不レ可レ扱、いかにも悃にして可レ然候。さ候とて帶紐を解候樣には有まじく候。要害彼此機遣簡要候。領知方嚴重に可ニ相渡一事。

地侍を待遇するの道、說き得て分明。『帶紐を解候樣にては有まじく候』の一句、信長にあらざれば、云ふ能はず。寬猛、兼濟の術、此の如きのみ。

裁判の公平を期す

一　公事篇之儀、憲法たるべし。努々贔屓偏頗を不レ存可ニ裁許一。若又双方存分不レ休に於ては、以ニ雜掌一我々に相尋可ニ落著一候事。

裁判の公平を期する事ぢや。信長は正義公平が、治安の根本たるを熟知した。彼は峻克であつたけれども、決して偏頗はなかつた。而して偏頗が大禁物であ

つた。

公家領の還附

一　京家領之儀、亂以前、於當知行者可還附、朱印次第たるべき事、但理有之。

此れは從來横領したる、公家領等を、還附す可しと云ふとぢや。『但理有之』とは、特別の理由ある者は、此限にあらずとの意ぢや。

關所廢止

一　分國いづれも諸關停止之上は、當國も可爲同然事。

國持城持の座右銘

關所廢止のこと也。信長の經世的眼識は、恒に此の方面に閃く。

一　大國を預置之條、萬端に付機遣油斷有ては曲事に候。第一武篇簡要候。武具兵粮嗜候て、五年も十年も慥に可拘分別勿論候。所詮欲を去可執物を申付所務候樣に可爲覺悟候。子共寵愛せしめて、猿樂、遊興、見物等可停止事。

放鷹の可否

國持、城持の拳々服膺す可き、座右の銘である。

一　鷹を使ふ可らず、但足場とも可見ためには可然候。さも候はずば、無用に候。子共之儀は、不可有子細候事。

放鷹も、土地要害等を蹈査の方便としてならば可、遊興としては不可。

人物駕御賞勵の手段

一　領中之員數に雖可寄候と、二三ヶ所も、給人不付、是は忠節の輩それ〴〵に可扶助す地に候由申可抱置候。武備勵候へども、可恩賞所領無之と諸人見及候はゞ□には勇も忠義も可淺之條、其分別尤候。給人を不付候間は、可爲藏納事。

此れは領内に、若干の闕所を保留し、何時にても武功の者に、新知を與へ得可き準備あるとを、部下に知らしめ置き、其の忠節を勵しむ可しとの義ぢや。信長が人を駕御、督勵するの手段は、概ね此の一節中に、看取せらるゝ。

信長中心主義を以て諸將統率

一　雖事新き子細候、於何事も信長申次第に覺悟肝要候。さ候とて無理非法之儀を心に思ひながら、巧言不可申出候。其段も何とぞかまひ有之者、理に可及、聞屆可隨其候。とにもかくにも、我々を嵩敬して、影後にても、あだにおもふべからず。我々あるかたへは、足をもさゝざるやう

に心もち簡要候。其分に候へば、侍の冥加有て、長久たる可く候。分別專用に候事。

天正三年九月　日

全文是れ信長の自個告白

是れが全文の大主腦である。信長は、信長中心主義を以て、諸將統率の原則とした。曰く、信長を信賴せよ、信長を嵩敬せよ、信長の爲めに全心、全力を傾倒せよと。要するに全文、越前國の支配者に對する訓令たると同時に、又た信長の自個告白である。何人が信長の心底を忖度するも、信長が斯く自から告白するの痛快、眞率には若かぬ。

追申狀

越前國の儀、多分柴田令二覺悟一候。兩三人をは、柴田爲二目付一兩郡申付置之條、善惡をば柴田方より可二告越一候。互に磨合候樣に分別專一候。於二用捨一者可レ爲二曲事一者也。

天正三年九月　日

不破河内守殿

佐々内藏助殿

前田又左衞門殿

此れは追申である。『互に磨合候樣』の一句が、主眼である。

信長岐阜に歸城

信長は此の如く彼等に申付け、九月廿三日北庄より府中に、而して廿六日に岐阜に歸城した。

第六章　信長の進一歩

【二七】文明政治家としての信長

信長は多角多方面の文明政治家

信長は直情徑行で、所謂る蠻殼の標本らしく思はるゝが、其實教養もあり、趣味もあり、多角、多方面の文明政治家であつた。但だ彼は東山義政流儀の、幽玄趣味、獨樂嗜好のみでなく、天下と與に樂しむの大規模、大抱負があつた。彼は實に交通が、人生の必需物たるを認め、苟も之を沮害するものは、悉く之を除いた。彼は一國を取れば、一國の關所を廢し、二國を取り、三國を取り、取るに從うて、其の分國内の交通を無礙ならしめた。啻だに此れのみならず、又た大いに道路を修築した。

領内中の道路修築

去年（天正二年）月迫に、國々道を可レ作の旨、坂井文介、高野藤藏、篠岡八右衛門、山口太郎兵衛、四人爲ニ御奉行一被ニ仰付一、御朱印を以て、御分國中御觸有レ之、無レ程正月中出來訖。〔信長公記〕

彼は思ひ立ては、矢も鐵砲もたまらぬ。乃ち一氣呵成に、歳末より新年にかけて、其の領内中の道路を修築した。

三間道路に並木の移植

江川には、舟橋被ニ仰付一、嶮路を平らげ、石を退て大道とし、道の廣さ三間に、中路邊の左右に、松と柳植置、所々の老若、罷出、洒レ水、拂ニ微塵一致ニ掃除一候へき〻〔信長公記〕

三間道路と云へば、馬車、自動車の無き時節には、立派な大道ぢや。其の並木に松柳を植ゑ、水を洒ぎ塵を拂ふ。三百五十年後の今日と雖も、斯程迄には、道路の世話は行屆きて居らぬ。

交通の邪魔物を一掃

先年より御分國中數多有レ之諸關、諸役儀等、被レ成ニ御免一、所以路次の滯、聊以無レ之、誠に難所の忘ニ苦勞一、牛馬のたすけ、萬民穩便に成ニ往還一、黎民烟戸さゝず、生前の思出、難有次第成と尊卑擧ニ十指一、恭拜し申候。〔信長公記〕

信長と治國の經綸

彼が人心を得たる、良に理由がある。彼は關税、入市税、渡税、橋税抔、あらゆる交通の邪魔物を一掃し去つた。天下の氓が、皆な信長の下に立たんとを希うたのも、當然である。此に比すれば、均しく軍國主義でも、信玄の如きは、籠城的富强策に止まるの憾を免かれぬ。世或は治國の經綸に於て、信長よりも、信玄をば勝れりとするは、平允の見でない。

信長は忍人の骨頂

信長は決して心腸の人でない。彼には忍人の骨頂である。彼には溫情の持主として、他に誇る程の資格はない。

寺院、坊舍、民家、商屋迄、開袋の底をふるふ樣に、不レ殘搜し出されて、爰にては百、二百、彼處にては五十、七十、高手小手に繩をかけ、袖より袖へ繩を通し、五十人三十人づゝ、一繫に搦めつれて、珠數の如に引貫き、五十人繩、三十人繩と、數に應じ札を付て、或は本陣に引て參り、或は當座に切殺し、又は弄り殺にむしり散らし、或は生ながら首を挽拔かれ、其外驛所〳〵のつまり〳〵には、五十、七十、百、二百づゝ磔にあげ、鳶や、烏の餌食となる。〔總見記〕

彼には彼流儀の涙

此れは越前一向門徒屠殺の情況ぢや。然も彼の惡むや、其の全力を傾けて惡むが、彼の胸奥には、復た一片憐憫の情なきにあらずだ。彼には彼流儀の涙もあつた。

信長と山中の乞食

當時美濃、近江の境なる山中と云ふ所に、一群の乞食があつた。彼は京都往復に、屢ば之を見、乞食は住所不定の者であるが、此處の乞食は、何故に永住するかと聞いた。土地の者は、彼等の先祖、常盤御前を殺し、其の因果で、代々片輪者と生れ、此の如く候、即ち山中の猿とは、此者等の事にて候と答へた。

山中の猿に木綿廿反を與ふ

六月廿六日（天正三年）俄に御上洛、御取紛半、彼者の事思食出され、木綿廿端、御手づから取出し持させられ、山中の宿にて、御馬をひかへさせられ、當町の者共、男女によらず、何れも罷出候へ、物を被仰付候はんと御諚候。如何なる事をか可レ被仰出と、難儀ながら罷出候處、木綿廿端、乞食の猿に被レ下候。所の者共請取、此半分を以て、隣家は小屋をさし、不飢

死一樣に、情を懸て置候へと上意候。〔信長公記〕

此れは彼が長篠役を終りて、岐阜に歸りて、約一個月後の上京ぢや。其の急遽、倉皇の際、尙ほ山中の猿の爲めに、甘端の木綿を携帶するが如き、何等の情趣ぞ。然も其の半を以て、小屋掛の料に供せしむるが如き、如何に徹底的なるよ。

自から模範を示す

其上此隣郷の者共、麥出來候はゞ、麥を一度、秋後には米を一度、一年に二度づゝ、毎年心落に少宛取せ候はゞ、信長可レ被レ成二御祝着一と被二仰出一。忝なさの餘に、乞食の猿が事は、不レ及レ云、山中町中の男女、袖を絞らぬ者もなし。〔信長公記〕

人間としての信長に貴重の資料

彼は自から模範を示して、其の郷民に、救濟の方法を授けた。彼の注意は、實に周到であつた。乃ち慈善を行ふさへも、信長は何處迄も、信長式にやり付けたのである。

斯事を些事と云ふ勿れ、英雄の心緒は、却て這般の些事より覗ふを得るものぢや。吾人は返す〳〵も太田牛一が、斯る記錄を、後世に傳へたるを、感謝せねばならぬ。武將としての信長には、左程大切ではないが、人間としての信長には、極めて重要なる資料である。

【二八】京都と信長

信長の勢力增進と京都との關係

信長の勢力增進するに從ひ、京都との關係も、愈よ密切となつた。皇室も彼に依りて、其の尊嚴―の若干―を恢復した。公家も彼に依りて、一息をついた。市民も彼に依りて、平和と、秩序とを得た。日本の各所、各地には、今尙ほ戰亂絕間ないが、單り市都は、衣冠禮樂の鄕として、吉祥昇平の氣象を呈した。信長が朝廷、及び公家に持て囃されたるも、偶然でない。市民が信長に謳歌したのも、當然である。

道樂を幇助機關となす

信長は所謂る狹義の實用家ではなかつた。彼は非常なる道樂者であつた。彼は放鷹が好物であつた。角力も好物であつた。觀世の能、幸若の舞も、好物であつた。刀劍武具も好物であつた。馬も好物であつた。明眸の佳人、紅顏の少年も好物であつた。別けて茶の湯に至つては、目のなき程の大好物で、之に關係する諸式、諸道具の如きは、殆んど全力を須ひて蒐集した。然も彼は如上の道樂の爲めに、其の本務を閑却せざるのみならず、却て此を其の幇助機關となした。乃ち彼は無用の用を以て、有用の用の足らざる所を補足した。

信長今川氏眞の蹴鞠を見る

天正二年三月、東大寺の名香蘭奢待頂戴以來、彼と朝廷、及び京紳との交際は、殆んど他人行儀を離れた。別言すれば彼も亦た、其の仲間入をしたかの如くであつた。天正三年三月廿日には、京都相國寺に於て、今川氏眞の蹴鞠を見た。其の仲間には、三條、飛鳥井、烏丸其他の諸卿があつた。氏眞は此より先き宗祇香爐と、千鳥香爐とを、信長に献じたが、前者を返却し、後者を留置した。今回も亦た百端帆と稱する、釣花入を呈した。氏眞も隨分呑氣な男である。然も不肖も此に至れば、却て明哲保身の三昧に入つたものと見て可なりだ。放鷹が武士的道樂なれば、蹴鞠は公家的遊戯ぢや。前者は自から之を行ひ、後者は之を見物した。

禁中の御鞠を拜見

同年七月三日には、彼は禁中の御鞠を拜見した。是れ長篠戰勝後の上京である。

七月三日於二禁中一、親王樣御鞠被レ遊、式掌の儀式、御結構不二申足一、御馬廻許被二召列一、御鞠過候て、信長黑戸の御所御をき緣まで御祇候、忝も天盃御さい之內にて御拜領、御見物は清涼殿之御庭也。〔信長公記〕

知る可し信長と朝廷との關係

信長と、朝廷との關係、以て知る可しだ。彼は決して木曾義仲の如く、人間の中に、偶然飛び込みたる山猿でなく、彼は已に其の仲間入をした。安國寺惠瓊の言を假りて云へば、已に公家に成り濟したのだ。彼は當日、其の官位を進めらる可く勅諚を忝くしたるも、之を辭退して、却て其の臣下に叙爵せしめた。松井友閑は、宮內卿法印に、武井夕菴は、二位法印に、明智十兵衞は、惟

勅諚を辭退して臣下に叙爵